
驟雨

デン助

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

驟雨

【Nコード】

N1096K

【作者名】

デン助

【あらすじ】

術式とは現代の魔法である。しかしそれは長年の調べによって一種の学問である事が判明した。それを世間から切り離された学院という場所で学ぶ少年は、しかし術式の才能がない劣等生だった。そんな彼は学院きつての才媛、キリサキと出会う。暖かかった日常から非日常に投げ出された少年は、術式が戦う為の道具だという事を思い知り、戸惑いながらも生きる為に戦う事を決意する。

第一章 ウイッチクラフト（前書き）

以前掲載していた同名の作品を書き直しました。不定期連載となります。よろしくお願ひします。

第一章 ウイツチクラフト

第一章 ウイツチクラフト

悴^{かし}んだ手に白い息を吹きかける。少しだけ暖かかったが、冷えた空気がその熱をまたすぐに奪っていった。

季節は秋の終わり。冬に変わる時期だった。背の高いビルが立ち並ぶ街は薄暗く、空には青と黒のグラデーションが見える。幾つかの星が覗いていた。

行き交う人の声、店から漏れ聞こえる流行歌、車やトラックの排気音やクラクションが入り混じって耳に届く。手を擦り合わせて、再び息を吹きかけた。寒い。

その女性は左手の内側に付けている腕時計を見た。もう一時間も待ちぼうけをくっていた。寒さを防ごうとポケットに手を入れる。赤いトレンチコートは両前型のダブルボタンで、本来ならば腰に巻くベルトが後ろで一つに結ばれていた。

金色の眼をしている。周りにいるような日本人ではない。癖のない肩までの金髪の下に、雪の肌がある。二十歳ほどだった。女性はビルの壁に背を預けて、目の前の交差点を見た。中央分離帯のある道路、赤く光る信号機、ネオンの眩しい広告塔が眼に入る。

「ふー……」

それから眼を離し、空に向けて白い息を吐いた。交差点には会社帰りのサラリーマンやOLが、青になる時を待っている。

視線を戻した女性はその中の一人、疲れた表情をしたサラリーマンに目を付けた。人の群れへと入っていく。膝までの黒いスカートから伸びる足は同色のストッキングと靴に包まれていて、女性の細い体を強調していた。

薄い唇が引き結ばれる。信号が、青に変わった。

人の流れに従って横断歩道を歩く。前からも同じような人の波が押し寄せる。波同士がぶつかり合う。女性はするり、するりと人を避けて進んだ。視界の端に先ほど目を付けた男がいる。黒に近い紺色のスーツを着ていた。歳は三十に届くだろう。くたびれたブリーフケースを肩から提げている。女性は周囲の人間に紛れて尾行をしていた。

周りの人間が分かれ道ごとに減っていき、男の足は静かな坂道を登り始めた。この先はマンション街区だったかな、と女性は頭の地図を開いた。人が減った事でいよいよ足音に誤魔化しが効かなくなってきたので、障害物に隠れるようにして進んだ。

男が振り返った。緊張した面持ちだった。

「誰か、いるのか？」

無論、女性は返事をしなかった。流石に視線だけはどうやっても誤魔化しが効かない。それに人間というものは己に降りかかる『危険』には敏感だ。女性の視線がそういうものを含んでいるのを、本能的に察したのかも知れない。

やがて男は、マンション街区へ続く路を逸れた。何か思惑があるのだろう、と感じ、懐に隠しているものを確認した。

この女性に怨嗟や愛憎といった類の感情は見られない。加えて客引きでも、仕事の同僚でも、知り合いの類でもない。初対面だった。女性は左耳に人差し指を当てる。小さな声で言った。

「キリサキより本部、対象が経路を外れた」

耳に付けられているのは、黒い骨伝導マイクロフォンだった。そのスイッチを入れて通信したのだ。相手からの応答に、キリサキと名乗った女性は了承の返事を返した。

「了解、追跡を続ける」

キリサキは暗くなってきた道に目を凝らし、男の後を追った。

この団地、マンション街区には名前通り巨大なマンション群が立ち並ぶが、建造当時はバブル末期というのもあって全てが完売した

訳ではなかった。

管理放棄された手放しの巨大建造物が街区の片隅に林立する。一階〜一四階立ての中高層マンションがひっそりと佇む。日本が打ち上げた最後の花火の折に肅々と完成し、販売が開始されたまま、現在まで買い手が付かず捨て置かれ、朽ち果てた。

そしてそれらに囲まれて造られた、人気のない市民公園。枯葉が煉瓦造りの道端や植え込みのそこかしこに積み、ろくに手入れもされずゴミの類も放置された場所だった。

そこに男が入っていく。キリサキは二つの結果を予想した。対応か、抵抗か。どちらにせよ彼女のやる事に変化はなかった。

かつ、かつ、という音を立ててパンプスが園内へと踏み込んだ。正面に位置する噴水広場で男が立っていた。こちらを見る。しかしキリサキを捉えて、呆然とした。

整った目鼻立ちにすつきりとした顎のラインを持つキリサキが、稀に見る美貌であつたからだろう。穏やかな目元をした男は、口を開いた。

「私に何か、用があたりで？」

「こんばんは、初めまして」

キリサキの声は耳触りの良い声だった。

「誤魔化したつてダメよ。私達の眼からは、逃げられないんだから」
月明かりが厚い雲に遮られて、辺りに影が落ちる。金の眼が影の中で際立った。

「何を言っているのでしょうか」

「知性ある何か。人外。まあ呼び方は何だつて良いわ、私の任務に変わりはないものね」

キリサキはコートの内ポケットに右手を差し込み、抜いた。そこに握られていたものは男を驚愕させるに十分な、鋼鉄の塊だった。

「私が何なのか。私達が何なのか。まだ、解らない？」

自動拳銃だ。直線的なフォルムを持つそれには銃口に長い筒のよ

うなもの

サブレッサー
減音器が装着され、銃身下部には照準補正用の赤外線レーザー・エイミ

ング・モジュール

照準器　小さな箱にレンズの付いたものが装着されている。
音を出さず、正確に相手を撃ち殺す　それは暗殺用の拳銃だっ
た。

キリサキはさらに空いている左手を反対の内ポケットに差し込んで。そこから取り出されたのは、刃渡り二十センチほどの肉厚な刃を持つ鋭利なコンバット・ナイフだった。

光の反射を抑えるマット加工が施された黒塗りの大振りなナイフを逆手に持ち、銃を構える右腕の肘下で、交差させる。

右手の銃はまっすぐ相手を捉え、左手のナイフはその先端を相手に向けている。射撃戦闘と近接戦闘の両方に対応出来る……CQCクロス・クォーターズ・コンバットの構えだ。

「ま、待って下さい！　貴女の言っている事はよく解りませんが、とにかく話し合しましょう」

男は両手を慌てて振った。降参の意を表しているようだった。その切実な言葉に、女性は眼を細めた。聞く気は、無い。

自動拳銃が火を噴く。引き金を引く動作や意志に一切の躊躇は無かった。

「っ、あ……」

プシュツという空気が抜けるような音と共に男性の眉間へと銃弾が打ち込まれる。眼を見開いたまま仰け反って倒れ、動かなくなる。痙攣させる暇もない、一方的な殺人瞬幕。

即死に間違いはない。しかし女性は構えを解かない。

それどころか、じりじりと近づき、その屍骸に銃弾を四発撃ち込んだ。

顎、喉、心臓、みぞおち。正中線という体の中心線に沿った、急所のみを正確に。

ともすれば死骸をいたぶる、狂気に走ったとも思われる行動だが、彼女の眼にそういったものは見受けられなかった。ただ、確実に対象を破壊する行動、いや作業である。

「　キリサキから本部。『術式』使用の許可を求める」

左手を動かし、耳に人差し指を当てて静かに呟いた。銃は変わらず男の死体に向けられている。

マイクロフォンは骨伝導である為に周囲の騒音に遮られる事なく通信でき、また周囲に通信内容を聞き取られる心配もない道具だった。相手からの応答に返答する。

「クラスC以下、了解」

キリサキは耳から手を離し、再び先ほどの構えを取った。通算六撃目を放とうと引き金に指を掛ける。

だが、それには不可解な現象が伴った。銃口が光る。幾多もの歯車が互いに作用しあい、円環の中に納められている模様が見えた。時計の内部に似ている。それは『紋章』だった。薄っすらと燐光を帯びる、魔法のような超現象。

直径五センチ、掌大ほどの薄透明なそれが右手に構える銃の、弾丸が発射される部位である銃口を包むようにぼんやりと浮かび上がった。

それは『現代の魔法』である。百年以上もの昔から歴史の裏で生まれ、改良され、発展し続けてきた超自然現象を引き起こす数秘学プログラム。

コート・オゼン・ドームス
トリガー
「術式装填」

引金を、引き絞る。瞬間放たれる弾丸、加速し音速衝撃波の甲高い嘶いななきを響かせて男の骸へと向かう。

弾着。赤茶けた煉瓦に弾痕が穿たれた。キリサキはそこに男の死体がないと確認。物音に反応して咄嗟に後ろへステップする。距離を開けた。途端、目前を横切る突風。横からの突撃だと推測して、その姿を眼で追った。

赤い光が、暗闇に二つ浮かんでいた。視線を引くと、夜を保護色とした体がそこにあった。のっぺりとして艶がない。質感の感じられない、何か

それはキリサキの予想通りのものだった。慌てず構え、銃口を向ける。

形そのものは人間と同じだが、狼の頭部にはキリサキを捉える二つの赤い眼がある。さらに鋭い牙を備え、三角に立つ耳が二つ見え、手足の部分には爪と思しきものが五指ずつ伸びており、鋭利に尖っていた。

体格、およそ成人男性ほど。腕や大腿は人間と比べ物にならないほど太い。しかし先ほどの俊敏な一撃から、動きそのものは見た目より鈍重ではない事が解る。

影絵の狼が向き直り、紅い双眸を嬉しげに細める。獣らしく四つ足で地に伏せた。

ぎりぎりと力を溜める影の体は、すぐにも飛び掛ってきそうな程、バネが撓んでいる。思わず息を呑んだ。肉食の猛獣を目の前に行っている緊張感。威圧感がある。

キリサキが獣に向けて、先ほどと同じ術式を纏わせた弾丸を三点射撃。影は跳ねて横に避ける、着地と同時に、キリサキへと向かう。右の爪を振り上げて飛び掛かる。キリサキは待ちかねていたように口元を、にいと歪ませた。

獣に合わせて自身も接近、それが振り下ろす五本のナイフ、その付け根に銃口を向ける。夜空に向けて金色に光る弾丸が尾を引いて走った。獣が肩から分断されて戸惑う隙にキリサキのナイフが閃く。刃身には雪のように淡く光る、霊子反射光が纏われている。

影の首を左から右にすり抜けた白い『剣』は、さらにそれだけで終わらず、バラバラに影絵を切り裂いた。女が口元に浮かべる笑みは月光に照らされた歪な三日月。

逆手に振るわれるナイフは今、刃渡り九〇センチほどの、白い光を剣身とした『剣』であった。刻まれたそばから影絵を構成していた黒い肉片は、はらはらと散らばって無影無踪^{むえいむせう}。キリサキはそれを見届けてから、CQCの構えを解いた。片方ずつ武器をしまう用心深さは、これと同等かそれ以上の闘いを潜り抜けてきた戦士としての、生き延びる心得だろう。

彼女は戦士である。

『術式』を実戦に組み込んだ試験用特殊戦闘部隊『外事四課』の精鋭だった。

彼女達の扱う『術式』とは特定の意味合いを持った印と特定の韻を踏んだ文字列によって形成された紋章が媒介となり、現実を歪に歪ませる特性を持つもの。

それは幾年月の間に解体され、一種の『学問』であると判明した。術式を解体した場合に判明する構成物は霊子^{マナ}と精神の波長のようなもの。学説では『ゴースト』と呼ばれる。の化合物である霊子^{エッセンス}反射光が紋章を形作り、その紋章に持たされた指向性によって、様々な超自然現象を起こすというものだった。

キリサキの所属するそこは強力な組織母体と人材の供給源を持ち、超自然現象やそれに類する事件を解決する組織だ。警察や軍隊との連携も視野に入れた装備や機密情報閲覧権、さらに独立捜査も許される例外的な存在だった。

左耳に指を当てる。

「キリサキより本部。作戦終了、帰還します」
相手の応答に次いで、何かの報告があった。

「……新入り？ 私が面倒を見るの？ ……そう、長生きしないだろうけど、いいのね？ ……『学院』側からの要求？ また変り種じゃないでしょうね、もうデュドネみたいなのは御免よ、つてちよつと、ああ、切られた」

話している間に荒んだ公園を後にしていたキリサキは、通信相手の問答無用な切断にがつくりと肩を落とした。

空には満点の星が輝いている。それをしばし眺めて、キリサキは再び星空に向けて、はあと白い息を吐いた。

第二章 紋章技術

第二章 紋章技術

冷えた夜気が満ちる深夜、街の十字路に一台のバンが止まった。黒塗りで、街灯に照らされても艶が見えない。後部ドアが開いた。肩までの金髪と、少し厳しい顔つきをした女性がそこから現れて、運転手に二言三言何かを話すと、ドアを閉めた。バンが去っていく。赤いトレンチコートのポケットに手をいれ、目の前に建つ高級マンションへと入っていった。女性はエレベーターの中で、先ほどバンの運転手から渡された一枚の写真を、コートのポケットから取り出して、眺めた。平凡な、眼鏡をかけた少年が映っている。特徴の無い黒い髪と瞳が、人の好きそうな風貌に拍車をかけている。

女性、ベネディクトは金色の眼を細めて、更にもう一枚、写真の少年に関する資料を取り出した。

(あまたあきり 秋田章、『学院』高等部二年。運動能力に欠点が見られるが、学習能力は高い。術式の運用に関する知識は優れており、構築理論や構成技術に高い可能性が見られる……実技に関しては、歴代で……最低？ 何それ)

ベネディクトは眉根を寄せた。信じられず何度もそこだけを見返す。それでも信じられなかった。疑念が湧く。

エレベーターが上昇を始める。一瞬だけ重力が増すような感覚の後、低い音と浮かび上がっていく実感がある。ベネディクトは壁に背を預けて溜息を吐いた。やがて外壁がガラス張りになり、エレベーターが街の夜景を一望出来る高さまで来たのが解った。

(またクセのある人選ね、コード持ちじゃないのを卒業してないうちから寄こすのもおかしいし。何か理由があるのかしら。まあ、あの学院長はいつも突飛だものね。ともかくカタログスペック上では情報処理能力が高いようだから、精々事務処理か情報官制あたりが

関の山ね。サポート役としては、うつつにつけてところかしら)

数え切れない人工の灯りが点く、数え切れない人口が住む街を見下ろして、ベネディクト・アルカデルトは、はあと一つ息を吐いた。

『学院』というのは、日本の奥地に存在する、周りを深い森に覆われた、教育機関である。ある才能を持つ少年、少女を事前に調べて編入させる。その規模は世界中に及ぶ為、学院の中では様々な人種が見受けられる。

ベネディクトを主として、外事四課とそれに関わる人間は全てここから選り抜かれて輩出され、人間の敵とされる黒い獣と戦い、社会の影でその安定を維持するよう働く。というのがその役割である。

黒い獣は人間と対をなすよう『人外』と呼ばれており、人間を捕食して生命力に替える性質を持っている。適応能力もあるのか、外見を人間に模した人外も多く、一見しての発見は難しい。加えて、人間を捕食するという目的の為か身体能力に優れており、人のそれを大きく上回る。

対策としては、既存の銃火器は微小ながら効果の程が認められるが、常軌を逸した肉体再生能力によって銃弾の類では足止めにはならない。携行ミサイル兵器やそれに類するもので、一撃の下に粉砕しなければたちどころに再生してしまうのだ。

大火力兵器はともかく、携行兵器群が効果薄弱であれば次に浮かぶ対策は、被害が及ばないように隔離する事である。しかし前述の通り、人間に扮した人外も存在する以上、それは事実上不可能。

そこで日の目を見たのが、実際に世間に露見したわけではないが、『学院』の伝える術式と、その応用である近接戦闘術である。超常現象、魔法、奇蹟、神秘オカルト。術式はこれらの概念にとても近い、現代魔法とでも呼ぶべき類の代物である。

『学院』が世界中に手を伸ばして求める、ある才能とは、この術式への適性であった。

秋田章は劣等生である。それだけでなく、平凡な見た目、性格、体格に身体能力、引いては座学の成績においても、特に見るべきところのない、凡人だった。人の善さを除けば取るに足らない大勢の中の一人で、それは本人も自覚しており、また他人も彼をそう捉えていた。溜息が漏れる。

「また、駄目だったなあ」

かくりと頂垂れる。諦観がある。自分は無力であるという、現実には打ちひしがれる。眼鏡の奥には自分を嫌う、しかし嫌ってもどうにもならない現実にまた諦めた、力のない眼があった。

学院の屋上から、柵に手をつき、眼下の繁華街を見下ろす。学院は小規模な都市になっており、歓楽街や商店街の類も見られる造りだった。学院本舎を中心に、放射状にそれらが位置している。

若い学生だけでなく、中高年も働く、小さな街。しかし、この街は地図に載っておらず、ただひっそりと、世間の誰にも知られず、隠者のように暮らしている。

秋田章は、落ちこぼれだった。それが彼の眼を曇らせていた。

「次の試験で及第点いかなかったら、他の部門に転向か。これじゃあ専門課程に上がるなんて、夢のまた夢だ」

学院には術式を学ぶ以外にも様々な部所がある。霊子の性質を探る霊知研究部やそれらを応用した武器の開発を行う開発部門などがそれに当たる。章はそれらの中から自分に合いそうなものを挙げて、しかし新しい事を一から学ぶには膨大な時間がかかる事実を思い出して、どうせ自分はそのでも失敗するんだろうな、と頂垂れた。

紺色のブレザーの胸ポケットに付いている、金糸で編まれたワッペンを触る。栄えある学院高等部に所属する証であり、章の努力が実った証でもあった。

（僕は、もうダメなのかな……諦めていいのかな）

風が通り過ぎる。耳にかかる程度で切られた髪がさらさらと揺れた。何度も打ちのめされて、挫折を味わい、その度に努力を重ねて

今に至る秋田章は、やはり今までに何度も同じように諦めようとして、それを踏みとどまってきたが、今度ばかりはその心も折れかけていた。

「あゝあ。実技の成績に先生も呆れてたし……何をやってもダメだし。何やってんだか。どこ行っても邪魔者扱いだし。どうせ僕は、屑なんだ」

柵に寄りかかり、街を見下ろす。赤い電車が走っていく。学院から伸びる路線に沿って。

「僕の居場所って、ここにはないのかなあ」

十階建ての校舎は、高さもそれなりにある。屋上には章以外の姿もないので、彼の呟きが誰かに聞かれる事はない。

「ない、と、思っていた。」

「居場所？」

通りの良い、女性の声だった。章が振り返ると、陽光を照り返す、眩しい金色の髪が眼に入った。同じ学年なのがワッペンで解った。

縦に二本、剣が並ぶ紋章は二年生の証だ。

紺色のブレザーとスカートを生真面目に着こなし、黒いストッキングは見事な脚線美を強調している。女生徒だった。

「秋田君。君、ここに居場所がないって、そう思ってるの？」

「あ、アズマリアさん？ どうしてここに……」

章は慌てて眼鏡の位置を直した。アズマリアと呼ばれた女生徒は、腰に片手を当て、うさなくさそうに眼を細めて、言った。

「別に。図書室からここを見たら、今にも飛び降りそうな顔をして、下を見てる男子生徒がいたから注意しにきただけよ」

半分、冗談だろうと章は受け止めた。口元が綻ぶ。もし本気なら、こんな悠長な態度を取らない人物だと知っているからだ。

「そんなつもりはないよ。それより、君も大変だね。クラス委員なのに図書委員の手伝いなんて」

アズマリアの、頭の後ろで一本に束ねた金髪が風に揺れる。緩やかな、少し肌寒い風だった。

「今日の当番が欠席したからね。全く、クラス委員を便利屋扱いしないで欲しいわ。それで。秋田君、貴方、ここに自分が居られないって、そう思ってるの？」

「それは、その、何と言うか……僕は成績も悪いし、取り立てて特徴もない、劣等生だから。学校にいないほうが、学校の為になるんじゃないかって、思う時もあった……」

アズマリアは、つり眼がちの双眸を伏せた。

「馬鹿みたい。落ちこぼれが勉強する場もなくしたら、余計落ちこぼれるだけじゃない。逃げる前に努力しなさいよ。それに貴方、自信なさすぎ。少なくとも術式の構築理論だけは得意なんでしょう？ なら、貴方、これだけは誰にも負けないって、そのぐらい打ち込みなさいよ。残念な事に構築理論はそれ程、人気と価値がある科目じゃないけど……」

基礎を学び、その応用方法を学べば、後は用済み。章の得意とする分野は決して日の目を見ない科目であり、また、一定以上の構式になると構築まで必要以上に時間がかかる為、敬遠される手法となる。

アズマリアは数歩、章に近寄った。白い肌に眩しい金髪、碧眼がよく見えた。

「でも、使えなければ意味ないし。複雑すぎる紋章は、描写に時間がかかりすぎて実用的じゃないよ。実技でも、必修技能の基礎描写方法は完成までにおよそ二秒。第二位階……ちよつと複雑なのだと四秒以上はかかったらうし」

金髪の少女は顔を上げ、章の横を通り過ぎた。ふわりと、甘いシヤンプーの匂いが鼻についた。

「四秒、ね。私ならそれは七秒ジャスト。コードAを与えられたこの私より、速いなんてね」

「え？ いや、でも。僕が君より優秀な部分なんて、ないと思うよ。学年トップの成績を維持してる君の努力に勝るものなんて、僕は持つてない」

少女は振り返り、柵に背をかけた。
やれやれ、というように語り始める。

「君、図書室に毎日のように、入り浸ってるでしょ」
底意地の悪そうな眼つきだった。

「悪いけど読んでる本、ちよつと覗かせてもらったのよね。そしてらビックリ。学院の勉強からはかけ離れた内容なんだもの。術式をより詳しく知る為なんでしょうけど、だからってその為に逆変換方程式とか、逆写展開式とか、全く訳の解らないものにまで手をつけるなんてね。もう学者か研究者くらいよ、ああいうの勉強するのは呆れたわ」

「そ、それはその、僕もまだ全部解ってる訳じゃないんだけど……ちよつとした可能性、みたいなものを見つけちゃって」

アズマリアは、さも面白そうに眼を細めた。顎に手をやる。

「へえ、可能性って？」

「術士が術式を使う際に生まれる霊子反射光ってさ、人によって色々な波長だったり、色だったり、エネルギー霊子化合音ノイズがあったりするよね。

これってさ、その人なりの適性とか、精神の色とか言われてるんだけど、これって一人につき一つの特徴、なのかな」

「え？ どういう事？」

「ああいや違う、僕が言いたいのはそのじゃない。ごめんね、話下手なんだ。ええと、そう、『異なる術式を同時に行使する事』は、可能か不可能かって話をしたいんだ」

「おかしな事を言うわね。決まってるでしょ。一度に一つの術式しか、普通は使えないわ」

章は頷く。その解は予想していた、とばかりに。

「そうだね、それが普通だ。だから、同時に紋章を描写してはダメなんだ。あらかじめ頭の中にインプットしておいた紋章を、取り出すようにしなければ。僕は、インストール方式って呼んでるけど」

「それって、でも、無茶じゃ……一度に幾つもの計算を、同時にするよつなものよ」

並列した思考による演算。彼はそれを前提とした 人間にはほぼ不可能とされる領域の可能性を、見出したというのだ。

「うん、出来ないよね。恐らく、誰にも。だから、僕のやってる事は無意味なんだ。でも、それしか出来ないから……でもそれも、学院側にはあまり評価されない技能だから、さ」

話は最初に戻るんだよね、と章は続ける。

「僕はやっぱり、無駄な事をしてるんだなあ、と」

少女は首を振った。そんな事はないわ、と言い、屋上から出る為の扉に向かう。

「もう少し自信を持ちなさい、貴方。それにね、秋田君。私、貴方の術式が持つ霊子反射光、好きなのよ。綺麗で、無駄がなくて、化合金音が全然しない。それだけじゃ、頑張る理由にはならないかしら？」

彼女を見ると、ふいとそっぽを向く流れをとり、出口へと歩き出した。章に顔を見せないように。

「さようなら、秋田君。そういえば、忘れていたけど、学院長が呼んでいたんだったわ。話に夢中になって用件忘れてるようじゃ、私もまだまだね」

金髪の少女はそう言って、赤い扉の向こうへと去っていった。後には一人の少年が取り残される。体が冷えたのか、ぶるっと一度震えると、同じように扉をくぐって行った。

（励まして、くれたのかな。落ちこぼれだっけ諦める前に、まだ、やれる事があるって、そう言いたかったのかな。それとも……）

秋田章は、少しずつ、自分の気持ちが前向きになっていくのを感じた。眼が、以前のように意志を宿した。

（居場所は自分で作れって、そう言いたかったのかな）

気にはなったが、それを彼女に問いたですような真似はしたくないと、彼は思った。

第三章 花言葉（前書き）

旅立ちの話になります。よろしくお願いします。

第三章 花言葉

部屋に入ると、最初に紅茶の匂いが鼻に届いた。

踝まで埋まりそうな、分厚い絨毯を踏み締めて扉を閉める。

「お呼びでしょうか」

部屋の主は、正面に居た。章が恐る恐る声を掛けると、窓から外を見ていたらしい学院長は椅子ごとくるりと振り向いた。

「こんにちは、章君。お元気でしたか？」

柔和な目元と表情に、少しだけ緊張を解かれた章はその手元に眼をやった。

「良い匂いですね」

学院長は微笑んだ。章にとっては、父親のような存在であり、幼い頃から面倒を見てくれた、先生であった。その口調も態度も、他の生徒が学院長に対する硬いものよりは親しみが込められている。

「ええ、つい先ほど、良い茶葉が入ったのですよ。」

君の分も淹れましょう、ああ、どうぞ掛けて」

ソファに腰を下ろし、ありがとございます、と礼を言ってから湯気をくゆらせる白磁器を取った。香りを楽しむ。

「それにしても久しぶりですね。」

私も忙しい身なので、ロンドンから帰ったばかりなんです」

お疲れ様です、というと学院長は深く微笑んだ。

「僕の方は、この間のテストで凄く悪い成績を取ってしまったて……」

落ち込みまくりですよ」

かくりと肩を落とす。学院長は眉を八の字にした。赤いベストの下に着た白シャツが良く似合う、四〇歳ほどの男性である。

「君は人一倍努力家ですが、世の中、努力家が必ず成功するという訳ではありませんからね。まあ、これも試練と思うしかありません」

「……先生。どうして僕は、まだ退学にならないんでしょう？ 本当なら僕みたいな落ちこぼれ、とっくの昔に追い出されて、どこか

適当な街の適当な学校に転入してますよね。術式とか学院とか忘れるよう指示されて、普通の学生として……」

学院長は神妙な顔をして、カップを置いた。立ち上がり、窓の外を見る。針葉樹の森が広がっていた。

「それが、気になりますか？」

章は、はいと頷いた。カップを置く。

「理由はありません。君には可能性がある。私の知らない、恐らくまだ術式として認められていない新たな可能性。分類上、第二術式とされる未知の形態です」

「未知の、術式……？」

「それは他の教職員も認めるところです。なので、君には普通のテスト科目では評価出来ない部分が多い。知っていますか？ 君の術式形態は、他の子のそれと違ってものを」

章は驚いて、目を見開いた。どうして、と尋ねる。学院長は眼鏡を押し上げた。

「君は術士としては測れない。」

私達が教える第一術式は、君のそれより遥かに劣っている。君が完成した時、そこにどれ程の違いが生まれるのか、私は見てみたい。それに――

学院長はそこで、一拍置き、章を見た。

「君は、私の息子のようなものですからね」

穏やかに眼を伏せる。章は思わず、先生、と呼びそつになり、それをどうにか堪えた。

それから幾つかの世間話を交わした後、学院長は章に言った。

「実は、君に折り入って頼みがあるので」

「はい。何でしょうか、先生」

学院長はポットから紅茶のおかわりをカップに注いだ。

「率直に言うと、実地研修に行つて欲しいのです。先も言った通り、君の事を学院内で測るのは難しい。なので実際の職場で、当面、活

動をしてきて欲しいのです。勿論、君をサポートする人材も用意します。難しい事はありません、ただ、君が術式を使う際の運用データが欲しいのですよ」

なるほど、と頷いた。先の言葉にある、息子という言葉が強く心に響いた章は、この学院長の期待に応えたいと今、思っている。

「解りました。僕に出来る事であれば、喜んでやらせていただきます」

ですが、と付け加える。

「僕は満足に術式を使える訳じゃありません。

一つも、です。そんな僕が実地研修なんて、大丈夫なんでしょうか？」

それを聞いた学院長は背後の戸棚から何かを取り出した。章には、それは腕に嵌めるブレスレットのように見えた。

「これをあげましょう。元々、君用に作らせた特注品です。

ダブルエー
AAアームドインプラントと言います」

ごつく、黒く、到底アクセサリには見えないものだ。渡された章はそれをしげしげと眺め、直径は五センチ程で、厚さは一センチ程だなど見切る事が出来た。腕輪の外側に、水晶玉のような球体がつくり埋め込まれているのに気付いた。そこだけが強調するようにデザインされている。

「これは、何ですか？」

「過去からこれまでに取れた君のデータを元に、鍵となる精神波長を放つよう調整されたものです。そうですね、君の可能性を解き放つ、第二術式の起動キーとなるものかな。ただ注意して下さい。一度着けてしまうと、もう外せません。ですがその代わり、君は私達もまだ知らない、強い力を手にする……かも、知れない」

最後が曖昧だった事に不安を感じる。そううまく話があるだろうか、もしかしたら、まさかとは思うが、担がされているのかも、という、疑惑。

腕輪は手を通して嵌めるタイプで、ボタンやベルトのようなもの

はない。鋼鉄製の、頑丈で、しかしところどころフレームが見えている。恐らく、嵌めた時にがっちり固定されてフレームは隠れるだろう造りだった。

確かに、一度着けたら外せそうもない。

「ちよ、ちよっと考えさせて下さい」

学院長は頷いた。流石に戸惑うだろうと解っていたのか、落ち着いている。ただ、着ける際には必ず右腕に、と付け加えて、再び力ツプに口をつけた。

翌日、すぐにでも出立しなければいけない事情があるというので、章は急いで旅支度を済ませる。というのも、宿泊に必要な洗顔セットと着替えだけで良いというので、それらと少ない勉強道具をバッグに詰め込み、学院の裏口に向かった。

結局、買出しなども含めて十時近くになってしまった。途中、校舎の中にある広いホールを通らなければならず、そこで運悪く、章はクラスメイトに見つかってしまった。

「秋田君……？」

（あ、アズマリアさん？）

急いで階段を駆け下りる。ガラス造りの自動ドアへ向かっていた章のもとへ来ると、生真面目に注意した。足元には赤い絨毯が敷かれている。学院全体がそういった装いだった。

「貴方、授業にも出ないでどこへ行つて、いえ、どこへ行こうというの？ 今は休み時間だけど、裏口から抜け出しても行ける場所なんて……」

「ああ、うん、ちよっと、行かなくちゃならなくなつて」

アズマリアは疑惑の表情を深めた。

「どつという事……？」

（大きな騒ぎにはならないと思うし、彼女にだけは話しておきたいな）

章は、彼女とはよく会話し、それなりに仲が良かった事を頭に浮

って」

「そう。学院長を信じるのはいいけど、あまり信じすぎないようにね。あの人、黒い噂が絶えないから」

「そうなの、と疑問をぶつける。」

「卒業した生徒は術士として、いえ、戦力として軍や特殊部隊に送られるらしいわ。それに人体実験とか薬物開発とか、かなり危ないものもあるわね。貴方の父親代わりの人をこう言うのも心苦しいけど、あくまで噂だから」

「言わないよりは良いと思っただろう、しかし覗く横顔は暗い。」

「だから、もしかしたら、研修というのも危ないものかも知れない。術式が満足に出来ない君をそんなところに送るはずないと思うけど…… 思いたいけど、そういう噂がある以上、安心は出来ないわね」

「怖い事言わないでよ。それに学院長はそんな人じゃないよ。今まで僕に色々教えてくれた親代わりの人で、子供の頃から面倒見てくれた人なんだから」

「彼女は頷き、振り向いた。両手を頭の後ろに伸ばす。」

「これ、貸してあげる」

「そう言っつて、髪留めを外し、章に手渡した。金色の髪がばさり、と腰まで広がる。綺麗だな、と章は思った。」

「手の中を見ると、星のような形をした髪留めだった。これは、と聞くと彼女が答えた。」

「エーデルワイス。スイスの国花よ。私の故郷ね。日本じゃウスユキソウって言うらしいけど…… 私のお守り」

「え、そんな、大切なものじゃ」

「ええ、貸してあげる。その花言葉は『勇気』なの。私はそれに何度も救われて、励まされた。でも今は、私よりも貴方の役に立つでしょうから」

「アズマリアは再び背後を振り向いた。章は何度も彼女のこういつた仕草を見てきたが、それが照れ隠しであるというのには、まだ気付いていない。」

「……もしかして、返しに来たって、事かな」

「少しだけ肩を震わせた後、さっさと行けば、とアズマリアは言った。」

章は、行ってきますと告げて、裏口から出て行った。やがて車のエンジン音がして、離れていくのが解った。

「……いつてらっしゃい」

花言葉というのは、一つの花にも複数存在し、それによってお見舞いに向く花や甲いの花など様々な用途に分かれる。

エーデルワイスの花言葉は、勇気、忍耐、大切な思い出。そして、初恋の感動である。アズマリアは勇気と言っただけで、章はそれに気付かなかった。

第四章 初陣

長い時間、車に揺られて着いた先は、大きな街だった。

思わず、秋田章は溜息を漏らした。ふわぁ、というそれは、白く煙って流れて消えた。

見上げる程のビルも、視界を埋め尽くす建物も、排気ガスを吐き出す自動車の群れも、ひしめきあうような人々も、章にとっては初めて見るものだった。どこか違う国に来たのではないかという思いさえ湧き、道端の電光掲示板やセールの宣伝旗などを見て、日本語に少しでも安心感を覚えた。

青空に、太陽が高い。ひとまず章は先に渡されていた一枚の書類をカーキ色のコートのポケットから取り出し、四つ折にされていたそれを開いた。乗せてきてもらった車は、運転手に挨拶を済ませるとさっさと帰ってしまった。

(ポートリンクビルの展望フロアに、待ち合わせ、十二時。って、もうすぐ、あと三十分ぐらいで時間になっちゃうよ。そのビルってどこだろう)

あたりを見回す。立体駐車場の、Xが横並びになっている風景を右手に、道路は四車線、歩道の先にバス停が見える。章は、そこに近づき、道を尋ねた。

紺色のスーツを着た男性は、まず街を知っていなければ解らないような、どこの看板を目印に、右に曲がって、という話をして、時間通り停留したバスへ乗り込んでいった。

章は、少し不安になったが、それを信じて行ってみる事にした。

結局、到着したのは五時間後だった。自分は方向音痴なのではないかと思ひ込んだ。釣瓶落としという言葉のまま、落ち込んだ夜の帳には幾つか星が瞬いていた。気分が、沈む。

眼鏡の位置を直し、ポートリンクビルに入っていく。案内板を見

ると、展望フロアまではエレベーターで行くようだ。一般の人も頻繁に出入りするらしく、しかもこの時間はカップルが待ち合わせしているのか、待っている人は多く、三つあるエレベーターはフル稼働していた。階数は、六十階あった。

(さすがに帰っちゃってるかなあ……)

例えば、相手がもういなかったら。五時間待てる人間など稀である。その想像はどんどん膨らんだ。弱りきった表情で、エレベーターに乗り込む。きつい香水の匂いが蔓延していた。我慢する。ちんと音がして、扉が開いた。展望フロアにはやはり、人が多くいた。章は視線を走らせる。書類に書いてあった目印は、赤いコート、金髪。相手にも自分の情報は行っているらしく、ここで妙な動きをするのは躊躇われた。何よりも、注目を集めない事、という注意事項が書類にあったのだ。章は、遅刻した上に失敗までする訳にはいかない、と自分を落ち着かせた。

三十分経った。やはり、見当たらない。壁の時計は無情に時を刻む。周りはカップルばかり。独りぼっちだった。星を眺めてみる。街の灯りでやや見えづらかった。

……一時間経った。カップルは徐々に数を減らしていった。章は木製の手すりに寄りかかる。目の前には何層も張られたガラスを透かして、夜に染まる街が見下ろせた。

(これだけ沢山の人がいる。僕が、これだけの人の中にいる。

でも、何でだろう、少し、寂しい)

たくさんの人の中にも、誤魔化せない、寂しさがあった。誰かと繋がりたい。そんな思いがある。知らない場所で、知らない人達の中で、独りぼっちは、嫌だ、と。

(居場所……)

コートの上から、下に来ているシャツの、ボタン留め胸ポケットに触れる。硬い手触りがある。エーデルワイス。

(勇気の、花言葉)

章は、それで、少しだけ寂しさを吹っ切れた気がした。恐らく、

時間が立てばまた襲ってくるだろうとは解っていた。それでも、今は、それで良いと思った。一人ではないと思えた。

（探そう。もしかしたら時間に遅れた僕を探しているのかも知れない。誰だって五時間も待たされたら不安になる。行き違いになっただけの可能性もあるし）

そう考える事が出来ただけでも、章は勇気の花に感謝が出来た。

最初にポートリンクビルの周りを、ぐるりと周回した。目印の服装をした人はいない。章はビルを離れて、夜の街を歩いた。眩しいほどの電光彩色が眼に飛び込んでくる。息は白く、寒かった。通り過ぎる自動車が、近くでクラクションを鳴らした。心臓が飛び跳ねた。横断歩道を渡る。探す範囲を広げた。

結局、深夜になっても見つからなかった。当てもなく探して見つけられる程、人探しは簡単ではないと実感した。

ポートリンクビルまで戻ってくる。途中、歩き回ったおかげで覚えた地理を頭に浮かべると、近道が出来る裏通りがあるのを見つけて、そこを通った。

しかし。それが、運のツキだった。

誰もいない駐車場を横切る。幸いにも悪漢に絡まれるような心配はなさそうだった。

（ん？ あそこに座り込んでる人、具合が悪いのかな……）

酔っ払いのようでもあり、ホームレスのようでもあった。ぐったりと、手足を地面に投げ出して、一輛の車に背を預けている。くたびれたスーツを着崩した、中年の男性。

知らないふりが出来る程、世間慣れは、していなかった。

「もしもし。あの、大丈夫ですか？」

救急車を呼びましょうか、と言うと、その人物は顔をあげようとして、力なく頂垂れたまま、腕を持ち上げた。ある方向を指差す。

駐車場の奥。その指先は立体駐車場の暗がりを目指していた。あつちに、もう一人いる、様子を見てきてくれ、との言葉に、頷いた。

章は、何があったのかは聞きだせそうにないその様子に不安を覚えた。何か悪い事に巻き込まれたのではないか。暗がりの中にいるもう一人は、もしかしたらどこか、大きな怪我をしているかも知れない、と。

ここは駅に程近く。駐車場の類にも困らない。人の眼を避ける暗がりも多く、また、危険が潜んでいると。

だからこそ、章は。自分が何であるのかを、それまで、すっかりと忘れていた。正確には、自分が何故、術式を使える人間、術士であるのか、である。

だから、つまり、その暗がりにもう一人』なんていうのは最初から居るはずがなく。

危険に近づいたのは、自分自身だったのだと、ようやく気付いたのは。

先程の男性がいつのまにか背後に立っていて、その姿が、大きく変貌したのを認めてからだった。

「え!？」

赤い、眼があった。二つ、暗闇の中で尾を引いて、章を見ている。獲物を観察する眼。

獣のようにだらりと両腕を垂らし、前傾させた体は、一回り以上大きく膨れ上がっており、また、腕も足もそれは同じだった。

黒い。質感も現実感も薄く、異質感が濃く感じられる、黒である。立体駐車場の赤い警告ランプの光が、ちらり、ちらりとその黒を照らす。

章はそこで、ようやく、自分が罠に誘い込まれた『獲物』なのだ と理解した。後ずさり、しかしそれもコンクリートの壁に阻まれて、獣の接近を許した。

(な、何だ、アレ!?)

ずし、ずし、と歩き、鋭い牙を前にせり出した口から覗かせたその頭は、狼に似ている。三角の耳が二つ。黒い狼は、章が少しでもそう、悲鳴か何かを少しでもあげた瞬間、飛び掛りその喉元を潰す

ような、そんな気配を持っていた。

狩獵。これはそういうもののだと理解し、次に、相手が何なのかを探った。

（待て、そうだ、アレは、知ってる。確か、一年の時に授業で習ったはずだ。人間の敵、術式でしか倒せない、何か。生態系は謎が多いけど、人間に擬態する事が可能な、人間を捕食する、そう、人外）
ずし、と。

（奴らは常に餌を。探して。求めて。でもコイツらを傷付けるのは、通常兵器じゃ無理で。でも、だから、術式が　術士が、居る、わけ）

章は、目の前に迫った人外を見て、術式を使おうと。

しかしその動作に移ろうとした瞬間、半分以上混乱していた章に向かつて、人外の拳が振り振られた。戦いどころか喧嘩慣れもしていない少年は、己の身を守ろうと、体を縮こまらせた。それが功を奏した。

「う、うわああ！」

頭上を通り抜ける、鋭い爪と、巻き込まれた風。コンクリートの壁がさつくりと切り裂かれた。

「誰か！　誰かあ！」

無心に、誰か、と叫んだ。けれど、助けを求める声は、誰にも届かない。独りぼっち。

情けない様なんてまるで考えず、必死に立ち上がり、駆け出すも、左腕を大きく傷付けられ、体勢を崩して、転んだ。血が噴き出す。一気に失血し、また、自分の体から血が沢山出た、という事実にくら、としてまともに立てない。

「痛い、痛い、痛い……！」

涙が滲む。熱い程の激痛に思考が歪む。ぐにやりと、景色が擦れた。

（どうして、僕は、こんな目に合ってるんだ）

視界から人外が消えて。現実味のない痛みと状況に、どこか冷静

な、客観的に自分を見る思考が生まれた。この場合は、痛みが現実感を取り戻させてくれた、というのだろう、ただ怖がり、逃げ回る事が、間違いだと気付かせた。

（死ぬのか、僕は。こんな場所？ 初めて外の世界を知って、まだ、これからだっというのに……？）

人外は、まだ見えない。ずし、と近寄ってきているのだけは解った。すぐさま章の頭は、それに対してどうしたら良いのかを考え始めた。

（授業。人外への対抗策は術式だけだっって先生は言ってた。けれど僕は、術式なんて一つも使えない。そう、僕は）

勇気の花。学院の、外の世界。まだ、知りたい事が沢山あって、まだ、死にたくない。

（僕は、屑だ）

術式を使う為の、最初の段階はその術式を行う目的を決める事。それから、どう作用し、どう効果を及ぼすかを記した、起動式というものを造らなければならない。

それを紋章に書き起こし、内枠として、次に展開式というものを外枠に組み上げる。これが目的座標や霊子使用量、霊子反射光の化合率を記した、計算が必要な項目である。

この二つ。起動式と展開式を、普通の術士は、術式を実行する際に、いちいち計算して行う。学院はそう教えている。

（そう 『普通は』）

章は、すぐ手が届く距離にまで迫った人外の姿を、視認した。これだけ近ければ、涙で眼が滲んでいても、見える。

（インストール……！）

秋田章は術式を実行する。起動式、展開式、そのどちらの工程も無視した、ほぼゼロ時間での術式起動方法。

がちゃん、と頭の中で引かれたトリガーは、忠実に、正確に、その『弾丸』を人外にめり込ませた。命中したのは腹部。威力も低く、ただ十メートルほど距離を取っただけの、効果だった。

人外は体勢を立て直した。警戒する肉食獣という様子で、ぐるると唸り声をあげた。

「はっ、はあっ……！」

(ダメだ、このままじゃやられちゃう、なんとかしなくちゃ)

立ち上がると、まず、眼鏡の位置を直した。

白い弾丸。章の放った術式は、突然、それが眼の前から発射される、というものだった。

速度は、実銃のそれより遙かに遅い。しかしこれだけ近ければ、発射イコール命中という凶式が成り立つぐらいには、速かった。

人外が身を低く構える。地に手をつけた四足。明らかに警戒を強めている。対して章は失血もあり、ふらふらしていた。長くは、持ちそうに無い。急ぐ必要があった。

「くうう」

痛みを堪えて、術式を連続して実行する。弾丸は四発、相手に向かった。三発命中し、ぎゃうん、という悲鳴を上げて転がる。

致命的な欠点。秋田章が今までの生活の中で避けていた、絶対的な、ぶつかりたくもなかったそれは、壁である。

殺傷力。相手の命を奪う、威力。けれど、それはしかし、学生が持つには分不相応である。人外を滅ぼせる、となると人間一人、二人は簡単に殺せるものになる。章は、そんなものは要らないと思っている。この今、窮地に陥ってさえも、殺害でなく撃退が、頭の中に浮かんでいる。

どうしようもないお人好し。自分の痛みよりも、誰かの痛みを、苦しみを嫌う。それは痛みを知っているからこそ、出来る事でもあり。今は、それを捨てる事を求められていた。

「もう……もう、どこかへ行つて」

行つて、くれと。章はそう思い、それも、今この人外を街に放てば、誰かが確実に犠牲になる事に思い至った。

どうしようもないお人好しは。何よりも、痛みを嫌う。自分だけでなく、誰かの。知らない他人までも、守ろうとする。

「うう、僕は、ぼく、は」

自分のせいで誰かが死ぬ。そうでなくば、自分が死ぬ。もしくは眼の前の、この化け物を、殺す。

馬鹿だ、と卑下した。これでは、まるで

(この人外の事さえ、僕は、守ろうと……)

お人好しが縋りついていた幻想は、ばきばきと音を立てて、壊れていく。

おかしい。こんなのはおかしいと、心の中で叫んでいる。誰かを殺さなければ生きられず、また、殺されなければ生かす事も出来ない。

(けれど、そんなの、どうしようもない、じゃないか)

食物連鎖。全ての生き物は、上位の生き物に糧とされて、そのピラミッドを造っている。

自然、涙が流れた。諦めが顔に滲む。諦観、である。

未だ警戒する人外に、眼を向けた。

「君は、必ず、人を殺す。ここで僕を殺しても、また、違う人を、必ず殺す」

じり、と体を右に開き、少し腰を落とした。

「だから、せめて、痛みを感じないように　僕が殺す」

コンマ数秒の間に術式は起動されて実行された。白い弾丸は、しかし、直前で回避され人外の接近を許してしまう。

速い。人間では、到底辿りつけない反応速度と運動能力。人間を確実に狩る為のそれを。

(術式は、同時には行使出来ない　誰も)

章は眼で追う。迫るのは、左右からの鋭い爪。片方を避けても、もう片方が逃がさない。逃げ道がない。逃げる気は　無い。

(誰も　『僕以外には』)

ほぼゼロ時間の間に、二つの術式が、実行された。

白い弾丸と、もう一つ。巨大な『砲弾』

弾丸は人外の右腕を吹き飛ばし。砲弾は、狼の頭部を、胸元から、

消し飛ばした。その向こう、コンクリート壁と駐車されていた自動車
が破壊される。膨大な霊子圧縮量の砲弾は、その威力がどれ程の
ものであるのかを知らしめた。

倒れ込む。月光が、撃ち抜いた穴から漏れてきていた。失血で動
けない。意識が、朦朧とする。

ぱち、ぱち、ぱち、と音がした。それが拍手の音だと少ししてか
ら気付いた。次に、かつん、かつんという靴音。

「お見事ね。まさかこれ程とは思わなかったわ。コード持ちじ
やないのに、デュアルキャストとは大した才能……流石は学院長の
選んだ生徒と言ったところかしら。アキタ・アキラ君？」

赤いコート。肩までの金髪。その人物は、穴から差し込む月光に
照らされて、そこに居た。黒いロングスカートに、覗く足はストッ
キングだろうか、それに隠されている。片手を腰にあてた立ち姿が、
良く映える。

「一応、時間通りという事になるのかしら。深夜十二時、だものね」
章は、ああ、そうかと納得した。十二時というのは深夜零時を指
していたのだ。

その人物は左手の腕時計から眼を離し、再び章を見た。

「さて、一部始終は見せてもらったわ。ここで死んだらそれまでだ
ったけど、君は生き延びた。ああ、騒ぎを聞きつけて人が集まる前
にここを離れましょう。怪我も治療しなくちゃね。それと……」

鋭い金の眼。月光を照り返す金髪。雪色の肌。それらが眼に焼き
ついた。

「ようこそ、『外事四課』へ」

女性、ベネディクト・アルカデルトはそう言って、手を差し伸べ
た。

第五章 新人

その手をとると、すぐに彼女、ベネディクト・アルカデルトは章に肩を貸して、近くの路上に駐車していた黒いバンの中へ連れて行った。トランク側から章が乗り込むと、中にはストレッチャーという、患者を乗せたまま移送する事が出来る、救急用のベッドがあった。その周りに白衣を着た、医師と看護師のような人が数人。狭い。「横になつて」

ベネディクトが、緊張した表情のまま鋭く言った。共に乗り込むと、車は発進した。失血が続いている章は、自分の血で寝台が汚れる事を考えて戸惑ったが、急かされたので従った。気分が悪く、眼を閉じていても眩暈がした。

「止血を。血圧の測定と念の為、心電図を測る機械を取り付けます」
怪我をした左腕の上腕をきつく縛られ、呻く。ぴ、ぴ、という規則正しい機械音が響き出した。

「ジエイク！」

ベネディクトが、前部座席にいる人物に声をかけた。

「さっきのデュアルキャスト、解析しておいて。後で本部に報告するから」

あいよ、と軽い返事。男性のようだった。章は頭がぼんやりしてきて、周りを見る余裕もなくなってきた。

「血圧が下がっている。昇圧剤を投与。……安定しました。では」

白衣を着た医師の一人が、章の横に立った。

「これから君の怪我を、術式を使って治療する。君の体に再生可能なエネルギー、つまり生命力が残っていれば、確実に成功する。リジエネレーターというものだ。私はこういった経験が多い、術士の怪我を専門に治す医者だ」

医師の言葉に耳を傾ける。自分を信じる、という事を、理屈を交えて言ってきたるように聞こえた。

「術式、開始」

章の左上腕に触れるか触れないかのところで、掌を開く医師。そこに。すう、と音も立てず紋章が浮かび上がった。複雑で、花びらの模様をしていた。いや、花を象った文字群である。

（治療用の、術式……まだ、それは研究途中で実用化されてないはずじゃ）

章の疑問をよそに、医師は怪我した部位、四本ある裂傷をじっと見つめて、その治療を正確に実行し続けた。やがて、五分もしないうちに怪我は無事に塞がった。

皆、溜息を吐いた。失血が多かった為、目的地に到着したら輸血をしなければならぬと医師と看護師は話し合っていた。

（この人たちは、一体……）

ベネディクトが傍に来た。じつと、章を見つめる。鋭い金色の双眸は、しかし穏やかで、章は少し安心した。

「おめでとう、君は生き延びた。ああ、そのまま聞いて頂戴。私達は『外事四課』という組織よ。警察の外事課ね。その外事課っていうのは、主に外国人の犯罪や不法滞在者なんかを取り締まる仕事をしているのだけど、まあ、私達はそれとはちよつと、違うのよ」

腕を組む。赤いトレンチコートがかさ、と擦れる音をたてた。

「見ての通り、術式を使う人間がいる。術式を使わなければ解決出来ない事件を扱う。術式に関する案件を処理する。私達は、そういった、術式に限らず神秘に属した『常識から外れた事』を担当しているわ」

術士は、普通の人間から見た場合、魔法使いに見えるかも知れない。何でも術式で解決する、ファンタジーものの漫画やゲームに出てくる存在。それはしかし、普通の人間から見た場合、章が先程対峙した人外と、本質的には何も変わらない、外れた存在だった。

「……概要は掴めたかしら？ では次。私はベネディクト・アルカデルトよ。君は、アキタ・アキラ君ね。君は今日から外事四課配属になる。そして、私が君の上司よ。私の命令には全てイエスで答え

るように。いいわね」

押し潰すように、言葉が重ねられた。章は和らいだ痛みを感じつつ、呆然としていた。

「新人君。今度は質問よ。答えられる範囲でいいから答えて頂戴。君はさつき、信じられない事に『デュアルキャスト』を成功させた。私が見ていた限りでは、術式が実行される際に、必ず浮かび上がるはずの紋章が、現れなかった。あれは何？ 本当に術式なのかしら。そして何故、コード持ちでもない君がデュアルキャストを成功させられたのかしら」

大きな声は出せそうにないので、細々と、それに答えていく。

「……術式は、起動式、展開式を経なければ実行されません。でも、それらを全て演算領域……意識の中にある空き容量の部分に、写しこんでおく。後は、それを引き出して、実行するまでの手間を全て省いて、現象だけを発動させる。」

僕が、学院で誰にも知られずに造った、インストール式という起動法です」

劣等生は、それを秘密にするつもりはなかった。けれど、それは学院では評価されない、全く不要とされた構築理論の、応用に次ぐ応用。そしてその性格上、僕はこんな事が出来るんだぞ、と自慢するような、見せびらかすような人間でもなかった。

出来ても、意味はない。ないと、思っていたからだ。

「デュアルキャストというのは、異なる術式の同時実行ですかね。なら、それはインストール式で、術式を同期させて発動させた、というだけの話です……あまり、驚かれるような、大したものでは」

ベネディクトは、片手の掌を額に当てて、表情を隠した。

「君。それを本気で言ってるなら、目玉を抉り出すわよ」

それは憤りを隠す為だったのだと、言われて気がついた。

「性格に一癖も二癖もある連中なら、散々相手にしてきたし、適当に対応するつもりだったけど。やっぱりあの学院長、私に厄介事を押し付けるのが趣味のようね」

びくびく、と手が震えている。怖かった。

「意識容量に術式を丸ごとコピー。そんな事が出来るのはエリートであるコード持ちぐらいだし、デュアルキャストが出来るのは、そうね、この外事四課でも私ぐらいのものよ」

ベネディクトは、章を見る。車のクラクションが外から聞こえる。交差点なのか、人のざわめきもくももって聞こえてきた。

「とんでもない新人が来たものだわ。でもまあ、おかげで方向性が見えたし。後は銃器と車の運転さえ出来るようになれば、すぐ捜査にも出せそうね」

不穏な単語に耳を疑ったが、章はまず気になった事を聞いた。

「あの、貴女も、デュアルキャストが出来るん、ですよね？」

「ええ。君と違って、効率悪い方法で、いちいち紋章が現れる、おつそーい方法だけどね」

嫌味のように。睨むような半眼だった。しかし章はそれにただ感心した。まさか自分のようなインチキじみた方法でなく、天然でそれを行えるなど、高性能コンピュータに匹敵するような思考速度でなければ不可能だからだ。

彼は、彼女に興味を湧いた。

「あ、あの。やはりベネディクトさんも、コード持ちなんでしょうか？」

「ええ。コード・Sを拝領したわ。与えられるナンバーコードの中では、最高位ね。今でも私以外のコード・Sっていないみたいだし、色んな方面から期待されて、居心地悪いのよね。まあ資格みたいなものだし、しょうがないのだけれど」

そう言って、肩をすくめた。章はその言葉にぐわんと頭が揺れる気がした。章の中では全学年含めて、最優秀生徒であるのはアズマリア・エインズワースだった。

あの彼女でも、コード・Aという、Sの一つ下を与えられていた。一つ差があるとしても、それは歴然とした差である。彼女がデュアルキャストを行えるという言葉の裏付けも取れて、章は納得した。

天才 である。自分とは、比べ物にならない程の。

「す、凄い、ですね」

ベネディクトは、少し得意そうな顔をして。

「ふふん。ありがと と、言いたいところだけど。君に言われても全然、嬉しくないわね」

と、章に人差し指を向けた。

「え、あの、すみません。人と話すのが得意ではないもので……うまく、言えなくて」

落ち込む様子を見せた章に、ベネディクトは少し、驚いていた。

「あ、別に、責めてる訳じゃないのよ。ただその、君も……って、ああもう。そのあたりは察しなさいよ」

やれやれ、と首を振る。

「まあ、そのあたりは置いておいて。君はこれから外事四課専用の医療施設で治療を受けた後、与えられたマンションで自分の装備と環境を確認し、その後、支給品であるこのPDA 携帯用情報端末ね。これを使って私に連絡を取る。ここまで、いいかしら」

頷いた。

「よろしい。物分りが良くて助かるわ。それに常識人みたいだし、四課の中では貴重な人材ね。まあ配属されたばかりだし、解らない事も多いでしょうから、そういう時も連絡して頂戴。私から言いたい事はそれだけ。もう休んでいいわよ、初めての事だらけで疲れたでしょう」

章は、はいと頷いた。聞きたい事は沢山ある。解らない事も沢山あった。

それでも今は、何も考えず休みたいと思い、眼を閉じた。

章が眠りに落ちる直前、前部座席に座っていたジエイクという男が、ベネディクトを、キリサキ、と呼んだ。彼女が何、と聞くと、ジエイクは大慌てで言った。

「こんなの聞いた事がねえ！ どうなってんだ、俺は夢でも見てんのか！」

「お、落ち着きなさい。どうしたの、そんなに慌てて」

ジェイクが、後部座席を覗き込んでいる。茶髪の髪を立てた、細身の若い男。

「史上初だ、歴史的瞬間だ！ お前も驚け、コイツはビッグニュースだぜ。その新人、アキラって言ったか？ そいつにコードが与えられたんだよ！」

「コードが？ でも、こんな中途半端な時期に？ そりゃ、デュアルキャストも使えるくらいだから不思議ではないけど……それが史上初なんて、」

「違う！ 普通じゃないんだ、お前と同じじゃない、コイツは『ダブルナンバー』なんだよ、特例中の特例、『元老院』に直接意見出来る、史上初のAA^{ダブルエー}」

ベネデイクトは、一旦驚いたが、すぐに冷静になった。考える。噂だけが一人歩きしていた、ダブルナンバーの存在は、しかし未だ一人として与えられた事のないコードである。第二次世界大戦中で活躍した、英雄と呼ばれる術士でも与えられなかった為、概念だけのコードであるとさえ言われていたもの。

通常、ダブルナンバーというのは、シングルナンバーより下の、十の位を持った数字を指す為に、劣ったものという認識が一般的だが、術士のそれは全く別である。

シングルの上に行く、倍以上の力を持った、ダブルナンバー。

歴史的快拳、とは言え、術士が裏社会の存在である以上は表に出ない、一部の人間しか知らない出来事だった。

後日、正式に通達が来るらしい、と話すジェイクの言葉に、ベネデイクトは反射的に頷きを返している。

コード・AA。偶然にも秋田章のインシヤルと同じそれは、彼女を震え上がらせ……また、疑惑を抱かせる。

「配属とほぼ同時のコード授与……引つかかるわね。

あの学院長、何か企んでいるんじゃない？」

ともすれば、その強大な力を求めた各国によって、戦争の引き金

にさえ成り得るダブルナンバーの存在は、どうにも彼女に不安を抱かせるのだった。

眼が覚めると、病室だった。白い天井に壁、床、ベッド。着ているものは縦縞の、白と緑という入院着だった。個室で、自分以外の姿はない。右手に窓があり、街の交差点を見下ろせた。左に眼をやると、横に開く扉があり、その先は廊下のようなようである。

（ええと、僕は……ああ、出血多量で、だから輸血されて……その先は覚えてないや）

右手側にある戸棚のデジタル時計は、あの日、黒いバンの中で眠った日から一日、経っている事を示す日付だった。

（丸一日寝てたのか……点滴もされてないし、やっぱり治療用の術式とか使える人が多いのかな。普通、もっと大掛かりだよな）

起き上がり、ベッドから下りて立ち上がる。立ちくらはみはしたが、眩暈という程酷いものではない。戸棚を漁ると、着替えと、持ってきていた小さな黒いショルダーバッグが入っていた。

退院には医師の許可がいる事を知っていた章は、ナースコールを押し、看護師にそういつた諸々を聞こうと思った。そうするとすぐに、白衣の上に紺色のカーディガンを羽織った看護師が部屋に入ってきた。

「どうかしましたか？」

表情はぎこちなく、声音は硬い。緊張しているのがありありと見えた。若いので、新人さんかな、と章は思った。

「あの、僕はあと何日くらいで退院出来ますか？」

看護師は、すぐにでも出来ます、と答えた。章は、やっぱり外事四課は凄いななあ、と感心しながらお礼を言った。女性に例を言つてから、じゃあ退院しますと続けると、緊張が増したように見えた。

「では、支度が出来ましたらそのまま帰って下さって構いませんので！ あ、ここから出ましたら指定されたマンションに向かうよう、

そちらに置いてある書類に書いてありますので、ご確認をお願いします！」

返事を返し、戸棚のテレビの脇に置いてあった一枚の紙を取る。

（大体、ベネディクトさんが言ってた事と同じようなのが書いてあるな）

今日中に着任報告を済ませなければならぬ事が書かれていて、どうにも章の中にある、実地研修とは違った様相が浮かび上がってきていた。違和感。

「あ、あの！」

看護師が言った。しゃちほこばって、がちがちだった。

「コード・AAのお世話が出来て光栄です！これを励みに、もっと頑張ってくださいと思います！」

深々とお辞儀をすると、出て行ってしまった。呆気に取られて、章は彼女が何を言ったのかがよく解らなかった。

（AAって何だろ。僕のイニシャルかな。外事四課の人ってそういうふうくに人を呼ぶのかな。ああ、それにしてもお腹空いたなあ）

そんな、少々の外れな考えをしていた。

着替えて、バッグを肩にかけ、部屋を出る。途中、嫌に人の目が気になった。妙に、見られている。それが解った。

「おい……アイツだろ？」

ひそひそと交わされる言葉に、居心地が悪くなった。これが噂の新人イジメかと不安になり、足早にエレベーターへ向かい、病院を出た。

風が強かった。潮の匂いが、少しだけ鼻に届いた。ポケットから地図を開く。どうやら海が近いようだった。ビデオか資料でしか見た事のない、大きな水溜りというイメージしかない章はそれに興味を持ったが、物事の優先順位が解るくらいには、子供ではなかった。「今度、時間が出来たら見に行こう。きっと、綺麗なんだろうな」

昨日、散々歩き回り、にらめっこを続けたおかげで、街の地理や地図の見方などはどうにか理解していたので、目的地のマンション

まではそう時間をかける事もなく、たどり着く事が出来た。広い駐車場を横切り、管理人室に顔を出す。挨拶を交わし、鍵を受け取る。と指定された部屋に向かった。エレベーターに乗る。途中、眼下に見える風景に海を探したが、方角が違うのか見つける事は出来なかった。風が、強かった。

「ここかな」

七階まで来た。鍵の番号と照らし合わせて、それを見つけると鍵を差し込んだ。開けて中に入ると、妙に広い印象があった。三LDK、である。

(広すぎるんじゃないかなあ)

高級マンションである。一通りの家具は既に揃っていて、街を見下ろせるような大きなガラス窓と余裕のあるベランダがあった。五十インチはあるだろう液晶テレビがでんと鎮座する部屋には、L字型ソファ。壁はクリーム色で、眼に優しい。隣のベッドルームを除くと、一人で寝るには不必要に大きなシングルベッド。

テレビが置いてあるリビングに戻る。先程も眼に入った、テーブルに置いてあるものに近づいた。手に取ると、それは包装された黒いコートのようなだった。加えて、長方形の黒いケース、そしてPD Aと思われるものだった。

(装備と、環境の確認……これを済ませるのが今のところ、僕がやらなくちゃいけない事だよな)

着ていたコートを脱ぎ、黒いコートを広げる。トレンチコートのように、サイズはぴったりだった。生地は硬く、素材からして市販のものとは違うようだった。ごわごわしている。腰周り、袖口、そして襟首のところにそれぞれベルトが備わっており、ダブルボタンで、デザインとしては街中でも目立たないシンプルなものだった。(服に着られる、っていうのかな。僕じゃちょっと、これは着こなせそうにないかも)

しかし着てみると、これは意外に悪くなかった。通気性などの機能性が高いようで、内側は肌触りや着やすさが考慮された、さら

した手触りである。特に背面はメッシュ地で結露防止が考慮されているようだった。性能としてはトラベルコートに近いかも知れない。これいいな、と呟き、値札などが付いてないかチェックする。懐に少し余裕があった。

次に、四角いケースを開ける。章はこれに驚いた。中に入っていたのは、無骨な、鉄の塊である。

「け、拳銃!？」

黒い全体像をしていて、弾層が一つ、同じ箱内に納まっていた。これが支給された装備ではあっても、章は触る気にはなれなかった。「ど、どうしよう、どこかに隠しておいた方がいいかな」

とりあえずベッドルームのクローゼット内に、しまいこんだ。見つかったら一発で逮捕だ、という怖さが、章をそう動かした。

ひとまず、ソファに腰掛けて落ち着きを取り戻した。PDAを手に取る。どうやらこれにはスケジュール帳や計算ソフト、GPSにメールや通話も可能な、携帯電話型パソコンとも言える機能を有しているようだった。通話には、専用のソフトが使われていて盗聴や妨害などの心配がないのが特徴である。

「うーん？」

携帯電話は、近年普及し始めたばかりであったので、章はその機能を使いこなせるようなスキルを持ち合わせていない。説明書とのにらめっこが続いた。やがてようやく、アドレス帳から相手の番号を呼び出し、通話ボタンを押すと電話が出来る、というところまでたどり着いた。

アドレス帳を開く。そこは本来、登録した番号しか存在しないのだが、章のそれには余計な手間を省く為にか、様々な名前が順不同に並んでいた。

ベネディクト・アルカデルト、デュドネ・シルベストリ、キサラ・タチカワ、ジエイク・マティアス……二十名を超える数だった。

(ベネディクトさんは解るとしても、もしかしてこれ、外事四課の人たちかな)

ともかく、装備と環境の確認は済んだ事を再確認。質問する件を頭の中で纏める。これからやらなくてはならない事は、着任の挨拶というのも忘れないように頭の隅に置いて、通話ボタンを押した。程なく、相手が出る。

『用意は済んだようね』

「あ、はい。あの、ベネディクトさん、部屋に拳銃、みたいなものがあつたんですけど、あれってモデルガンとかそういうのじゃ、」
『勿論、違つわ。本物よ。』

H & K社の^{ヘッケラーアンドコッホ}、USPカスタム。本体のみならず^{サブレッサー}減音器やLAM、フラッシュライトというカスタムパーツが優秀で、状況適応力が高いのを理由に外事四課では制式採用されている自動拳銃よ。ハンドガンの中でも威力が高い。45口径で、使用弾薬は45ACPというストッピングパワーに優れた暴徒鎮圧用の。』

止まらない拳銃講釈に、章は口を挟んだ。

「いえあの、銃がどういうものでなくて、どうしてそんなものが僕の部屋にあるのかという事が聞きたくてですね」

『あら。だって、素手で人外とかテロリストとか、相手に出来る訳ないでしょう？ それにハンドガンはあくまで護身用よ。最低限それぐらい持つてないと、いざという時に命取りになるわ。術式つて、高威力だけど即応性が低いのが難よねえ』

起動から紋章が現れ、実際に術式が働きかけるまでの、タイムラグ。それが致命的だと説明し、そんな事をするぐらいなら拳銃を取り出して撃つた方が速い、というのだ。

『ああ、ま、君には必要ないかしら。何たって天下のAA認定^{ダブルエー}だものね。私達みたいな凡人と一緒にするのは失礼だったかしら』

「あの！ さつきも病院で言われたんですけど、そのコード・AAつて何ですか？ 僕のインシヤルにはあんまり冗談になつてない気がするんですけど」

『ん？ 説明されてないの。そう、じゃあ教えてあげる。先日、君が人外を倒したすぐ後にね、学院側から通達があつたのよ。君を学

院始まって以来のダブルナンバーとして認定するって。おめでとう、これから頑張ってるね」

あっさりとそう言い、ベネディクトは更に続けた。事務的な口調である。

『でもね。職場では私が上司だから。君は部下。そのあたりの上下関係はしっかりしておかないと命令系統が混乱するから、承諾しておいてね。それと私の事はいつまでもさん付けじゃアレだし、年上だから、先輩って呼んで頂戴。部下は皆そう呼ばせてるのよ』
解りました、と返す。

意地っ張りというよりは、公私混同しない、プロ意識のようだった。

「僕が……ダブルナンバー？」

現実感の湧かない、事実だった。

『称賛されたいならしてあげるけど。必要？』

試すような言葉に、いえ、と返して、続きを話した。

「そんな子供じゃありません。とにかく、拳銃の話は解りました。けれど、僕は人殺しがしたい訳でも、殺し合いがしたい訳でもありませんし、使い慣れない武器はコントロール出来ないのです、とつさの場面でも、扱えないでしょうから、経験を積んでから考えます。

それと、PDAのアドレス帳に登録されていた名前は、全て外事四課の人たちですか？」

『ええ、そうよ。これから君はその人たちに挨拶して、顔を覚えてもらわなくちゃいけないの。もう迎えが着く頃だから、よろしくね。ナンバーは』

車のナンバーを記憶し、外に出て待とうと考え、立ち上がった。シャツの胸ポケットに入れてあるエーデルワイスを、コートの上から触って忘れないよう確認する。

「……それにしても、僕の部屋なんですが。嫌に広い、ですね」

『お気に召さなかったかしら？』

「いえ……ただ、」

章は眼を細めて、玄関のシューズインクローゼットに手を置き、改めて部屋を眺めた。

「一人で使うには、少し、広過ぎる気がする」

第六章 外事四課の騒がしい面々

迎いの車に乗り込むと、すぐに走り出した。どこにでもありそうな、黒いセダンである。目的地はどこかと運転手に聞けば、強面の中年男性が、丁寧に答えた。声が低く、顔に幾つか裂傷の痕があった。威圧感。

「外事四課は、主に移動式司令部を基幹としてます。それは車だったり、航空輸送機だったり、偽装タンカーだったり、状況によって選択されます。」

これから向かう、陸上での移動式司令部は輸送用のでかいトレーラーで、ベース・キャリアと呼ばれてます」

につ、と横顔を見せ、口元を笑いの形に歪めた。傷痕のせいで、それは少し怖かった。

「キャンプの頭は、デュドネって指揮官です。到着の挨拶は、コイツにしてやって下さい。いけすかねえ若造ですが、頭のキレは確かなヤツです」

ありがとうございます、と萎縮したまま返した。

「あと コード・AAダブルエーをお送り出来て光荣です。死ぬ気で送り届けますので、どうぞ、大船、それこそタンカーにでも乗ったつもりでいて下さい」

章は、呼ばれられない、分不相応なその呼び名に居心地の悪さを覚えた。しかし運転手と話した感じでは、人は悪くなさそうと思い、お願いしますと答えた。反射的に、ごめんなさいと答えそうになったのを章は必死に心の奥に隠したのだが。

自衛隊の基地が街の外れにあり、そこにベース・キャリアと呼ばれる、大きなトレーラーが駐留していると聞き、そこが移動式司令部なのだと理解した。章は暗い緑色をした軍服を、実物では初めて見た。オリーブドラブというらしいそれを、基地正門に詰めてい

た兵士が着ていたのだ。運転手が見せた許可証のようなものを確認すると、正門横の詰め所にいたもう一人の兵士に合図を送る。

正門が、開いた。広いゲートだ。自動車が、横に並んで六、七台は同時に通れそうな広さである。コンクリートに、キャタピラの跡が目についた。

街外れの森林に位置する、自衛隊の駐屯地だった。

「射撃訓練や術式の訓練も含めて、警察署じゃ出来ないもんが多い外事四課の訓練は軍隊の設備を借りてやらせてもらってるんですよ。人目を忍ばなきゃ、戒律に違反しちゃうんで」

戒律という言葉に、章は学院での授業を思い出した。術士を縛る法律である。術式は通常、現実には存在しないとされる超常現象の為、世に広まれば大きな混乱が起ると予見されており、それを防ぐ為に戒律という、専用の法律が布かれている。

車はそのまま、ゲートを過ぎて左に曲がり、コンクリートの上を走ると、これもオリーブドラブという色の輸送用大型トレーラー。車輪は前部で十六あるという。近づいていった。車が止まる。トレーラー横のテントに指揮官がいるらしいので、そこへ向かった。トレーラーは、前部で五台並んでいた。他にも黒いバンやトラック、乗用車がある。

「こ、ここでいいんですか？」

「はい。……武田義孝、戻りました！」たけだよしたか

テントの中から、入れ、と静かな男の声が聞こえた。失礼します、と言って、運転手。武田義孝と言っらしい男が、自分の後に続いて下さい、と言って入っていった。

「お連れしてきました」

ひよい、と体格の良い武田の背後から顔を出すと、白いスーツに身を包んだ、金髪の男がデスクの上でパソコンのキーボードを叩いていた。眼だけを向けてくる。細身の色白。日本人ではないようだった。碧眼、である。武田の横に並ぶ。

「お前が、コード・AAか。言っておくがここは実力主義の世界だ、

そんな肩書きだけで上に登れる場所じゃない。お前はここでは新米ルキだ。資格も実績もない、ひよっ子なんだよ……それにしても、小さいな」

男は立ち上がり、章の前まで来た。背が高い。薄暗いテント内とこのもあつて、威圧感があつた。筋骨隆々の武田より体格は細い。「ど、どうも……」

「ふん……お前のパートナーはキリサキだ。ヤツと同様、最も過酷な最前線で働いてもらう。というのも、一通り訓練を終えてから、だがな。もしも劣悪な成績しか残せないなら、即刻除名させてもらう。役立たずはここにはいらぬ。俺の部下には、必要ないからな」鷹のように鋭い眼だった。章は身が竦んでしまつて動けない。デキる奴はこき使い、デキない奴は切り捨てる。徹底した実力主義だと解つた。

「俺はデュドネ・シルベストリ。外事四課、実動部隊の指揮官だ。俺の手を煩わせないうよう、上手く立ち回る事だ。史上初のダブルナンバーだろうと、無能なら容赦なくクビにしてやる」

言い終えると満足したのか、元居たデスクへと戻つていった。出て行け、との言葉と武田に背中を押され、テントを後にした。元氣良くするはずだった挨拶は、思わぬ形で叩き潰された。

強烈な人物だ、というのが第一印象として残つた。冷血、冷酷という言葉が似合う人間で、あの人だけは怒らせないようにしよう、と思つた。武田が、ああいう奴なんです、すみませんとフォローしてくれている。案外、仲間思いなのかも知れなかつた。

次に、トレーラーの中に案内された。中は広く、輸送用というだけあつてカーゴ内には様々な物資が積み込まれており、特に発動機から伸びた電力ケーブルはパソコンへと繋がれ、そこからカーゴの屋根に備え付けられたアンテナを介して情報をやりとりする。小さなオフィスだった。街中でもよく見かけるようなデザインだった。横にナント力運送など書いておけば、違和感なく街に溶け込めるよな。

(……積載量、夢いっぱい……って、何?)

車体の殆どを占めるカーゴ内には、床に這うケールブルが目についた。それを避けて歩く、小柄な少女。見た目は小学生低学年ほどである。章は眼を疑った。どうして子供が、と武田に聞く。

「あいつがキサラ・タチカワです。昔遭った事故が原因とかで少々、愛想は悪いですがロボットみたいに仕事が早くて正確です。あんなナリしてCQCの腕がえらい立っんで、誰も文句言えないんですよ。クロス・クォーターズ・コンバット術式の方もキリサキの次ぐらいに、デキるヤツです。人は見た目によらないってヤツですかね」

声に気付いたようで、キサラは二人に歩み寄った。初めまして、と頭を下げると、素直に挨拶を返してくれた。章の着ているコートと似たデザインで、女性用に仕立てられたコートを着ていた。色こそ違うが、キリサキのものと同じである。下は膝丈までのハーフパンツであるようだった。肩までのまつすくな黒髪に、ぱつちりとした、蒼い眼が印象的である。

「何か御用ですか」

平坦な口調と静かな声音が耳に届いた。自己紹介をすると、これもまた素直に返答した。

「キサラ・タチカワです。先輩の新しいパートナーという事ですが、しかし、あの人と組むには相応の実力がなければ勤まりません。それもあって、先程指揮官から、貴方のCQC訓練を担当するようお願いがありました。これからよろしくお願いします」

章の胸あたりに頭が来るぐらいの身長だった。あどけなく、手足も細く、どうにも頼りない印象である。しかし大の男も適わない近接格闘術の使い手だという事に、ちぐはぐな感覚を覚えた。

「ではこれで。今日のところは失礼します」

本格的な訓練は明日かららしいので、キサラは用は済んだと、たかたか歩いてカーゴ内に戻っていった。書類を整理し始める。

「あいつも悪いやつじゃないんですが、他人との間に壁を作っちゃまってやりづらい部分がありましたね。」

まあ、そのあたりは昔の事もあるみたいなんで、大目に見てやって下さい」

「それは、全然構わないんですけど。やっぱり、どうにも幼過ぎる気がします」

武田は苦笑いをした。

「ああ見えて、今年で十九です。運転免許も持ってますよ」

意外に過ぎる言葉だったので、思わず目玉をひん剥いてしまった。

「あ、有り得ない……」

「有り得ない、という事は無いですよ。アナタとは環境が違うから、そう思われるんでしょうがね。自分の物差しでしか人を測れないのは、少々、よろしくないんじゃないですかね」

武田の眼は、口調もあつて窺めるように聞こえた。章は自分の不用意な発言を恥じた。

「まあ、おっさんのうるせえ小言と思つて聞き流して下さい。いや、どうにもアナタが、若い頃に死んだダチに似てるもんで、つい、ね」
視線を逸らして、角刈りの頭をぼりぼりと頭を掻いた。その様子から、少しでも誤魔化す為の出来かせに聞こえた章は、しかし自分の為を思つて言ってくれたのを慮つて、本当だと信じる事にした。

そうして、隣のトレーラーへと案内される。こちら先のカーゴ内と同じ様相だったが、一人の男性がパソコンを弄っていた。武田が、ジエイク、と声を掛ける。

「ああ？ お、来たかAA。^{ダブルエー}待つてたぜえ、時はマナーなりつて言うんだから、無駄な時間は使っちゃいけないよなあ。ああ、俺は部隊の中じゃ情報関係を担当するジエイク・マティアスつてんだ」

軽そうな見た目だった。肉付きの薄い体格に、長い手足、茶髪を立てて、コートの前を開いている。人懐こそうな笑みを向けてきた。「情報管制に支援、調査に情報攻撃まで、データ関係はお任せあれ！ つてな。あちなみに好物は甘い物だから、忘れないようにヨロシクな！」

最近は『アンニンドーフ』つてのにハマってるんだわ」

馴れ馴れしくも肩を組み、べらべらと聞いてもいない事を話し出すジェイクに、しかし章は嫌な感じがしなかった。先の二人に比べれば、当たりさわりが普通の人であったから、だろう。

「実はな俺、糖分が切れると頭の回転が鈍るんだよ。だから自衛隊の厚生センターにある売店から甘い物を発注するんだけどさ、やつぱり名店の銘菓なんかは取り寄せられない訳よ！ そこんとこダメだよなー、いつそ外事四課の名前でそういうの、買い占めてきた方がいいのかな？」

ダメに決まってるんだろ、と武田が返した。しかしジェイクは。

「いいじゃねえか、お前も甘い物、好きだろ？ 好きだよなー」

返答に困るも、一応、と答えて場を流した。食べられるし、嫌いではない程度というのが章の嗜好である。

「よし、今度売店のエクレア一緒に食おうぜ！ いやー周りの奴ら全員、そういう話出来ない連中だからさー、お前みたいな話の合うやつ欲しかったんだよね！ おっと、忘れるところだった。こいつを渡しておくよ」

ジェイクはコートのポケットから、一つの黒い何かを取り出した。しかし、話が合うと言われたものの、微妙に噛み合っていない事には苦笑しつつ、指摘せずにおいた。

「骨伝導マイクロフォンって言ってな。外部に音が漏れないよう通信が出来る優れモンなんだ。左耳に付けるタイプで、スイッチを入れながら話せばこっちにも音声が届く。なくさないでくれよ、高いんだから！」

章のポケットにそれをねじ込み、ジェイクは離れた。足の運びが軽快である。

「んじゃ、俺はこのへんで！ またな、少年！」

「うん、また」

思わずそう返してしまい、戸惑う。会ったばかりなのに、どうにも、友達のような感覚を持ってしまっているようだった。これもジェイクの人徳なのかも知れない。

敵を作らない。それはやはり、章には羨ましいものとして映った。
「……台風みたいな人ですね」

「いやあ、ジエイクはね。騒がしいヤツなんですよ。根っこは悪いヤツじゃないんで、良くしてやって下さい。外事四課の通信システム、レーザーラインってえやつや、本部との橋渡しなんかも担当するんで、解らない事があつたらとりあえずジエイクに聞いてみるといいですよ。外事四課の知恵袋ですんでね」

「物知りな人なんですか？」

「ええ、そりやもう。まあ、本人も言っていました、糖分切れると使い物にならなくなるのが厄介なんですがね……」

あはは、と笑い飛ばし、面白い人ですねと感想を述べた。

そこで、武田は困った顔というか、苦い顔をした。

「次は三号車か……」

その眩きには、どうも避けたい相手がいるような調子が込められているように、章は感じた。

次のトレーラーへと移動する。今度は銃器関連の話という事だった。三台目のトレーラーはカーゴ内に目一杯銃火器を詰め込んでおり、とてつもなく危険な雰囲気放っていた。まさかこれが、と予想する。

武田は、アンドレア、と声を掛ける。奥の暗がりから、一人の女性姿を現した。

その人はベネディクトと同じぐらいの年齢で、しかし艶っぽさがあり、眼が惹き付けられた。黒いストラップスとブレザー、白いシャツの胸元は開けられており、胸の谷間が覗いていた。金髪、碧眼である。

「あら。騒がしいと思ったら件のダブルナンバーだったのね。武田は何してんの？」

「案内だ！ そのぐらい見て解れ！」

そもそも、迎えに行く前言ったばかりだろうが！

アンドレアと呼ばれた女性は章に近寄り、顎をすりりと撫でた。

「いや、わざわざ武田を観察する程興味ないしねえ。あら、かわいい子。君がダブルナンバーだなんて、予め知ってなきゃ解らないくらい、普通の子ねえ」

戸惑い、頬が熱くなつた。相手は大人の女性であり、豊満な胸元に視線が誘導される。知らず、翻弄されているように感じた。

スタイルが良く、色気は女性の武器であるのだ、という、どこかで聞いた話を思い出す。女性が身を離れた。

「まあそれは冗談として。ようこそ、私の城へ」

そう言つて、アンドレアは背後の武器倉庫と化したトレーラーを示した。

「この三号車には実動部隊が運用する携行ミサイルランチャーにアサルトライフル、狙撃ライフル、諸々の弾薬なんか保管されているわ。四十ミリガトリング砲っていう対空火器も持つてるから、もしもの時でも安心ね。ただ、これだけ火薬を満載してるとやっぱり危なくて。だから他のトレーラーと比べて外装が頑丈なのに換装されて、航空機の爆撃か榴弾砲の直撃ぐらいじゃないと壊れない造りになってるの」

「が、頑丈みたいですね」

恍惚とした表情で、ほんわりと陶醉したように語るアンドレアに、章はそう返した。

「そうね、少しだけ説明しようかしら。外事四課で制式採用されているUSPだけど、これは護身用、あくまでセカンダリーウェポンなの。

本来なら警戒レベルC以上の装備でM4A1っていうアサルトライフルが主兵装になるわ。これはね、五・五六mm^{ミリメートル}×四五NATO弾っていう、先端の鋭い弾丸を使うライフルなの。

あ、ライフルって知ってる？ 映画とかでよく出てくると思うけど、こつ、銃床を右脇あたり^{ストック}に当てて、左手で前部銃床を持ち、相手に狙いを付ける。で、右手の人指し指でトリガーを引く。これはハンドガンよりも高威力で、高い連射力を生かした弾幕とか制圧力

とか、味方の支援も行えるとしても便利な武器なのよ！ おおよそ三〇〇メートルまでは有効射程！

専ら、銃撃戦闘ではこれを使うと思っていいわね！ 中でもM4 A1は傑作と言われるアサルトライフル！ これを超えるのはちょっと無いわよ！

ベネディクトよりも喋る勢いがある為、口を挟む余裕がなかった。武田がそつと耳打ちする。

「すみません、銃器フェチなんですよ、コイツ。ほんと、語り出したら止まらなくて。この悪癖のせいであだ名が『鉄処女』アイアン・メイデン」なんて呼ばれる羽目になってるんですね。ああ、本人にこんな事言つと酷い目に

「そこ！ ちゃんと聞いてるの！？」
びくつ、と体を震わせた。

まだ物足りないのか、話を続けようと人指し指を上に向ける、とやはり思いなおしたのか腰に手を当てた。緩くウエーブのかかった金髪が揺れる。

「まあ、良いわ。初日から飛ばしたんじゃ、ちょっとかわいそうだしね。あ、そうだ。自己紹介が遅れたね。私はアンドレアよ。アンディって呼んで」

握手を求められ、右手を差し出した。一瞬戸惑うも、握る。こういうところでは、どんな相手であろうと礼儀正しくありたいと考えるのが章という人間だった。

「よろしくお願いします、アンディさん」
にまー、と顔を歪められ、章はびく、と身を引いた。

「うふふ。楽しみね、二人だけの個人授業」
危ない響きの単語に思わず反応したが、先の調子から、あらかた内容は予想出来た。グラマラスな肢体に眼をやってしまうのは、男としての反応だったが。

「こ、個人授業って、何ですか？」

「あら、聞いてない？ あのね、君の射撃訓練を担当するの、私な

のよ。本分は銃器管理と整備だけど、一応撃つのも教えられるからね。ねえ、楽しみね？ もっと、私の事、教えてあげるからね」

多分、それは銃の事だろうな、と心の中で思った。武田が背中を押して、先を促す。

「今日はここまでです！ ささ、帰りましょう！ どうもお疲れ様でした！」

「え、え？ 施設の案内とかは、」

「あ、私がやってあげようか？」

アンドレアの申し出に、章はぶんぶんと首を振って、武田に従った。やはり物足りなそうな顔をされたが、見なかつた事にした。

「ふう、どうもすみません。あいつも困つたヤツで、まあ、なんつか、普通の男にや興味ないとか公言してる、変人なんすよね」

章は、ああ、そういう人なんだ、と納得した。やはりというか、薄々予想していたというか、どこかそういう雰囲気を感じていたのだ。

それは声には出さずに苦笑する事で、先を促した。

武田は、章に車の運転技術を教える担当教官であると語った。

これから二週間の間、紹介された担当の者と訓練をこなし、結果を出さなければならぬという事実、先が不安になる。

（先生は実地研修って言うてたし、僕にここでそういう経験を積ませるのが目的だったのかな。それにしては随分と、軍隊的というか、物騒な感じがするなあ）

期間は二週間という事で、話が違つたという事はないのだが、自分が兵隊になりそうで不安が募つた。二週間の訓練を終えて、それでハイ終わりとなるのだろうかという、不安。

「明日、明朝七時にお迎えにあがりますので、時間になったらマンシヨンの前にお願ひします。訓練科目は日によって時間帯がローテーションして組まれます。やはり昼夜での運転や近接格闘など、様々な状況を想定しなければならんですからね」

「よ、よろしくお願ひします……」

果たして二週間、自分が無事で済むのかという点でも、やはり不安になった。

朝の空気を肺に吸い込み、ベランダで伸びをした。あまり眠れなかったのは、色々な事がありすぎたからだろう、特に人外の事は、あれが殺人になるのかどうかで、眠れない原因となっていた。望まずともそうなってしまった事に、後悔していいのか、するべきなのか、それともあれは殺人でないと吹っ切るべきなのか、というように。

（あれは、自分で決めて、行った事なんだ。だから、あれが正しかったのかどうかは、まだ解らないけど、きっと正しかったのだと思えるように、僕はなるべきなんだ）

一晩考えて、出した結論はそれだった。勿論、罪悪感もあって、罪の意識も消えないままである。これからそれを抱えていくと思うと、ずっしりと、体が重くなった。

武田の車でキャンプに向かうと、四号車にてメディカルチェックがあるというので、そちらに顔を出した。カーゴ内、担当する医師には見覚えがある。以前、章の怪我を治療した医師だった。よろしくお願いしますと声をかける。医師は緊張した面持ちだった。AAのメディカルチェックを担当出来て光栄の極みです、と語る。

（僕は、そんなに大した人間じゃないんだけどな……）

学院では劣等生と蔑まれ、今度はダブルナンバーと過剰に持ち上げられ、そうやって周囲に振り回される自分に少し嫌悪を抱いた。

（僕は、自分一人じゃ何も出来ない。学院じゃ何をやってもうまくいかなかった。だから、ここでの訓練もきつと、失敗続きなんだろ。うな。ああ、でも、皆ががっかりする顔なんて見たくない……そんな顔、させたくない）

そう後ろ向きに考える。期待外れだと向けられるあの視線が、何よりも嫌だった。

（でも……でも。何もしないで、努力しないで、がっかりされたく

ない、なんて考える方が、きっと間違いなんだ。努力が必ず実を結ぶっていう程、うまくいくものじゃないだろうけど、それでも、成功した人間は必ず努力しているっていうし」

章はストレッチャーに横になる。様々な機材が横に並び、また、体に着けられていった。心電図や脳波の測定器のようだ。

（僕は……屑だ。だけど、何もしない、出来ない屑では、居たくない）

機械が起動音を出し始め、チェックが開始される。少しずつでも自分を変えたいと思う。この実地研修は、その為にも絶好の機会だろうと考え、最後までやり遂げようと、自分に誓った。

メディカルチェックが終わり、四号車から出ると、広い駐車場で見覚えのある顔、始めて見る顔がきつちりと縦横に一定間隔を空けて並んで、体操をしていた。後ろの方で、ジエイクと武田が親しげに話しているのを見て、近づいていく。制服に指定されているコートではなく、各々自由な私服で、武田はタンクトップなのが、らしいと思った。

「 やっぱ、本当なのか？ 」

武田が問い掛けた。

「ん、ああ、間違いなく、アレだ。例のブツ。全く、どこからそんな技術提供受けたのか知らねえけど、厄介なモン作ってくれたよなあ」

まだ章には気付いていないようなので、素早くコートを脱ぎ、体操に混ざった。

「 眼には眼を、ってやつじゃねえのか。 やっぱ、術士にや普通の人間は適わねえんだし、そういう結論に行き着くのは、んん、まあ当然と言やあ当然だったろうよ 」

「 はあ、そうかもなあ。 術士の抹殺……現代風魔女裁判、みたいなもんか？ 」

「 男もいるから厳密にや違うなあ……ん？ おっと、こいつは失礼

しました、気が付きませんでした」

武田がこちらに気付いたので、章は、どうも、と会釈を返した。
ジエイクにも同じく返す。

「おう、少年。昨夜はよく眠れたかい？ 今日には地獄を見るからなあ。覚悟しといたほうがいいぜ？」

「あ、あはは……その、実はあんまり眠れなくて。出来る限り、頑張るつもりです」

「食事はどうされました？ きつちり食っておかないと持ちませんですよ」

「ありがとうございます、武田さん。自炊は出来るのですが、食材をまだ揃えてないので、コンビニで済ませましたね」

自炊は、章の数少ないスキルである。それも、凝り性という訳でもなく、あまり手間のかからない料理しか出来ない。食材の調達は急務だったが、来てまだ日が浅いので、マンションから最寄のスーパーの位置などは調べていなかった。

「それよりも。今の話、続きを聞かせてもらえませんか？ 例のブツって、何ですか？」

ジエイクが苦い顔をした。

「ん、ああ、それなあ。あまり面白い話じゃないぜ。」

術士つてさ、術式を使って対物障壁つていう、銃弾とかを防ぐバリアみたいなもんを造れるから、やっぱり普通の人間から見たらそれって脅威レベル、かなり高い訳な。んで、ボディアーマーとかの防具も紙屑みてえに貫いちまう、術式の攻撃力も相まって、正直化け物扱いされんだよな」

恐らく、普通の人間というのは軍隊に属する兵士や警察など、協力関係にある味方の話だろう。ジエイクの言葉を、武田が引き継いだ。

「そこで、術士に対抗する為に造られた、対術士用兵器とでも言うべきもんが最近出てきたんです。まあ、術士を敵視する連中、多いですからね。」

で、こいつは『魔導器』アーティファクトって言われてます。まあ、普通の人間を

即席の術士にしちまうような、お手軽兵器ですかね」

「事象変移能力は低いし、一つの術式しか使えないけど 誰でも術式が使えるようになる。この一点が、兵器としての完成度を知らしめてるぜ。本来、兵器つてのは誰でも使えて、コントロール出来るもんでなくちゃならない。代替可能な多数に使用出来るって事はつまり量産も可能になるからな。そうなったら、数で負ける天然の術士は、確実に負けるぜ」

「……戦争は数、だもんなあ」

武田が感慨深そうに漏らした。戦争という言葉に体が強張った。

（戦争。この人たちは、戦争をするの？ 僕の方には、戦争する理由なんてないし、するつもりもない。でも、もしそうになったら。僕は、どうするんだ？）

体操が終わる。章はその思考を無理やり中断して、訓練を受けるべく自衛隊の施設内へと入っていった。

通されたのは、淡い緑色をした畳が敷かれている、柔道場だった。自衛隊にも柔道やる人はいるのかな、と章は思っていた。誰もいない、と見て思ったが、中央に一人、ぽつんと立ち尽くしている、少女がいた。

「キサラ、タチカワさん？」

「来ましたか」

やはり、事務的な口調。彼女はこういう人柄なのだ、と理解する。眼は、どこか光が感じられない。これは昨日の時点でもそうだった。だから、きつと、最初からそうなのだろう、と。

「初めて、という事なので、なるべく場所は選びました。私たちは軍隊ではありませんが、相応の能力を身に着けねばならない職業です。特に近接格闘は、遭遇戦、銃が撃てない近距離での制圧力に優れます。」

クロス・クォーターズ・コンバット

本来、CQCは軍隊格闘術として認識されているのですが、一応警察機構として分類される外事四課でも、その職務性質上、習得が

義務付けられています。優秀な格闘術ですからね」

キサラは、肩幅に足を開き、左足を少し、後ろに引いた。腰を少し落とす。左手を軽く握りこみ、前へ伸ばした。

「では、始めましょう。体操で体はほぐれているでしょうし、遠慮はいりません。私を拘束し、行動出来ないようにしてみてください。ああ、術式は不可ですので」

「こ、行動出来ないようになって言われても、どうしたらいいのか、解らないんだけど」

キサラは、少し考えるように視線を逸らした。

「そうですね。実践して、体で覚えるのが一番でしょうか」

言い終わると同時、キサラは章の右足外側に、自分の右足のふくらはぎを当てるよう、体を滑り込ませてきた。そのまま右手で、彼の首元を服もろとも掴み、自分から見て左側に倒した。この時、章の体がそちらに流れるよう、左手で彼の右腕を引っ張っている。

天地がひっくり返り、どだん、と背中から倒れ、肺から空気が搾り出される。一瞬に近い早業である。引き倒した、という表現が最も近い。

「くあ、あつ！」

「大丈夫ですか？」

呟くように言った。表情は無く、感情が読めない。この少女は、先に武田が言っていた通り、優れた体術の使い手なのだ、と実感した。びりびりと背中が痺れる。キサラの右手は、章の首に押し当てられていた。そう、ナイフを持っているような形で、刃を押し付ける形、だった。ひやり、とする錯覚を覚えた。

「こういったように、相手を傷付けず、行動不能にする技術があります。私達は警察ですから、相手を捕まえる事が優先される状況が多いので、とても役に立ちます。パンチやキックを交えたものもあります。こちらはダメージが大きいので、後回しにしましょう。初日から骨折とかされても、困りますし」

「う、う……女の子に投げ飛ばされる僕って……」

落ち込み 解っていた事だが、見た目小学生の女子に言いようにされるのはやはりショックだった 畳に両手をついた。

思っていたより痛みは少ない。畳である事が幸いしたようだ。キサラが初めに言った、場所を選んだというのはこれを考慮して、なのだろう。

「経験の違いです。では、今を実践してみてください。出来たら、次の型に移ります」

「よ、よし。なるべく痛くないように、」

「そんな気遣いは無用です。では、どうぞ」

キサラは構えた。子供のような姿をした女の子にそういった技をかけるのは気後れしたが、そんな事を考えていても進展は、しない。章は意を決して、踏み込んだ。

「ダメですね」

章が息も荒く、仰向けに倒れている。対してキサラは、傍らでそれを見下ろしていた。

「こう言うのもなんですが。ダメダメ、ですね」

「ゼー、ハー、ゼー……！」

最初のうちはキサラが無抵抗に投げられてくれたが、やがてそれを何十回と反復練習させられるにつれて、後半、章の貧弱な体はスタミナ切れを訴え、投げたつもりが自分が転ぶ有様になっていた。

「本当にコード・AAですか、貴方。この程度でバテるなんて」

「う、ごめんなさつ……」

「これは走り込みや筋トレなんかの、基礎から始める必要があるかな」

そう言って、腕を組み、溜息を吐いた。

第七章 訓練風景

章は、芝生の生えたグラウンドに連れ出されると、馬車馬のように走らされた。コートと上着のシャツは脱いでおり、隅のベンチに掛けられている。ぜえ、はあと息は荒い。下に着ていた白いTシャツは汗で肌に張り付いていた。

グラウンドの外周、針葉樹が生える傍を、走る。何周も走る。先導するキサラは章よりも速いペースで大きく差を空けている。膝までの黒いハーフパンツから覗く足は、同色のハイソックスによって肌を隠している。章と同じくコートは脱いでおり、裾を出したカットシャツに赤いネクタイが揺れていた。

息は白く、後方に流れていく。冬が近い事を肌を感じる寒さ。キサラのふつくらとした頬は桜色に染まっていた。

あまりに遅いからか、キサラが立ち止まって章を待っていた。そこまで行くと、今度は腕立て伏せや腹筋などのメニューを言い渡された。一度休憩を挟むらしく、ベンチに座った。

「体力測定の際は受け取っていたのですが。予想以上ですね。やはり、貴方はもつと体を鍛えるべきです。それでは先輩について行く事は出来ません」

「ど、努力、します……」

息も荒く、がっくりとして返答した。空は晴れており、雲が少ない。

「こんなにきついとは、思わなかった」

「そうですか」

淡々と相槌を打つ。他を寄せ付けないその様子に、逆に興味が湧く。キサラと少し話してみたくなったので、適当な話題を投げかけた。

「キサラ、さんは、ここに来て長いの？」

「……ええ、まあ。拾われた時から、ここです」

拾われた、という単語に、武田の言葉を思い出す。過去の事故。それが少し気になったが、触れてはいけないと思い、無理やり話題を変えた。

「でもそれだと、ちょっとおかしいね。術式も使えるって話を聞いたんだけど、学院出じゃないのに、それはどうしてなのかな」

「ウエンズデイ機関から、技術指導を受けました。学院と協調している組織です。学院から輩出された術士も多くなります。そういった方から」

「ああ、そうなんだ。確かに、ウエンズデイ機関の名前は聞いた事あるよ。と言つても、名前だけなんだけど」

「ウエンズデイ機関は、解りやすく言ってしまうえば、外事四課を大きくしたようなものです。ですが組織の母体が大きいと、やはり動きにくい。世間の目もありますし、調査や潜入など、細かいところに手が届かない。その為に精鋭を選抜し、小規模で事に当たる、表向き、世間に溶け込んだようにカムフラージュした組織を作った。それが、外事四課」

章は身を乗り出した。

「まるで、軍の特殊部隊、みたいだね」

「軍とは手を組んでいます、それは情報漏えいや戦闘の隠匿など、情報管制の必要性、銃器や軍用車の利用など、どうしても四課単独では不可能な部分をカバーしてもらう為です。術士の存在は、社会から隠さなければなりませんから。」

バレては、軍にとつても都合が悪い。自衛の為の軍力しか持たない日本が、明らかに攻性である術士を隠している事がバレたら、何故隠しているのか、どうしてそのような戦力が必要なのかと、国家間での言い争いに発展しかねますしね。ある意味、一般人に紛れ込む事が出来る以上、相手からすれば軍隊が攻めてくるより厄介でしょう」

キサラの眼は真剣で、少女の純粋な瞳、というよりは機械的で、何も写していないように見えた。

「軍隊……」

「術士は戦争の引き金に成り得ます。特に、貴方はその眼が細められた。」

「シングルナンバーは、単に優れた術士というだけ。」

しかし貴方は、それとは違う、ダブルナンバー。その差がどれだけのものか、ご存知でしょうか」

首を振る。そういつた実感は、今のところ章にはなかった。

「私も、形式として定められた話しか知らないのですが」

事実、今までダブルナンバーが存在した実例はない。章が初である。しかしその定義は術士ならば知るところなのだろう。

「シングルナンバーは精々、軍の一個小隊と同程度の戦力を持つとされています。ですが、現在のところ、ダブルナンバーは一個師団、師団というのは、軍本隊から独立して、作戦を遂行する能力を持った、戦略単位です。」

小隊が四十〜五十人の規模なのに対し、師団はおよそ六千〜一万という差があります。ダブルナンバーは、単独でこれに匹敵するとされます」

章は思わず仰け反った。開いた口が塞がらない、とはこの事だろう、と思った。

「まさにワンマンアーミーです。そんな人間兵器が一般人に紛れ込んで、国の中枢都市に潜入してきたら、と思うとゾツとしますね。」

国一つ、無条件降伏させるのも不可能じゃありません」

「ぼ、僕は、そんな凄い、コードを与えられてたの!？」

こうして具体的な例をあげられ、頭はぐるぐると混乱していた。全く現実感がないが、そう定義されているらしいダブルナンバーは、どうやらグラウンドを数十週してバテているというのは、どうにもおかしい感じがしてならなかった。

分不相応。自分には似合わない、度を越えた称号 である。

「無理無理! やっぱりおかしいよ、僕がダブルナンバーなんて」

「そう言われましても、本部の指示ですし、そもそもコード授与は

査問委員会が決定する事項ですから。私にはどうにも」

何故か、学院長の穏やかな顔が浮かんだ。

（まさかあの人が、何か働きかけたのか？ 査問委員会のメンバーだっという噂も聞いた事があるし。でも、たととしても、どうして僕なんかそれにそれを？）

息子、という言葉が耳に甦る。

「まあ、貴方はまだ新人ルキキですから。これから期待という事で」

キサラは立ち上がり、数歩歩いた。細い体である。この体のどこに先程のような力が眠っているのか、疑問に思う。

「今の貴方はまだ、私でも打倒出来る。」

しかし、先だつて貴方が行ったインスツールデュアルキヤスト。

これは既に、術式の新たな体系とも言える概念です。貴方に可能性が眠っているのは、疑いようがない。

それを全て、というか、自分をきちんと扱えるようになれば、貴方はもつと高みへ行き着く事が出来るでしょう」

「……………」

違う、と。心の中で否定した。自分に可能性が眠っているなど、どうしても信じる事が出来ず、劣等生は頂垂れた。

「僕は、そんな立派な人間じゃ、ない」

「今、貴方が立派かどうかは問題ではありません。最初から立派な人間なんていない。ですから、努力するんです。それに見合うように、自分を磨くんです。これから立派になるんです」

はつとする。キサラは頂垂れた停滞ではなく、前を向き、先へと進む、進歩を説いているのだ。

「君は、強いね」

苦笑が浮かんでいる。言葉の一つ一つが、章の胸に響いた。

「強くなる為の時間がありましたから」

「僕も、そうなれるかな」

「それは、貴方次第」

キサラ・タチカワという人間は、機械的な印象や厳しい言葉とは

裏腹に、優しい人なのだと、章は理解した。

アンドレアは、トレーラー三号車の傍らで待っていた。その足元にガンメタルの、細長いケースが置いてあった。がらんとした駐車場に、人は少ない。背の高い針葉樹が影を作り、アンドレアを日差しから隠している。

章が近寄っていく。コンクリートを叩く安物スニーカーの足取りは割合、しっかりとしていた。流石に根こそぎ体力を奪うような事は、キサラもしなかったようである。

「あら。今回はキサラも手加減したみたいね。マスクつけて登山とかしなかったの？」

「何ですかそのスパルタメニュー！ 酸欠になっちゃいますよ！」
アンドレアはウェーブした金髪を、頭の後ろで一本に纏め始めた。ゴム輪を口に咥えている。

「んや、あの子毎回、新人には厳しいのよ。ただ、そのぐらい耐えられなきゃやっていけないって篩ふるいにかけてるんでしょね。でも今回はそうしなかった。甘いのか、人を選んだのか。それは解らないけど、珍しいと思って」

「そうなんですか。他には、どんな事を？」

「グラウンドに鉄塔なかった？ 高さ百メートルぐらいの」

記憶を探ると、隅の方にあつたような、なかったような気がした。ただ、曖昧にぼやけている。印象が薄かったし、記憶から抜け落ちたのかも知れなかった。

「そのてっぺんで筋トレとか」

「拷問ですね！ アレですか、空気薄いところのが肺活量鍛えられるとか」

髪を縛り終える。ぱし、と髪を払った。章は話していて思い出したのだが、それは赤と白で染められた鉄塔だった。骨組みのようだ、と思った印象がある。実際それはそうで、頂上の方まで鉄骨の合間合間を縫って下から眺められた気がした。逆に、頂上の足場からも

隙間を通して地面を見る事が出来るだろう。足場がそれでは、百メートル下の地面を見せ付けられているようなものである。怖くないはずがなかった。

「たかだか百メートルじゃそう変わらないわよ。ただ、それもマスクつけて階段登らせるから、そっちで相当きついでしょうけど」

「マスク好きなんですかね……」

効果的なトレーニング法なのよ、と付け加え、足元のケースを章に渡した。これは、と聞くと、瞳を輝かせた。よくぞ聞いてくれたというその様子に、ああ、これはやばいな、と反射的に悟ってしまった。それはアンドレアという人間がどういった性格なのかを少しだけでも理解していれば、至る結論だった。

「M4A1よ！ オプションパーツも幾つか入れておいたから、それも含めて今回は説明するわね！ あ、それともやっぱりUSPの方が良い？ 常時携帯が義務付けられてるから、まず最初に慣れしておくべきかなって思ったのよね。でもやっぱりM4も頻繁に使うから、どっちか迷ったんだけど、オプションパーツ多いし……」

「あの！ 出来れば、その、今は持ってきてないんですけど、マンシヨンの僕の部屋に拳銃があったんですよ。あれは、そのUSPというやつでした、よね？」

「ええ、そうね。私が念入りに、奥の奥まで手入れしたかわいい子よ。お肌ツヤツヤだったでしょ？」

昨日見た、ほんわりという笑顔で頬に手を当て、うつとりとしたこれは下手な事言えないかと察して、話を進める。銃器に肌という単語を使う事には、強い違和感があったが、押し殺した。

「ええ、そうですね。それで、まあそれは良いんですけど、僕、銃を使って何かするという事もないでしょうから、特に銃器関連のトレーニングに必要性を感じないんですが」

「え？ 何それ、キリサキはどうするの？」

キリサキ、という言葉に、ああベネディクトさんか、と思い当たる。そう呼ばれているのを、あの嫌味な指揮官もキリサキと呼んで

いた事から察したのだ。

「キリサキというのはベネディクトさん……先輩、ですね。どうしてあの人が出てくるんですか？」

「だって、一週間後の輸送作戦、出るんでしょう？ 貴方とキリサキが」

「何です？ それ」

「だから、作戦よ。重要物をどこかに運ぶの。その護衛に貴方とキリサキが、具体的にはコード・SとAAが選ばれたのよ。聞いてないの？」

聞いてない、と頭の中で呟く。どうしてそんなものに、と思っただが、先のキサラの言葉から、コード持ちを護衛に抜擢するのは戦力的にも人数的にも、合理的であると思ひ至る。

ジーンズの埃を払う。一週間後。輸送作戦。コード持ち……様々な単語が頭の中を駆け巡った。眼鏡の位置を直す。

「それって、危険な作戦なんですか？」

「ええ、まあね。何を運ぶのかは私も知らないし、多分デュドネも知らないけど、噂じゃ人を術士に変える薬だとか、何だとかって話よ。まず間違いなく、術士撲滅を掲げてる奴らは眼をつけてるでしょうね」

片足に体重を傾けた。朝、武田とジェイクが話していた会話が甦る。アンドレアは不審そうに様子を伺っている。ベネディクトの事を考える。彼女の足手まといになりたくない、というのが正直な気持ちだった。

「……ベネディクト、先輩は今、どこに？」

「今朝方、観測班から連絡があつてね。現場に直行したらしいから、そのままじゃないかな」

「観測班ですか」

「そ。君はまだ新人だから、情報行つてないのかな。通常、任務が言い渡される時はレーザーラインを使って全隊員のPDAと車輻のパソコンに、情報が送られてくるの。例えば事件が起きたら、何時

どこで、誰が、何をやった、とかね。それに対して司令部が、じゃあ誰と誰がそこへ向かい、対処に当たれ、とか。必要なら装備、資材、情報の要請や軍、警察への支援要請も行える。あまり距離がある時は中継車を使うんだけどね。

今回キリサキからそういったものはないらしいから、そんな大きなものじゃないのかな。多分他にも人、行ってるだろうし」

そうですか、と頷き、アンドレアから視線を外した。

「それで。観測班からの連絡って、何だったんですか？」

話を逸らしてしまった事に後ろめたさを感じたのか、彼女は素直に答えた。意図的に逸らした、という訳ではないらしい。

「うん、それが。街中で術式を使った痕跡、まあ残留反応って呼ばれるものね。その反応があったって。外事四課の知らない術士が、街のどこかにいるんじゃないかって」

「術式の、反応」

君は気にしなくていい、と言って、足元のケースを担いだ。そしてトレーラーの中へ戻ると、先のものより小型のケースを持っていた。

「やっぱりこっちにしましょう。常時携帯する義務があるハンドガンの方が、何かと役に立つ時もあるからね。個人的には、アサルトライフルんですけど」

少し笑って、それを章に渡した。ずしりと重い。さわと風が吹いた。纏められた金髪が靡く。陽が昇ったからか、先の訓練の時よりは暖かくなっていた。

章の表情は暗く、沈んでいる。銃は人を殺す道具、という先入観があるのだ。映画やテレビでも、これを突きつけて人を脅す、もしくは殺すシーンが頻繁にある為、持っているだけで危険という観念さえあった。

それを察してか、アンドレアは言った。言い聞かせるように、人指し指を立てて。

「銃はね、ただの武器、つまり力よ。君は少し勘違いしてるかも知

れないから、言わせてもらおうわ。銃が人を殺すんじゃない、銃は使われるだけのもの。だから、つまり、人が人を殺すのよ。それが本質。だから、力というものは使う人によって、その本質を変える事が出来るの。人を殺す為の力。人を護る為の力。人を怖がらせるだけの力……最後のは抑止論みたいな感じかな。まあ、私が言いたいのはつまりそういう事」

銃が人を護る、というのに強い引掛かりを覚えた。顔を上げると、半分まで木陰に隠れたアンドレアの顔が、微笑んでいた。

「銃が、人を護れるんですか」

「ええ。綺麗事になるけど、例えば相手を撃つ時、撃たなければならぬ時。そんな時、自分は相手の腕、足、または武器を狙って、殺さないよう加減する事が出来るわ。」

それは銃の扱いに慣れてなければ出来ない事だし、狙いも精確でなくちゃならない。だから難しいけど、訓練するだけの価値はあると、私は思うわ。

偽善になるけど、やらないより、人を殺しちゃうからって武器を取らず、味方を見殺しにするよりは、良いと思わない？

それでも君が、銃を要らないと言うのなら、私は強制しない」

ただ、と続ける。彼女の言葉は、強く、心に響いてくるものだった。聞き逃してはいけないものだ、と、耳を澄ます。

「キリサキ……ベネディクトはね。独りぼっちなのよ。コード・Sを戴いてからこっち、ずっと仕事ばかりで親しい友人も作ってないの。いえ、作らないのかしらね。もし自分が任務の途中で死んだら、絶対に悲しませるから。未だにあの子、誰かと深く繋がった事無いみたいだし。学生時代から成績もトップだった上、下手に何でも出来るから学院長のお気に入りだったらしくて、誰も近寄れなかったって話もあるわ。恋人なんて、もつての他」

独りぼっちという言葉は、章には他人事ではなかったもので、言葉の続きを待った。再び風が吹く。木々の青臭い匂いが鼻に届いた。

「だからね、少年君。彼女と今、対等なのは、ここでは君だけなの。」

今まで戦う事ばかりでろくに友達もいなかった彼女を解つてあげられるのは、君だけ。勿論、四課の仲間だって傍にいてあげられるけど、それは仲間として肩を並べられるというだけ。きっと心同士で触れ合えるのは、たぶん、君だけ」

「僕も……僕も、独りぼっちでした」

「なら良かった、とアンドレアは言う。

「独りぼっちが二人居れば、もう独りぼっちじゃなくなるわね。良かった、これで解決じゃない」

「あはは、と快活に笑った。車ばかりで人がいない駐車場に、少しだけ、暖かい笑い声が響いた。

「ベネディクトをよろしくね。あの子、まだ若いから危なっかしいところもあって。私から見たら妹みたいなもんでさ。ほっとけないんだ。」

「だから、お願い。彼女を護つてあげて」

「僕が、彼女を、護る？」

「君なら出来る。君にしか出来ない。だって、コード・A Aダブルエーなんだものね。彼女を護るにはそのぐらい、強くなっちゃ」

「護る……」

「頑張れ、男の子」

鼻先を指で押される。今まで、自分から誰かを護ろうとしたことは無かった。先日の人外も、必要に迫られて戦いはしたが、それを特定の誰かと結びつけて考えたりはしなかった。

誰かを護るといふ事は、自分が強くなければ、出来ない事であると考える。彼女に降りかかる障害や敵というものよりも。

自分には出来ない。それでも、しかし、彼女を独りぼっちにしておく事は、もっと出来ないという、思いが湧いた。

「だから、ね。ほら、そういう力。銃はただの道具であって、それを扱うのは人間なの。銃に善悪はない。決めるのは、あくまで人」

「だから、僕に、銃を持って、と」

「あら、吹っ切れた顔。ちょっとかっこいいじゃない」

つつ、と章の顎を撫でる。少し赤面して、その手を払った。

「べ、別にかっこよくなかないですけど。アンディさんの言葉に少し、感じるものがありました。気持ちが晴れたっていうのかな、銃に対して、ちょっと考えが変わりましたよ。今は少しだけ、銃が好きに、なつたかもしれません」

にまー、という笑いの表情で、纏わりつく視線。

「あらん。だったらほら、すぐ行きましようもう行きましよう。私がかっかりきっかり、USPカスタムの使い方を教えてあげるから、章の背中がぐいぐい押され、また施設の中へと戻っていった。地下に射撃訓練場があるらしい。ロビーの階段を降りて、踊り場を過ぎ、また階段を下りる。ロックされた大きな南京錠のようなものを、門のように通された、大きな扉とその取っ手。待機所のようなところにいる警備員に、手帳のようなものを見せるアンドレア。

開錠してもらい、中に入る。警備員が外から施錠したようだった。扉からすぐのところは腰あたりまでの高さがある長い四脚の台に壁にかけられた銃を置き、弾倉に弾を込める場所のようだった。

蛍光灯の光が照らす、体育館のような場所だった。奥に広く、横幅はそれ程にはない。最奥部には標的とされる黒と白で書かれた、円がある。中心の白い点に当てるのが最も好成绩、という訳だろう。それに、章はアンドレアに言われた通り準備をして、USPカスタムという黒い自動拳銃、全長一九四ミリ、重量七八〇グラムの小さなそれを、構えた。

耳には銃の発射音から鼓膜を守るよう、耳栓をしている。かろうじて人の声は拾える程度なので、会話は可能だった。

アンドレアに銃を撃つ際の姿勢、手順、狙いのつけ方を教わり、しっかりと右手を伸ばして銃を持ち、それに左手を添えた。安全装置の解除を確認し、撃つ。乾いた炸裂音。指示に従い、続けて三発撃った。四発とも、的には当たっているが、中心には程遠い。

「足は肩幅に開いて。そう、右足を引くのよ」
くぐもった声を拾い、従う。緊張感があり、自分が銃を撃ってい

る、という事実だけで頭がいっぱいになりそうだった。やがて射撃を続けると、その感覚に慣れてきたのか、狙いを付ける事だけに集中出来た。もう少しで中心に届く、というところで弾倉内の弾丸が切れる。自動拳銃の引き金が、引いてもがちがちと音が鳴るだけになり、銃身にある、排莖する為のスライドというものが後ろに下がったままになった。弾倉マガジンの交換を教わり、再び射撃を開始した。「アンディさん、この拳銃の射程距離って実際、どのくらいですか？」

「有効射程、五〇メートルよ」

拳銃が射撃時に伝えてくる反動に、手が痺れてきた事を訴えて、少し休む事になった。他には誰もいないので、ゆっくりする事が出来た。立ち込める硝煙の匂い。

「装弾数は十二発と、プラス一発ね。四五口径ACP弾は、反動が大きいから連射力が少し低いけど、ほら、撃った時に銃が跳ねるでしょ、それで照準付け直さなきゃいけないから。でも、当たった時の衝撃力は高いから、逆の性能を持つ九ミリパラベラムとどちらを選ぶかは迷うところなのよね」

「衝撃力……逆って言うと、貫通とかですか」

「ええ。でもまあハンドガンだから、ライフルの貫通力とか、サブマシンガンの連射力には到底、かなわないけどね。ハンドガンは携行する時の便利さが、最も特筆すべき点かしら」

何かが、頭の中で閃きそうになり、顎に手を当てる。

扱いやすさ、威力、連射力。加えて、携帯性に、消音性。

全て、術式の運用にも当てはまり、求められるものである。

「……ここで、術式って使っていていいですかね」

「え？ うーん、一応許可はもう出てるけど、クラスD以下だからあんまり事象変移能力高いのは、無理だよ」

よし、と頷き、再び弾倉を交換し、射場に立った。安全装置を外し、狙いを付ける。思いついたのは威力の増幅である。ライフルより弱いハンドガンの弾丸を、この拳銃という形態のまま、威力だけ

を引き上げるといふ、目論見。

「いきなりインストールは出来ないから、一度弾丸の構造情報を解析して演算領域に打ち込む必要があるかな。このままじゃ事象変移クリエーション・スペースに誤差が出る。とりあえず、五〇メートルという射程距離を、アサルトライフルの距離……三〇〇メートルを目標にして」

ぶつぶつと呟き、起動式を創り上げていく。いつもの穏やかで苦笑してばかりの少年は、眼を鋭くして標的を見つめている。

「フォーミュラ・トランスフォーム
「公式変換」

本来ならば、きいん、という耳鳴りのような音 霊子化合音キテル・ノイズが

するはずの術式起動を無音で実行し、半透明な紋章を銃口に纏わりつかせるよう、造り出した。

引き金を引く。立て続けに六連発。流星のように、白く尾を引く、輝く銃弾が標的に向かった。甲高い音がして、それが音速衝撃波ソニックブームの嘶きだとアンドレアは気付いた。吐き出された薬莖が床を叩く。

「う、嘘……」

標的は最初の一発で粉々に砕け散っている。衝撃力を増した結果である証明。素早い連射に、アンドレアは開いた口が塞がらなかった。白い霊子反射光エーテルは、弾丸の通った跡に雪のように漂い、儚く溶けて消えた。

「嘘お」

「六発が限界かなあ。それにしても凄い威力。」

これなら充分、ライフルの代わりになるかな」

「ちよつと凄いわね……回転弾倉式拳銃リボルバーみたいに術式使うなんて、普通考えられないわ。キリサキだって無理よ、こんなの」

「リボルバー？ 今の連射ですか。再使用には少し時間置かないと無理ですけど、こうすれば威力の面では、少なくとも憂慮するような問題はないかな、と思つて」

アンドレアは、章の射撃技術はともかく、術式を運用する判断力と閃き、それを裏付ける考察に、彼が何故ここへ来たのか解った気がした。

「クラスD相当とは言え、大したものだわ。キャパシティ、よく持つわね」

「ありがとうございます。でも、衝撃力よりは貫通力を上げた方が相手を行動不能にさせやすいかもですね。あれじゃ人、死んじゃうと思うので……」

休む間なく六度撃ち出された術式は、つまり六度の術式起動を射撃直前に行い、ほぼ同時にそれらを実行した、という事になる。

下位の術式であろうと、それだけの同時演算は、もはや術士の限界に挑む挑戦である。

それは、学院という規律の柵しがらみの中で、制限するよう決められた基本の術式のみを 例えば教科書に載っている数学の公式だけを使うような 使っていた為、誰にも気付かれなかった、章の可能性だった。しかしそれも、鼻にかける事なく、むしろ誰でも出来て当然だと思っ込んでいる。劣等生としてレッテルを貼られてきた故の思考だった。

その後、射撃を続けて訓練終了となり、章は次の訓練である、車の運転の前に昼食を挟もうとして、自衛隊の施設内にある隊員食堂というところに寄った。カキフライ定食というのに惹かれて、それを頼んだ。

アンドレアの方は、テント内にいるデュドネと話していた。デュドネはデスクに座ったまま、パソコンのモニターを見ている。

「えー、指揮官殿。コード・AAについて報告があります」

「何だ、話せ」

「何というかそのー。あの少年君は即戦力になりそうなので、身分と拳銃の携帯許可を示した手帳の、発行をお願いします」

緊張感に欠ける報告だったが、いつもの事なのでデュドネの方も慣れたものである。無礼だ、と叱り付ける事は、もう諦めているだろう。

「もう発行届けを出している」

「あら、さすが指揮官殿。先見の明があまりで」

「一週間後の作戦があるからな」

「それなんですけど。もし少年君が嫌だ、と言ったらどうするおつもりだったんです？」

「キリサキが一人で護衛する事になる。それだけの事だ」

アンドレアは、表情に憂いを滲ませた。

「奴なら一人でも任務を完遂する。それだけの能力を持っている。今更そんな事、聞くまでもないだろうに」

優秀であるからこそ、頼られ、任される。一人でも大丈夫だと思われてしまう。章の言葉を思い出す。独りぼっち。それは正反対の境遇であったかもしれないが、結果は同じという、ある意味似たもの同士なのかも知れない、と。

アンドレアは、失礼します、とテントを後にした。

午後の訓練が始まり、武田義孝と合流した。がっしりした肉体に張り付いたタンクトップと、下は迷彩服と茶色い軍靴を纏っている。巖のような筋肉が強調され、近寄りがたかった。どこにでもあるような白いファミリーカーを背後に、駐車場で仁王立ちする様はとも目立っている。

先に手順や運転する際に気をつけなければならない留意点などが書かれた資料を渡され、パイプ椅子に座らされて講義が行われた。必死にそれらを頭の中に入れていく。どうやら今日は運転はしないらしい。後日、筆記試験があるのでそれに通らなければ実際に運転する事は出来ないという。その際に使われる車は、今武田の背後にある車らしかった。

キサラやアンドレアとは違い、武田の訓練はずっとそのような事が続いた。学校の授業風景のようで、真面目な講師と生徒という構図だった。やがて訓練 という名の授業 の終了時間が近づくと、武田が少し驚いた様子で、章の背後を見た。

「キリサキ。捜査の方はもういいのか？」

ベネディクトが、硬い靴音を立ててこちらへ歩いてきている。章が見ると、小さく手を振った。肩までの金髪に、金の眼が陽の光を眩しく照り返しているように見えた。

「まあね。後は私がいなくても平気、というよりは私が邪魔になりそうだったから警察に任せてきたの。次の訓練、私が担当だものね」
え、と喉元まで出掛かった。聞いていない。ベネディクトは腕を組む。自然と、赤いトレンチコートの上からでも解る、豊かな双丘に視線が誘導された。アンドレアをグラマラスと言った場合、ベネディクトはスマート、もしくはスレンダーといった体型である。

「あら、まだ聞いてないのかしら。まあいいわ、さっさと行きましょう」

武田に、借りるわよ、と言って車に近づいた。章が助手席に乗せられ、ベネディクトは運転席へ乗り込む。発車される。

「あの、どこに行くんですか？」

「秘密」

口元に微笑が浮かぶ。彼女は意地が悪そうに眼を細めて、そうはぐらかした。

第八章 歓談

街の中でも主要な建物の傍を通るよう、広い通りを選んでベネディクトは運転しているようだった。特に、大きなセントラルタワービルはこのランドマークとして聳え立っているのか、街のどこにいても認める事が出来るくらいには存在感も、高さもあつた。扇橋と呼ばれる、幅の広い河川に架かる鉄橋も印象的だ。高速道路と一般道路が上下の二段になって架かっていて、これは隣町に続いている事もあり、街中から眺めるだけにした。空に暗幕がかかり始めてきている。

やがて大型デパートの駐車場に車を止めると、彼女は着いてくるように言った。それに従い、ベネディクトに次々と購入する品物を預けられ 荷物持ちである どんどん重くなるそれに耐えるのがもしかしたら訓練か、と思い始めた頃だった。

「何か欲しいものあるなら、言いなさい」

前を歩いていたので、それは自然と振り返りながらの言葉だった。ベネディクトは、可愛いというよりは綺麗という麗姿をしているので 容姿端麗というのだろう、有名女優もかくやという程である。そんな仕草も様になっていた。少しだけ見蕩れる。

「いえ、僕は特に……ああ、そういえば食材の調達とか、したいですけども」

しかし今の状態では自分の買い物も出来そうにない。両手は荷物で塞がり、積み重なったそれは首を超えて、視界に侵入してくる程である。

「食材？ って、もしかして君、自炊するんだ？」

「ええ、まあ……」

ベネディクトは、少しだけ章を半眼で睨んだ。羨ましそうな、妬んでいるような、責めているような様子である。ほんの少センチだけ章より背が低い。

「女々しいわね」

「酷い！」

「まあそれは冗談として。そっか、自炊出来るんだ。ふうん」

「ベネディクト、先輩はしないんですか」

「章が少なからず受けたショックから立ち直ると、彼女は前に向き直り、歩き出した。後に従う。」

「しないわ。そうね、手料理なんてしたことないって言った方がいかな。ああ、今日は全部私が見つから、君も生活に必要な物を揃えなさい」

驚き、思わず聞き返す。

「全部つて、そんな。どうしてですか？ 僕、そこまでしてもらおうような事はしてないと思うんですが」

「いえ、別に君の為じゃないわ。そういう命令だからね。だからキサラも今日は訓練、ちよつと軽めにしてたと思うんだけど。ああ大丈夫、カードだし、予算下りるから」

そういう意図があったのか、と納得し、頷いた。日用雑貨の用意は確かに急務であった為、これは章にとって渡りに船であった。ただ、それが命令であるというのにはほんの少しだけ、寂しさを感じた。

「だからなんですか。アンディさんの話でも、珍しいと言ってますし」

「あの人は、まあ、新人には甘いから、特に何も言わなくても大丈夫だと思つてたし、キサラは物凄い新人潰しだからねえ。それに、多分君も、銃器関連でうだうだ説明されたんじゃない？」

頷く。ベネディクトの顔も、ああやっぱりと憂鬱な表情だった。

彼女も被害者なのだろう。先日、PDAで受けた説明を思い出した。「私、あの人の所為で銃に詳しくなつたからね。別に迷惑つて訳じゃないし、むしろ助かるくらいだったけど、もうちよつと時と場所を考えて欲しいわ」

時と場所が何時で、どこだったのか気になつたが、それは飲み込

んだ。

「まあ私だけじゃなくて四課全員がそんな目に会ってるんだけど。まあそれは良いわ。ところで何が作れるの。自炊」

「あまり、手の込んだ物は作れません。レパートリー少ないんですよ。趣味、という程打ち込んでいませんから。広げようと思っても、自分しか食べませんし」

「ふうん、友達とか、恋人とかいなかったの」

「友達は、少なかったです。落ちこぼれでしたから、あまり付き合いたくなくなつたんでしょうね。殆ど一人でした。恋人というか、好きな人も出来ませんでしたし」

ああ、と額に手を当て、天井を仰ぐベネディクト。雑な音楽がスピーカーから流れている。がやがやという人の騒音に、それはBGMとして埋もれている。

「年頃なんだから、恋の一つぐらいしなさいよ。後になって後悔するわよ」

考えておきますと返して、食材コーナーへとたどり着く。章はコーナーの隅にあるカートに荷物を入れて、引いた。黄色の紙に赤字で書かれたプロツコリー、特売という文字が目に入る。

「後は、絵を少し……ああいや、何でもないです」

そう、と興味なさそうに返して、ベネディクトはコーナーを回り始めた。アンドレアの言葉を思い返す。独りぼっち。まだ会ったばかりというのもあって、距離を感じる会話だったが、それなりに話しやすいのだろう、硬くなっていたり警戒されているような感じは受けなかった。ほんの少し、もうちょっとだけ彼女に近寄ってみたかと思つた章は、しかし今まで女性の手も握つた事がないので、何をどう言えば近寄れるのかが解らなかった。

(こつこつ場合どうするんだろ。うーん、今までの会話の中に糸口はないのかな)

腕を組み、考える。

ワードが幾つか浮かぶ。銃、PDA、生活雑貨、訓練、そして料

理……

（この場合、やはり振りやすい話題は訓練か、料理）

彼女と現在、共通していそうな話題はそのあたりであるので、例えば外事四課の面々を話題に距離を縮める事は可能であると思えた。しかし、それはあくまで仕事仲間、としてである事に少しして気付く。

（アンドレアさんは、そういう事が言いたかったんじゃないと思うんだよなあ）

そういつた事はアンドレア自身でも出来た筈と思い、次に料理に關して考えた。

（誰でも好きな食べ物とかあると思うし、先輩の好物を僕が作れれば、もしかしたら……）

そこに思い至ると、次の行動は速かった。下手に恋をしてこなかった事が、その行動が持つ意味を深く考えさせなかったのだろう。

秋田章は鈍感だった。

「先輩！先輩の好きな食べ物って何ですか？」

食材が並べられている棚を見ていたベネディクトが、顔を向けた。

「え、そうね、パスタとかシチューとか、グラタンとかかしら。

それでなくても、あっさりしたものは大体好きね」

「ああ良かった、それなら僕、パスタ作れるんですけど。

良かったら一緒にどうですか？」

「え……？それは何、作ったものを食べて欲しいって、そういう事？」

はい、と頷く。ベネディクトは気まずそうに視線を外した。

「ごめんなさい、そういうお誘いは全部断ってるの。」

理由は話せないけど、解って頂戴」

心が折れそうになったが、それでも、その理由が独りぼっちでいる事なのを知っていた章は、諦めなかった。

「いえ、何というかそうですね、そう、今回のお礼です。先輩が来なければ僕はあの駐車場で死んでいたかも知れないし、今だって生

活に困らないよう便宜を図ってくれてる。僕はそれに感謝したいと思います。

だから、お礼ぐらいはさせてくれても、良いんじゃないですか？」
彼女は困った顔をした。それでも、章の気持ちを汲んでくれたのか、戸惑い気味に頷いた。良い感触ではないが、結果としては良い
そんな感覚。

「そこまで言うなら……あ、でも違うわよ、本当なら断るもの。君がどうしてもって言うし、それに感謝の気持ちが無下に断るなんて酷い真似はしたくないし、その気持ちも私が原因で生まれたのだからうし」

自分のせいで、章が感謝を感じているから、そのお礼に形式的に応えるだけ。ベネディクトはそう言いたいのだというのが解った章は寂しい気持ちになったが、それでも、必死に言い訳をして、自分を守ろうとしている彼女が、ちょっとだけ近付けた証拠に思えて、少しだけ嬉しかった。

傷付けないように、少しずつ。雛鳥に触れるように。どうか拒絶だけはされないようにと祈りながら、章は彼女の為に、初めて誰かの為に作る料理の材料を揃えていった。

自室に辿り着くまでが大変だった。買い過ぎた荷物を部屋に運ぶ作業だけで大分かかってしまい　ベネディクトの荷物も運んだ為
結局、料理に取り掛かるのが夜九時半頃になってしまった。訓練の疲れもあって眠気が多少あったが、それでも初めて誰かの為に作る料理となると、俄然気合が入った。

「お茶淹れますね。どうぞ、座って下さい」

リビングのL字型ソファにベネディクトが腰を下ろすのを見て
コートは背もたれに掛けている　買ってきたばかりのカップに
ティーパックの緑茶を淹れて、運ぶ算段をする。そのお湯が沸くまでに野菜を水洗いし、カットしておく。視線を感じたので振り返ると、ベネディクトがソファから顔を出して見ていた。液晶テレビが

点けられていて、ニュースだろう、事務的な声が聞こえる。

「な、何でしょう?」

「別に」

事も無げにそう切り捨て、しかし、じーっと見ているのを止めない。猫に観察されているような錯覚を覚えた。作業を続ける。

「何度も言うけど、これは上司としてだから。部下の君が私に、上司の私にどうしても感謝の意を表したいって言うから来てるだけだから」

背中にかけられる声は少し厳しかった。不安になったので、聞いてみる事にした。

「もしかして、嫌でしたか? そうだったらごめんなさい、気が付かなくて。やっぱりどこか、適当な喫茶店で外食したほうが、」

「そうは、言っていない」

振り返る。後ろ頭が見える。彼女はテレビを見ていた。とにかく嫌ではないという事なので、ちょうどお湯が沸いた事もあり、緑茶を淹れた。言っていないというだけで、内面はそう思っているのか、という事を思い悩む程、人付き合いの経験がある訳ではなかった。

「どうぞ、粗茶ですが」

ぎくしゃくとした動作で、彼女はテーブルのそれを取った。肩まである金髪に隠れて顔は見えない。コートを脱いでいる今はキサラと同じカッターシャツと赤いネクタイの上に、薄桃色のカーディガンを羽織っていた。黒いスカートも相まって、それがよく似合っていた。

(なんか、動きがロボットみたいだ……)

とにかく、パスタを作る事に専念しようとキッチンに戻った。

ベネディクトの言動や動きの全てが、初めて異性の家上がった事による緊張だと　まだ異性と腕を組んだ事もない少女らしい反応だと知っていれば、章でももう少し違った対応をするのかも知れなかったが、それを察する程のスキルは持ち合わせていなかった。

それからあまり時間も掛けず、パスタは出来上がった。カルボナ

ーラというメニューだ。

「卵が固まっちゃういますんで、お早めにどうぞ」

「あ、ありがとう」

フォークを渡す。警戒されているように受け取られる。首を傾げた。

「大丈夫ですか？ 何だか緊張されてるような気がします」

ベネディクトは、見抜かれた事でそれに言い返そうとして、しかしお礼だと言って作ってくれた料理を前に、意地を張るのは子供の我侷と同じ気がして、そんな失礼な真似をするのは年上としてどうかと思い直し、深く息を吐いて、肩の力を抜いた。

「……まあね。あまりこういうの、慣れてないから」

「そうなんですか。僕と一緒にですね」

「全然、そんなふうには見えなかったけど」

「そうですか？ うーん、確かに緊張というよりは、美味しいものを作ろうと集中してましたから、顔に出る程ではなかったかも知れません。」

だってほら、料理は愛情だって良く言うじゃないですか」

「あ、愛情!？」

「違いましたっけ？ まあ、気持ちを込めて作る料理って、楽しいなって感じて、それだけだった気もしますけど」

「あ、ああそう、そうなの。それなら良いわ」

ああびっくりした、と呟き、フォークに麺を絡ませた。口に運び、咀嚼する。

「……どうですか？」

「……美味しい」

思わず口元が綻んだようで、それを見て嬉しくなった。何、と言われても、頬の緩みを止める事は出来なかったので、パスタを食べつつ、テレビが映している番組の内容へと話題を変えた。

「この芸人、面白いですよね」

「え、どこが？」

「あ、これです。ねーから！　ねーから！　って」

「……ふーん」

「通じない！　よし、じゃあこんな話はどうですか。僕も本で読んだお話なんですがね。」

新入社員の話。課内で、伝説の鈴木さんという名前がよく出ていた。

ある日、主任から、この書類、伝説の鈴木さんに渡してきてと頼まれた。

どこにいらっしやるのですか、と聞き返したら、伝説の鈴木さんなんだから伝説の部屋に決まってるんだろ。三階の奥だよと言われた。伝説の部屋という言葉にわくわくしながら三階の奥へ行くと電気設備課があった」

「……ふふ」

「よし笑った！　では次！

ある日マイケルが先生に聞きました。先生！　何もしていないのに怒られることってありますか？　先生は、別にありませんよと言った。マイケルは、良かった、僕、宿題やってません！」

「た、確かに何もしてないけどさ」

「これはいまいちか。次いきますよ。」

あるときある家が火事になった。火の勢いはすさまじく、その家は全焼してしまった。

火事の原因はおばあちゃんがてんぷらを作っている事を忘れて、外出してしまったためだった。自分に責任を感じているのか、おばあちゃんはとても落ち込んでいた。その様子を見て集まっていた近所の人たちと、おばあちゃんの家族はやさしく声をかけた。

気にすることないよ。わざとじゃないんだから……

おばあちゃんは震える声でこう言った。もう二度と火なんて見たくない……

そして深くため息をつき、タバコに火をつけた。近所の人はずっと帰っていった」

「どうしようもないおばあちゃんね」

ベネディクトはくすりと笑った。

「むう、手ごわい！ だがまだまだ！」

新人女子社員の話。電話で、どちらさまですか、と聞きたかったのだから、何様ですか、と聞いていた」

「地味にくるかも」

言われたら冗談じゃないけど、と付け足す。

「これでラスト！」

彼女がはじめて彼を自宅に招いたときのこと。彼が靴を脱ぎかけてたら、彼女の母が、あらあらいらっしやーい、と重い体を揺さぶりながら小走りにやってきた。

と、おもいきや母は延長コードに足をひっかけて体のバランスを崩し、彼に体当たりしたのだった。

その衝撃で彼の背骨は変な音を立て、顔は恐怖に歪んでいた」

「助けてあげて！」

そう言っつて、やっと笑い出した。章はガッツポーズを取る。

「ようやく笑ってくれましたね。いやあ、とっておきだったんで、これでダメだったらどうしようかと思いました」

ベネディクトはひとしきり腹を抱えて笑った後、目端に滲んだ涙を人指し指で拭った。

「ふふ、面白かったわ。でも、どうして笑わせようなんて思ったの？」

「それは……そうですね、秘密という事で」

それに一瞬きよんとして、少しだけ笑った。

（笑った顔が見たいのに、理由なんてない……
いや、ちよつと違うな。要らないんだ）

それから幾つかの話をして、テレビの話題も交えた後、彼女は立ち上がり、もう帰ると言った。

「ご馳走様。美味しかったし、話してて楽しかったわ」

「なら良かったです。良ければ、また来て下さい。レパートリー増

やしておきますよ」

それには渋い顔をして、申し訳なさに俯いた。

「悪いけど、今回だけよ。今回が特別なの。私は本来、誰とも関わらないのだから」

「そうなんですか」

「ええ。私との訓練は、街の主要な建物を覚える事だったのだけれど、どうも趣旨が逸れてしまったわね。でも、それも悪くなかったかな」

「じゃあ、良かった。僕も、楽しかったですよ。デートみたいで」それに少しだけ頬を染めると、ベネディクトは、デートじゃないし、と否定して玄関の扉に手をかけた。

「良い、四課の皆には内緒よ。絶対に口外しないように。それに今のは、ちょっと油断して口が滑っただけだから、変な意味はないからね」

解りました、と応える。扉は閉められた。

誰もいない部屋を振り返る。後片付けを始めた。

油断した彼女の言葉　それも悪くなかったかな、というのを思い返し、また少し距離が縮まった気がして、自然と頬が緩むのを防げなかった。

ふと、眼が覚めた。

枕元の時計を見ると、深夜零時を過ぎたあたりだったので、ガラス戸を開けて月を見上げた。蒼い。星明りを押しのけて、月光が降り注いでいる。雪のようにはらはらと舞う、霊子の粒が、微かに見えた。

幻想的な光景。術式を使える適性を持った人間の体の中にある、

新たな感覚質クオリア　霊知感覚グノーシスがなければ見られないものである。

「凄いな。何度見ても、飽きない」

半透明の粉雪は、音もなく、形もなく降っては消えていく。満月の、晴れた時にしか見られない風景である。

ぶるっ、と体を一つ震わせた。

寒いのでなく、体を突き動かすのは歓喜である。試したい、と。今まで居た退屈な場所から解放された、新しい外の世界で、新しい自分を試したい。

ばさり、と買ったばかりの真っ黒なレインコートを羽織り、そこから飛び降りた。

第九章 砕かれる想い

毎晩、寝るのが遅くなり、疲れが抜けなかったが、それでも訓練だけはきちんとこなそうとして、キサラやアンドレアに心配されながらも、何とか続けていく事が出来た。あまり良い体調ではなく、そのせいで、武田が指導する自動車運転の時は、たまに危ない場面があった。二日目から、キサラが術式の訓練をローテーションに入れた。

このローテーションの仕組みは章の都合だけでなく、自分達の仕事の都合というのもある事をアンドレアが零した。なので、たまに訓練がない時間帯もあった。

皆が声を揃えて聞いてくる、大丈夫、という言葉に同じ言葉を返して、時折訓練を覗きに来てくれるベネデイクトに馬鹿にされては、たまに食事に誘うも断られた。そんな日が続いた。

キサラからは、ダメダメですねと言われ続け、アンドレアに弄ばれ、ジエイクから術式の知識を教わり、甘いものを食べさせられつつ、武田からは人生の教訓になるような、含蓄のある言葉と運転技術を教わった。

そうして数日が過ぎた。輸送作戦があるという日の朝、章はベネデイクトと共に薄暗いテントの中で、デュドネと向かい合っていた。初対面の時とは違い、パイプ椅子に座っている。時刻は、朝八時。キャンプには人がまばらだった。

デュドネ 白いスーツに金髪碧眼をした、刃物のように鋭い雰囲気を持つ指揮官は任務の概要を言い渡した。彼を囲む周囲のデスクには先日と違い、高く詰まれた書類や封筒、CDのケースがあった。

「輸送車は正午、港湾区にある貨物倉庫から発車して高速道路に乗り、扇橋を渡って隣町である日橋町へと入る。この町にあるトンネルを通過して山間部を抜け、内陸部へ進み、ウエンスデイ機関の息が

かかった、ある企業の保有するビルへ運び込む事になる。そこならば例え術士でも軽々しく踏み込めない……らしい」

「らしい？ それに、ある企業とは？」

明白でない部分が彼女の気に障ったらしく、問い掛ける。デュドネは、章に初めて見せるであろう、眉根を寄せて弱った顔をした。

「すまんが、そのあたりの詳しい情報はまだ公開されていない。漏洩を防ぐつもりだろうが、これでは進行に影響が出る上、信頼関係にも響くだろう。未だに護衛の正確な人数も通達されていない。この作戦、穴だらけだ。馬鹿にしている、と言ってもいい」

「私たちは正規の警察機構じゃないし、それに軍でもない中途半端な存在、というのもあるからかしら、そうね、敵からしたら入り込みやすい……外事四課に必ずしもスパイがいなくても限らないもの」
驚きを隠せず、思わず口をついて言葉が出た。

「ここに、スパイが！？」

「あくまで例えよ、お向こうさんも慎重になつてるんでしょう。まあ、解らなくもないわ。キサラやジェイクとかの古株は別にしても、外事四課だって実働部隊は二十名以上、本部所属が……何名だったかしら？ とにかくそれだけ多いと、どうやっても一枚岩という訳にはいかないのよ。」

人の入れ替わりまで全部把握してる人なんて、何人いる事やら」
デュドネがパソコンのモニターを横目で眺めつつ、口を開く。

「それでも、コード持ちならやれるだろう、といった旨を言ってきたいるからな。俺達を試すつもりなんだろう。目的地の詳細な情報などは、作戦中に通達する予定らしい」

「はあ、という溜息が章の横で漏らされた。」

「困ったものだわ。疑われつつ、護衛をしるだなんて。それに、情報が遅いと対応しにくくなるのに。当然、積荷に関しての情報もまだ、でしょうか？」

「その通りだ。ただ、依頼主の今後を決定付ける重要なものという話だけでな。」

恐らく、第二実働部隊の連中も来るだろう。これは予想だが、俺ならやはり、保険をかけたいからな」

あいつらかあ、という呟き。余程嫌な相手のようであり、表情が沈んでいる。

「第二つて、実働部隊は他にもあるんですか？」

「本部を基幹として実働部隊は第三までである。今回の作戦に第三部隊が出てくるとは思えないが、大規模な作戦だ、全く考えられない訳でもないな。」

念の為に言っておくが、術式使用の際には本部に使用許可を仰がなければならぬ上、作戦中は他部隊との連携も考えて配置や動きを考えなければならぬ。

忙しくなるぞ」

デュドネの鋭い視線に、章は頷いた。少しだけ意外そうにされた。苦言の一つでも言われるかと思っていたようだ。

「あの、何かおかしな事でも？」

「いや……今回失敗すれば、俺の実績に傷が付くどころか、四課全体の信用に関わる。そうなら始末書では済まんぞ、ただでさえ術士連中は信用されづらいんだ。」

そのところ、よく覚えておけ」

はい、と頷く。デュドネは、それを見て視線を逸らした。さも面白いものを見つけたとばかりに、少し首を傾げて、ベネディクトの眼が細まった。

「ふふ、どうにも調子が狂うみたいね、指揮官殿。新人君はやりづらいかしら？」

「うるさいぞ、キリサキ。貴様こそ最近、その小僧を柄にもなく気に掛けてるようじゃないか。このところ、お前が明るく笑っているところを初めて見た、という話をしている奴が多過ぎて俺の耳にまで入ってきたぞ」

「なっ、な……!!」

がたん、と立ち上がる。顔が真っ赤になっているのは、もしかし

たら照れだろうかと思った。まずいかなと考えて、助け舟を出した。「あ、それは多分、僕が変な話をするからだと思います。小断こはなしでも言っただろうか、相手を笑わせるのが目的のお話です。その、仕事の合間にわざわざ様子を見にきてくれるので、その代わり……という訳でもないですが」

「ほー、そうか、それでか」

今度はデュドネが、これは、とにやついた。

「こら、新人！ 黙ってなさい、ぶつわよ！」

「す、すみません！」

助け舟は沈没したようだった。嗚呼、と心の中で嘆く。

「やれやれ、まさかコード・SがシヨタコンのSだとは誰が思おうか」

空気が一瞬、固まった。

モニターに向き直りながら呟いたデュドネの言葉に、ベネディクトはコートコートの懐からコンバット・ナイフを取り出した。艶消し加工の刃渡りおよそ二十センチ。

眼は、据わっている。

「ちょ、ちよつと先輩ストップ！ 落ち着いて！ それはまずいって！」

「ええい離しなさい、アイツの耳も鼻も唇も全部削ぎ落としてやる！」

「おお怖い、しっかり手綱を握っておけよAA。ダブルエー

そんな顔にされては適わん」

必死にベネディクトを押さえ込むも、デュドネは涼しい顔をしてパソコンのキーボードを叩いていた。

「貴方のせいでしょ、指揮官！ は、早く謝って下さい！」

「生憎、部下に下げる頭は持ち合わせてないな。そもそも俺に命令するな、あと、お前が代わりに謝っておけ」

「離せえー！」

どうにかしてテントの外に連れ出すと、彼女を落ち着かせるには

どうしたらいいかな、それにしてもあの指揮官ほんとに嫌味だな、という事を考えた。

どこにでもあるような、黒い乗用車　初見の印象はそれだった。少し高級な雰囲気があっても、街中で道路を走っていれば、すぐにその風景に溶け込んでしまうような、そんなデザインである。それが、駐車場　有料パーキング　に置いてあった。

「これが、そうなんですか？　四課が用意した、防弾使用の自動車って」

「ええ、殆ど外観からはそうだと解らないでしょ。一応、高級車をベースにしたみたいだから乗り心地も良いらしくて、長距離も大丈夫って話よ」

ベネディクトが、ペットボトルのジュースを傾けて飲んでいる。

「最初は私が運転、疲れたら交代ね。デウドネから手帳は貰った？」

「あ、はい。後部座席が外から見えなくなっているのは、置いてある銃器類を隠す為ですか？」

まあそうね、という返事に頷き、その高級車、フーガの助手席へと乗り込んだ。広い。両手両足を前に突き出しても、余裕がある。彼女も運転席へ乗り込んだ。

「あら、ゆつたりしたシートね。こういうの好きだわ」

聞き流して、左耳の骨伝導マイクロフォンの位置を直す。作戦中、これがほぼ全ての指示を伝達してくる、重要な機器であると聞かされていた。車内のコンソールパネル　本来ならGPSモニターや音楽プレイヤー、エアコンの操作パネルなどが設置されている場所には存在を主張する、無線機のようなツールと後付けモニターがあった。

これは、と尋ねると、外事四課レーザーライン専用の通信キットらしい。モニタにはGPSとシミュレーションツールが組み込まれており、目標の現在位置と未来位置から到着時刻を算出……といった事から、今回は参加していないが、本来なら外事四課全員の配置

や現在の様子などが映像で解るといふ。

「便利ですね」

感心してそう零すと、そのモニタがぱつと点灯した。ジェイクの顔が映っている。

『あー、あー、こちらHQ、指揮本部。聞こえるかい？』

応答にはどうしたら、とベネダイクトに尋ねた。右耳から伸びたマイクを触り、ジェイクは笑った。

『ああ、聞こえるみたいだな。返事するのはそのまま喋ればオーケーだけ、少年』

モニタの向こう、片手でマルのサインを作る茶髪の男がいた。

「びつくりした、便利なんですな、これ」

『まあな、俺が造ったんだぜ。と言っても、まだまだ未完成なんだがな。たまに妙な事が原因で通信切れるし。まあそれはいい、こっちからは俺が情報支援を行う。指揮はもちろん、うちの指揮官が執る。そっちのコールサインはシンプルに、アルファワンだ』

了解、と返答し、キサラとアンドレアはと聞いたが、ちょっと見当たらない、との事なので他の任務に就いているのかも知れなかった。

『昨夜もあつたからな、術式の残留反応。その調査じゃないか？』
「ふうん、やつぱり。実際に被害は出てるの？」

『いや、今のところは、まだ何も。まあそれは気にするな。現場に向かってくれ。場所は解るか？ ここだ』

モニタが切り替わり、今いる場所からのルートが、白い地図に赤い線で記された。

『現在地から街へ出て、港に向かうんだ。そこで目標の輸送トラックが出てくるまで、港湾区前のコンビニで待機な』

ベネダイクトがペットボトルをストックへと置いた。

「私の予想だけど。多分、聖堂教会あたりが来そうね」

『ああ、俺もそう思ってた。最近活動が活発化してるからな。人外滅ぶべし だったかな、あそこの謳い文句は。その人外つてのに

術士も入ってるのが問題なんだが』

車のエンジンがかけられ、発進する。

『気をつけてくれ、奴らはちよつと、危ないぜ。日本国内だからって銃火器撃ってこないとは限らない。そんな親切な集団じゃないからな』

「その聖堂教会っていうのは、PMCですか？」

PMCとはプライベート・ミリタリー・カンパニーと言い、民間軍事企業の事を指す。それは軍隊や特定の武装勢力、組織、国に対して武装した戦闘員を派遣しての警備、戦闘業務に加え、兵站、整備、訓練など、多岐に渡る。新卒の軍需産業として昨今、定義されつつあるものだった。

つまり、金で雇える軍隊である。傭兵と言った方が間違いがない。戦地を渡り歩く、戦力を売り物とした集団。

「違つわ、けど、丸きり違つ訳でもない。聖堂教会がPMCを雇っている、という意味でだけだ」

『正規軍の後ろを支えたり、業務代行だったり、PMCは仕事内容が幅広い。』

で、話は聖堂教会だったな。こいつらは、まあ、予想ついていると思うが 術士を過剰なまでに敵視してる、宗教団体なのさ。神の御心に背き、マヤカシで世界を乱すとか、そんな言ってる集団』

ジェイクのおどけた調子に、少し吹きだしてしまった。

「笑ってられないわよ。狂信者の集まりなんだから」

料金を払い、車が駐車場を出て、道路に出る。信号機を曲がった。『今回そいつらが出張ってくるかどうかは、それこそ、神のみぞ知る……ってところか？』

運送会社のトラックが、貨物倉庫の並ぶ港湾区から現れ、道路に出ようと方向指示器サインカーをあげた。ベネディクトがそれを見て ハンドルに両手を重ね、そこに顎を乗せている 気だるそうに。

「ジエイク」

『おう、それだ。一応向こうの車にも発信機が取り付けてあるから、位置はモニタリング出来てる。追ってくれ』

すぐさまコンビニの駐車場から出て、トラックとの間に数台、車輻を挟んで後を追った。

章は海を見ていた。コンビニで待っている間もずっと、である。

ベネディクトは興味深そうに章を横目で見た。

「そんなに海が珍しい？」

「はい。いつか、見たいと思ってましたから。見れて良かったです」

「……ふうん、そんなものかしら」

押し寄せる波と、引いていく潮騒が、心を落ち着かせる。左手側に海を眺める海岸通り、街路樹が時折、視界を横切った。

「綺麗だ、とても。こんなに綺麗な蒼、見た事ない……」

窓に顔を寄せ、手をつく。透き通った蒼色が、空のそれよりも濃く、眼に眩しい。

章は手でフレームを作った。カメラで写真を撮る際に構図を決めるような、両手の人指し指と親指が造る、長方形。

自分だけの、心の中に閉じ込める、この瞬間の風景 だった。

やがてそれも深い緑に遮られると、章は前に向き直った。

「満足した？」

「あ、はい。済みません、仕事なのに」

「本当にね」

少し呆れられているようだったので、申し訳なさに頭を掻いた。

『俺は海よりも、水着のお姉ちゃんの方が好きだなあ！』

デスクに足を投げ出し、頭の後ろを押さえるように両手を組んでいるジエイクの姿がモニタに映っている。

「変態」

『変態じゃねえよ！ 至って正常な反応だろうが！ キリサキ、さ

てはお前……俺を変態だと思ってるな！ そいつは大きな誤解だ、

訂正してもらおう！

「良いか、俺は紳士だ！」

「変態紳士」

『くつつけんじゃねえ！ 余計誤解招くだろうが！』

（愉快的会話だ……）

ベネディクトとジェイクの会話が交わされているうちに、護衛対象のトラックは高速道路へ続くインターチェンジへ侵入、料金所を過ぎた。

そこで、ぼつりと零した。

「……あの車、トラックから離れないですけど」

一定の距離を保って、護衛対象のトラックから離れない車輛が数台、あった。

『ああ、俺らの他にも雇われた護衛だろう。識別信号がある。』

三、四台か。随分、用心深い依頼主らしいな』

二人の乗った車 フーガはエンジンの回転数を上げ、高速道路へと侵入した。高速運転中独特のタイヤノイズが耳にうるさいが、しばらくするとそれにも慣れた。

それから少し走っていると、道路脇 路肩に停車している一台のバンが見えた。ハザードランプを点灯させているので、故障か何かだろう。

しかしトラックが通り過ぎると、すぐに道路へ侵入、猛烈な勢いで追い上げてきた。ただ事ではない。トラックを挟んで位置する数台の護衛車が警戒を強めたらしい、車内で何かしているのが遠目にも見えた。最後尾はフーガなので、この場合、章達が一番先に対応する事になる。

「あら、故障が直って嬉しいのかしら」

『いやあ、時間に遅れそうだから急いでるんじゃない？』

あちらさん、忙しい身だからねえ』

フーガは追い越し車線へ移動する。助手席の窓が下ろされた。ばたばたと風切り音がうるさく、髪が煽られる。ベネディクトと眼があった。車体に何かが当たる、がん、がんという音。銃撃である。

「恐らく聖堂教会よ、撃つて」

それが、頼みではなく命令だと解るぐらいには、章も彼女の事を理解していた。

コートの懐に手を差し込み、シヨルダーホルスターに納められたUSPカスタム サブレッサー 減音器、LAM装備型 レーザー・エイミング・モジュール を取り出した。窓から顔を出す。両手でバンを狙う。フーガが速度を下げる。射線軸が確保された。

しかしそれは向こうも同じ条件。ハンドガンを構えた運転手とアサルトライフルをこちらに向ける後部座席の人物、二人と視線が交差する。

発砲、される。章は眼を瞑り、そして開く。目の前には鈍色の、小さな花のようなものが幾つも浮いていた。ひしゃげた弾丸 である。

章は銃撃を対物障壁という、防御用の術式で防いだのだ。次に、章が発砲する。狙いは運転手 ではなく、バンのフロントタイヤ。途端にバランスを崩し、乗用車より大きな車体は、高速運転していた事も拍車をかけ、一気に操縦不能に陥る。タイヤがアスファルトを擦る音と共に、あつという間にバンはその姿を小さくしていき、やがて見えなくなった。

車内へと戻る。銃弾を一発、弾倉に補充した。

「どうして、殺さなかったの」

責める口調だった。憤りを抑えているような、調子。

「皆が皆、人を殺す為に、銃を取る訳じゃありませんよ」

「それは、今、術式が間に合わなかったら自分が死んでいたかも知れない事を解って言っているのかしら」

間一髪、というタイミングだったので、言い訳が出来ず、口ごもる。

「それは……」

「そんなんじゃ、折角訓練しても全部無駄だわ。そんな腕で、生意気言わない事ね」

『ま、まあまあ。そういじめるなよキリサキ。少年だって、何も人殺しになりたくてここに来たわけじゃ、』

「黙ってなさい！」

突然の怒鳴り声に、肝を潰した。彼女のそういうところを見るのは初めてだった、というのもある。

「いらつくのよ、そういうの。自分の命を躊躇いもなく危険に晒して。生き延びるのに、そんな甘い事言っていられる訳ないでしょう。自殺志願者と同じだわ。」

ああ、本当、頭に来る。キサラは何を教えたのかしら、それともアンディ？

何にしても、後で問い詰めなくちゃ……」

がり、と親指の爪を噛む。相当苛立っているのが、章にも解った。

『ん？ これは、敵の通信かな。無線の周波数が発信された反応だ』

「君、今日はもう何もしくなくていいわ。後は私がやる」

「そんな、無茶な！」

「邪魔なのよ。役に立たないわ、君。本当ならさっさと降ろしたいけど、ここじゃそれも出来ないから、このまま行くけどね、決して車から降りないで。」

良いわね、これは命令よ」

辛らつな言葉を叩き付け、運転を続けるベネディクトを見て、章は心が挫けた。彼女の命令には、全てイエスで応えなければ、ならない為に。

自分のやっている事が間違いだと、正面から否定され、切つて捨てられ、それでも前を向いていられるほど、十七歳の少年は強くはなかった。

「僕……僕は、」

それでも、信じた事、諦められない事があるという事だけは、伝えておかなくてはと思った。解り合う為には、それが必要だと思つたのだ。

「銃も、術式も、人殺しの道具という考え方で諦めたくないんです。」

特に術式は、誰にでも使える力じゃない。法則に則つてですが、あの程度までなら魔法のように事象を推移させる力を持つてる。童話の中の魔法使いみたいに。それが……そんな力が、人殺しの為だけに使われるなんて、悲しいじゃないですか」

力は、使う人間によつてその性質を変える。ならばせめて正しく在ろう。せめて、正しいと思えるように。そう考える事が出来るようになったのは、外事四課に来たからであり、また課の皆と触れ合ったからだ。

「よくもそんな事、言つてられるわね」

ベネディクトの眼が細まる。現在位置は扇橋へとかかろうとしていた。その入り口、ゲートの両脇に、アサルトライフルを両手に提げた、オリブドラブの軍服を着た集団がいた。自動車の車体を盾に隠れ、その影から発砲、前衛車輛が、撃たれる。

「魔法でも何でも、力を手に入れたら、それを武力に転用してしまうのが、人間なのよ！」

ベネディクトが窓から右手を出し、自動拳銃の引き金を引く。そこに、章のような躊躇いや迷い、狙いの甘さなどは一切、存在しない。

ゲートの右脇に立っている三人を狙い、精確に、頭や心臓に命中させた。味方が倒れるのも構わず、破片手榴弾のピンを抜き、輸送トラックの進行方向に投げつけてくる。回避は間に合わない。きいん、という耳鳴り音がした。ベネディクトの術式が起動された、イ霊子化合音である。

術式は破片手榴弾に作用し、その周りに対物障壁を発生させ、爆発を包み込んでしまった。信じられない現象に、トラックは平然と呆然とする兵士達の横を通り過ぎ、また、当然と護衛車輛もそれに続いた。

「夢を見るのは止めなさい。現実には君が思っている程、優しくないし、君が思いたい程、綺麗じゃないわ」

「僕は……！」

信じたかったものさえも否定されて、少年は、少しだけ泣いた。

第十章 勇気の花

扇橋の途中に、バリケードらしきものがあつた。大型自動車の車体を横にして、三台並べている。高速道路の車線はそれで埋まる。横腹を見せているその車体は、ジープとトラックを足して二で割つたようなデザインだつた。SUVスポーツ・ユティリティ・ビークルというもので、四輪駆動のパワフルな足回りを持つ、荒れた道でも難なく走破するスポーツ多目的車である。

ランドクルーザーというそれを盾に、やはり姿を隠すようにして銃を構える、数十人の男達がいた。服装はばらばらだが、それぞれ防弾チョッキか何かという防具を着込んでいる事は容易に想像出来た。前衛車輛がそれらから銃撃を受ける。そうして応戦し、銃撃を返す搭乗者達。入り乱れる銃声、高速道路上の銃撃戦。風に乗つて聞こえてくる怒号、悲鳴、一気に彼我の距離が埋まる。前衛車輛は道を作るつもりなのだろう、強行突破する腹づもりのようだ。遠目にも解る衝突の危機。反射的に、章は叫んだ。

「危ない！」

追突する　かに思われたが、ベネディクトがそうはさせなかつた。霊子と精神が化合される、きいん、という音。窓から出した右手には自動拳銃。放たれた弾丸は、長く尾を引く金色の流星。三台並ぶ中央、SUVの胴体に命中し、二トンはあるであろう巨体が一瞬、傾きつつ浮き上がった。引っくり返り、転がって、道が開いた。前衛車輛がバリケードを無事に突破する。

術式による、ハンドガンの一発が、簡易な造りとは言え強固なバリケードに穴を開けた。術士と兵士とでは、その間に隔絶的な力の差がある事を、彼女は知らしめた。衛星カメラを介して様子を見ているというジェイクが言った。

『ヒュウ！ さっすがキリサキ、結構なオテマエで』

「私のゴーストが持つ限りは、問題ないけど……」

多分、これだけでは済まないでしょうね」

続くであろう、敵の攻撃を予想した言葉に、嫌な予感を感じた。目尻に溜まった涙滴を掌で擦る。

「……つまり。それは。敵も、この攻撃を突破してくるという事を解っている？」

「当然でしょう。相手が聖堂教会っていう、術士を知り尽くした連中ならね」

『つまり、ああいう兵士は術士の、術式を使う為に必要な精神力つまりゴーストだな、それを消耗させる為の、言わば捨て駒なんだよ』

「酷い……人の命、なのに」

「殺さなければ殺される。そういう場所に、今、君はいるのよ。そこるところをよく考えて、自覚するのね。君は術士。ああいう兵士達からすれば、怖くて怖くて仕方がない存在。人の形をした、化け物なのよ」

前衛車輛が、後衛の車輛と配置を換えた。消耗の度合いが激しいようだ。ベネディクトから容赦なく叩き付けられる現実は、しかし、死なない為に、頭に入れておくべき、戦いの掟だと解る。

『なあ、キリサキ。俺はお前じゃないから良くは解らんけどよ。今までのお前なら俺が知ってるお前なら、さっきみたいに感情剥き出しで他人に当たるなんて、しなかったよ』

「黙って」

『その少年は、もしかしたら、お前を変えられる』

「黙りなさいよ」

尚も続けようとするジエイクに、章は首を横に振った。しかし、ジエイクの顔はどこか晴れやかだ。彼女の反応に手ごたえを感じたのだろう。

『へえへえ、失礼しました。で、状況は敵の防衛ラインを突破、多分、次あたりから本気で来るぜ』

進路は扇橋の途中、欄干らんかんを過ぎる度に、ごう、ごうという音が車

内に届いた。

「本気とは？」

具体的に想像出来ないの、尋ねるとジェイクは表情を引き締めた。

「術士とは言え、元を正せば人間だ。術式がどれだけ強かろうと、どれだけ戦闘力が高かろうと、例えば奇襲で頭を撃ち抜かれたり、対物障壁が間に合わず、事故に巻き込まれたりしたら、当然のように死んじまう。」

多少の怪我なら治療用の術式でどうにかなるが、そもそもベースとなる人間が絶命してたら、意味はない。傷一つない死体が出来上がるだけだ」

術士は、普通の人間が魔法を使えるようになっただけの、人間。つまり、術式を使うまでに致命傷を負わせてしまえば、そう考えて、周りを見渡した。護衛車輻とトラック以外、一台の車も通らない高速道路。というのは、やはり、常識的に考えておかしい。

つまり、おあつらえ向きの状況。嫌な予感。首の後ろがちりちりして、章は不快さを顔に滲ませた。

「一進行方向に進むしかない状況、速度の増減はあるにしても、必ずそこを通ると解っていれば、」

轟音。振動。眼の端に映ったのは、濃淡の激しい黒煙。爆炎。道路脇の緊急用電話に隠された何か、爆発したのだ。進行方向、トラックのすぐ脇で。

「うわあああ！」

一網打尽。一気呵成のその方法は、護衛車を巻き込み、トラックを吹き飛ばして、それら鉄の塊を殊更容易に横転させた。離れていた為距離があるのに、何かの砕けた、細かい破片が飛んできて、フーガの防弾ガラスに当たり、ばちばちと音を立てる。信じられない、想像していなかった光景に思考が固まった。

爆炎が広がる。爆風が押し寄せる。空気の震えがびりびりと、車内にまで届いた。運転手の機転で急制動ブレーキがかけられ、シートベルト

がなければフロントガラスに頭をぶつけているようなその勢いに首元が締め付けられた。

伏せて、という言葉に、体を屈めるも、ロックしたシートベルトで思うように動けず、少し体を横に傾けて屈んだ。衝撃が通り過ぎると、やがて炎上した護衛車とトラックの姿を認める事が出来た。

ベネディクトが車から飛び出す。左耳に指を当て、何かを言っていた。恐らく救助の要請か、積荷の保護か、どちらかは定かでないが、章も同じように車から降りて、怪我をした人がいないか見て回った。命令の事は、頭から吹き飛んでいた。

救助へりの要請をしてすぐ、ばたばたと断続的な音が聞こえてきた。大音量で、耳が痛くなる程だ。それがへりのローター音だと解ったベネディクトは、マイクロフォンでジェイクに連絡をした。

「随分早いわね」

「え？　へりか？　まだそつちには着いてないぞ」

「……………」

背後からは救急車のサイレン。どう考えても、早すぎる。

扇橋そのものは、爆破の規模が意図的に抑えられていた為　トラックのみを狙ったのだと推測される　損害自体は小さい。抉れたアスファルト部分が、二車線あった道路を半分潰しているが、修復は可能なようだった。

へりが、やかましく風を切り裂いて、風を巻き起こしつつ、高速道路上に滞空した。炎上している車輛の炎が、轟々と靡いた。

「うわっぶ」

顔を腕で隠し、叩き付けられる風から護った。へりの横腹が開く。そのキャビンから姿を現したのは、少年　に見えた。

黒いレインコート。ジーンズ。片手に携えているのは、緩やかにカーブした長物だった。艶のある鞘と、鍔つば　日本刀のようなものらしい。

へりからぶら下げられたワイヤーを伝って、降りるといよりは滑り落ちるように、着地した。

「ふー、二対一か。ま、何とかなるさ」

それはヘリの爆音で、二人の耳には届かない。少年が手で合図をすると、ヘリは距離を取った。会話が出来るように計らったらしい。重要物が詰まれたトラックを背にして、章達との距離、およそ二〇メートル。

そして、彼は言った。章を見て。

「よお！ 兄弟きょうだい！ 初めましてだな！」

レインコートで顔は見えない。戸惑いつつ、聞き返した。

「兄弟？ 君は、誰？ 聖堂教会の人？」

銃を握る。後方に怪我人を庇い、銃口を向けた。

「俺の名前は、ブラックコーヒーだ、あんまり好きじゃないんだけどな。所属は、まあ、教会って事にしとこうか」

「どうして僕を兄弟と呼んだ？」

「あれ？ だつてお前、九番 だろう？ だつたら俺の弟じゃねえか」

「何だつて？」

ベネディクトでさえ、少年の発言に呆気に取られている。後方から駆けつけた数台の救急車からは、オリーブドラブの兵服を纏う、武装した兵士が降りてきた。中には白衣にアサルトライフルと、おかしな格好もいたが、偽装だ、と解ればそれも納得がいった。

完全な包囲。

「はっは、そう兄弟。意外とさ、俺らぐらいなんじゃない？ 兄弟なのに、初めましてって言うのさ。ま、プロジェクトの秘匿性もあるから、仕方ないんだけどな」

「プロジェクト？」

「ああ、何だ、知らないのか？ あの狸、筋金入りの秘密主義だからなあ。ああ、とりあえずお前ら、大人しく投降しろ。何、悪いようにはしない」

ベネディクトが、けん制の言葉をかけようと口を開いた。銃は既に抜かれ、後方の兵士たちへ向けている。章と背中合わせ。

「まるで勝ったつもりね。術士相手に、そんなナマクラー振りで」
レインコート少年　ブラックコーヒーは、厭な笑みを張り付
かせた。

「これか？　これな、すげーんだぜ。　秋雨　ってんだがな。

そう、言っちまえば　術式殺しってやつだ」

敵意。害意。そういったものを、ベネディクトはブラックコーヒ
ーに向けた。

秋雨が持つ性能を、その言葉から察したのだろう。

「まさか、^{アーティファクト}魔導器!？」

章、君はあいつと戦っちゃダメ、今の君では殺されてしまうわ」
先日の、ジェイクと武田の会話に出てきていた、その単語の持つ
意味を思い出す。ただの人間が術士に対抗する為に造り出した、対
術士用兵器。

「……………」

潮風が髪を殴りつけ、潮騒がうるさい。覗けば　実際に覗いた
訳ではない　真下は河川で、海が近い為に潮の香りも届いてきて
いた。此岸から彼岸まで全長約五〇〇メートルの鉄橋に、横殴りの
風が吹き付けている。

横転したトラックに眼をやる。ブラックコーヒーの背後で、未だ
がうちりと扉を閉ざしている。あの中の重要物が狙いで、更に敵は
魔導器を持っている　ジェイクの、本気という言葉の意味が解つ
た。このままでは、強奪されてしまう心配があった。怪我人を庇い
つつ、じりじりと道路脇の方へ移動させた。戦闘が起きても巻き込
まない為だ。

耳元のマイクロフォンが喚きたてる。

『おい！　今、衛星カメラで捉えたんだが、その黒いのが持つてる
の、四季刀か!？』

「しきとう?」

『ああ、魔導器の中でも特にヤバイやつだ!　季節の四季に由来す
るらしくて、^{桜吹雪春光}桜吹雪春光、^{五月雨入道}五月雨入道、^{十六夜秋雨}十六夜秋雨、^{小夜時雨}小夜時雨つて

四振りの刀なんだが、誰が作ったかも不明で、だが、その性能は折り紙つきのトツプクラス。術式どころか呪いや病魔、人外なんかの怪異、それに、人の精神^{ゴースト}だけを斬る事も可能だって言われている。ただの人間が、だぜ。その為に、特別な式典で使われたりする。式刀とも言われる、凶事抜いの剣だ」

「何、それ」

ベネデイクトが、小さくそう言ったのをマイクロフォン越しに聞いた。

「既に対術士用兵器って枠に納まらないシロモノだ。しかし、所詮は刀だ。銃には絶対に適わない。いいか、接近させるな！」

「……了解！」

ジェイクが、術式使用の許可は取っておくと伝えた。少し早いが遠慮せず、対物障壁という防御用の術式を起動させる。後方の武装集団は動かない。やはり術士に下手な手出しをすると、手痛いしつぺ返しをくうと知っているのか、けん制止まりだ。

自然と、相手は絞られる。

「ん、ん……」

少年、ブラックコーヒーは屈伸運動をしていた。余裕さえ感じられる動作。銃と刀の圧倒的リーチ差を感じていないのか、緊張が見られない。

橋の欄干^{らんかん}に当たる風が、一層強くなった。

「……………」

発砲するベネデイクト。何の容赦もないそれは、しかし、当たる直前、停止した。潰れる鉛弾。同じ光景を、先程眼にしている。

「対物障壁!? 術士か！」

「ん? なんだ、もういいのか? 全く、奇襲なんて汚い真似するねえオタク。そんな真似しなくても、そうだな、その胸についでる二つの凶器なら、俺なんかイチコロなんだけどねー、はっは」
彼女が、忌々しげに眉をひそめる。ブラックコーヒーの方は飄々とした感じで、刀の鞘を片手に持ち、鏢のあたりで肩を叩いていた。

片足に体重を傾けて。

「ありや、ウケない。まあいいや。じゃ、ぼちぼち始めますか！」
黒い少年は鞘を腰溜めに、柄に手をかける。居合い抜きの構えに似ている。

「良いか。撃つなよ？ 絶対撃つなよ？」

ベネディクトに冗談は通じないようで、何の躊躇いもなく撃つたが、しかし、撃った先に少年の姿は無い。紙一重、弾丸が頬を掠める形で、瞬き一つの時間もかけず、ベネディクトに肉迫した。先程までであった距離　二〇メートルを、たった数歩で埋めたのだ。

「！」

抜刀、首目掛けてくる抜き身に、身を凍らせる。しかし何かが邪魔したか、刀の軌道は歪み、逸れ、ベネディクトの頬を浅く、裂くだけに留まった。切り開かれる対物障壁。その裂け目に滑り込む、左手の鞘。殴りつけようとしてくるこれにはどうにか反応し、身を屈める事に成功した。

あの一瞬で接近してくる動きは、術式か、そういった技能なのかまだ解らない。

一旦、距離を取りたい。後ろへ跳ぼうと、足に力を込める。そこを、足の甲目掛けて踏みつける、ブラックコーヒーはおよそ、少年が身に付けられるようなレベルの読みの鋭さではなかった。

バランスを大きく崩し、体勢が、転びかけているようなそれになり、章はブラックコーヒーに銃口を向けた。

インストール、と頭で呟く暇も無く、白く輝く弾丸が黒いレインコート目掛けて飛ぶ。対物障壁に衝突し、一際強く光ると、潰れた鉛の花が地面に落ちた。

ベネディクトが懐に手を入れる。取り出したのは刃渡り二〇センチのコンバットナイフ。彼女のそれも白く光り、長く伸びて、片刃剣の形を成した。

アストラル・フィックスド・ブレード

霊子収束型固定刃というそれは、対物障壁を切り裂く　　キリサキの愛用する近接武器だ。

ブラックコーヒーの首に向けて突き出す。黒い少年はその腕を取り、まるで、柔道の一本背負いよろしく、ベネディクトを大きく投げ飛ばした。

「いい、よいしょおっ！」

「先輩！」

叫んだ章の眼の前に、鼓動一つの時間ほどで接近、やはり同じように対物障壁を斬り裂かれて、黒い少年は上段に振り被り

「う、うわああああ！」

袈裟切り。反射的に頭を庇った左腕が、熱く、痛い。それを忘れてしまうような、酷い激痛が、左肩から右脇腹へと、斜め一直線に「セツ！」

斬られた。悲鳴をあげようとしても、焼け付くような痛みで逆に喉がひくつき、悲鳴にさえならない呻きが漏れた。本当に斬られたのか、という疑問は、思考を放棄させる程の激しい痛みが、裏付けた。

「が、つき……」

びしゃり、とアスファルトに撒き散らされる血。刀身の血糊を払うブラックコーヒー。揺れる視界の端に、こちらに銃を構える、武装集団。

「アキラ　！」

ベネディクトが叫び、その集団に自動拳銃を向け、数発、撃ち放った。何人かに命中し、悲鳴、鮮血、怒号があがる。

「頑張るね、キリサキ！　最初の弾丸、撃ってなかつたらアレで殺せてたんだがな！　ちよつとびっくりして刃筋が逸れちゃったよ！　だから撃つなって言ったのになあ」

「アキラ、しっかりして、返事をしなさい！　　貴方、何者！？」

さっきの動き、普通じゃないわ」

ブラックコーヒーが、集団に片手で合図を送り、騒ぎを収めた。手を出すな、という事らしい。

「普通？　術士って時点で普通じゃないだろ。本来、あるべきでは

ない姿なんだから。人間の、今の形態は自然進化の中で行き着いた、とりあえずの進化の袋小路だ。そこから、土地柄だつたりの、環境に適応する為に体質を変えていくのが、普通つてももの。

寒ければ太りやすかったり、暑ければ汗腺が発達したり。レースのドライバーは動体視力が発達するし、よく動く奴は新陳代謝が良い。それが、普通だ。だから、それを全部台無しにしちゃうようにさ　魔法使えちゃったら、ダメでしょうよ」

銃口は黒い少年に向けられている。そのすぐ脇には、苦しむ章の姿が転がっている。ブラックコーヒーの方から動く気はないのか、ひとまずの膠着状態。

（ジェイクが衛星カメラで見てるなら、増援は期待できる。それまで、持つかしら）

「質問に答えて。貴方、何？」

ブラックコーヒーは、嗤った。フードに手をかける。笑みが深まる。

「はっは。これが、その質問の答えさ」

フードを、取った。その下にあったのは。

「　嘘。アキラと、同じ、顔」

「コイツは偽者だよ。本物は一人でいい。ダブルエーAAは、本来だつたら、俺なんだからな」

「な、なんですって」

に　い　と。厭な笑みを更に、深めた。章と違い、そういった表情をよく作るのだ、という印象を受けた。雰囲気も、章よりどこか暗く、淀んでいる。

「俺は彰人。あきと新垣彰人。あらがきあきとリアルナンバー1、あの狸から貰ったコードは11《ダブルワン》だ。そしてコイツは、九番。つまりリアルナンバー9。」

ああ、リアルナンバーってのは、解るよな？」

ぼんやりと、驚きを通り過ぎたようで、力無くベネディクトは咳いた。外国生まれの彼女は、それを条件反射的に訳してしまう頭を、

この時ばかりは本気で呪った。

「製造、番号」

「ああそうさ。まさか、AAみてえな化け物が、天然のままできるとか、自然に生まれてくるような超天才とか、まさかとは思うが、思ってねえよな？」

「兄弟つて、偽者つて、シリアルナンバーつて、そういう事、なの」
秋田章と同じ顔をした少年は、人を見下す笑みを向ける。ベネデイクトは、似合わないと感じた。

「あの狸親父が学院の地下でせつせと造ってるもんを知らないのか？ ああ、お前は所詮天然のシングルだもんな。俺達みたいな、ジン・リッチじゃない。なあ、兄弟」

ブラックコーヒー、彰人が章の髪を掴み、頭だけ持ち上げた。うう、と弱々しい呻き。

「お前もな、あの狸親父に騙されてたんだよ。優しくして、寂しさに付け込んできて、そして裏切る。そういう奴なのさ。お前もこれで解つたる？ お前をここへよこしたのは、あの狸が、俺とお前、どちらが優秀か、競わせる為だったんだよ。

あの女もさ、もしかしたらあんな顔して、お前を利用する為にすり寄ってきた女狐かも知れないぜ？ 信用するのは止めな　つて、聞こえてねえか」

ごとりと。頭が道路に落ちた。事切れたように、人形のように眼に光がない。もしかしたら死んでいるのかも　そんな不安をベネデイクトに抱かせる。

感情が揺れる。胸の痛みを感じる。頭に血が上る。

「違う！ 私は、そんな事はしない！

いいからアキラから離れなさい、この性悪小僧！　バラバラにするわよ！」

「いいね！　手足ぶつちぎってダルマにしてやるよ、キリサキ！」
獯猛な顔つきで、ブラックコーヒーは再び、あの踏み込みをみせた。

秋田章は、血を失って、失い過ぎて、顔が向けられた方向　現在、ベネディクトとブラックコーヒーが戦っている様子しか見られない状態だった。

その映像も、音が遠く、滲んだり歪んだりしているので鮮明ではない。どこか遠くの場所の出来事のように思った。体から何かが流れていくのを、感じながら。

（僕は、偽者）

ブラックコーヒー、彰人と名乗った少年の言葉は聞こえていたので、その言葉　現実には打ちのめされた。父同然と思っていた学院長は、本当は自分を裏切っていた。そしてこの体は造られた兵器。何もかもが信じられなくなるには、十分な事実で、しかしそれも確証がない事から、単なる出任せと思う事も出来た。

（僕は、本当に、偽者なんですか……学院長）

確かめなければならぬ。何としても。その為に、まだ死ぬ訳にはいかなかった。

（でも、もう僕の体は動かない……どうしても、彼に勝てると思えない）

呆気なくやられてしまった。しかし、それでも、圧倒的な強さの少年を相手に、戦っている人が、眼の前に、居る

撃たれた弾丸も避けられる程の、速いというよりは、先を読んで、相手の動きが予め解っているように、動く。そしてもし当たったとしても、対物障壁という防御がある。更には術士のそれを斬り裂く刀、優れた体術、近接戦闘の技術。

ベネディクトは健闘しているものの、右腕、左肩、左太腿と次々に切創を増やしていく。

（先輩……さつき、僕を、呼び捨てに）

立ちたい、と思う。ここまで来て、死んでしまっただけは皆に申し訳

が立たない。何より、彼女を独りぼっちにしてしまふ。アンドレアとの約束が甦る。立たなければ。立てなければ。距離を縮める事も、彼女の傍に寄る事も出来ないのだ。

ベネディクトの拳銃が斬り裂かれ、上下に真っ二つになる。残った白く輝く剣で、どうにか斬り結んでいるが 剣同士が接触するのは避けている もう、長くは持たないだろう。

（どうする、どうすれば、助けられる？ 僕には、何が出来る？）
痛覚か、触覚か、どちらかが麻痺しているようで、自分の体ではないような感覚があった。しかし腕を動かそうとすると、まだ動いてくれた。這いずり、傍に落ちていた拳銃を手取る。

（残弾を……）

確認している暇はない。急ぐ必要がある。既に猶予は無い。今しか出来ない。今、やるべきなのだ。

安全装置解除。狙いは、付けた。

「フォーミュラ・トランスフォーーム
公式変換」

六発の白い弾丸が、ブラックコーヒー目指して飛んだ。アンドレア命名、リボルバーである。まさかの奇襲に驚き、眼を見開き、甘んじてそれを受ける。しかし、やはり障壁に当たって弾丸はひしゃげた。

「公式逆変換≪フォーミュラ・リバーズ・トランスフォーマー
シヨン≫」

同じことを二度繰り返すほど馬鹿ではない。逆転写展開式、逆変換方程式、それらに代表される、今まで学んできた事全てを結実させる瞬間。章は、どうか、と心の中で祈る。

（どうか僕に勇気を。一握りでいい、助ける為の勇気をくれ。エーデルワイズ）

実行された術式は、弾丸に触れた^{キテル}霊子反射光に、反転させた^{バグ・ホール}霊子反射光をぶつける、というもの。これは、相殺というものでなく、侵食だ。まるで虫食穴のように広がって、ついには障壁そのものを消し去ってしまう。それは古紙がマッチで燃える様を思い出させた。

術式が術式によって消滅する。再構成も許さないそれは、相手の精神を相当量、むしり取ってしまう

「ヤロウ、精神への、直接攻撃か」

ブラックコーヒーの、動きが、止まる。

「今だ、ベネディクト！」

力を振り絞る。無理やり、死にかけの体を起こして、そう叫んだ。彼女の表情が一瞬、引き締まり、次に、精神を消耗して苦しむブラツクコーヒーの胴体を、白い剣が貫いた。

「ぐああ！」

肉体と精神、そのどちらも傷付けられ、尋常でない痛みを感じているだろう。しかし、章は、歯を食いしばった。

「ダメだ、それじゃ、止まらない」

途切れ途切れにそう言い、ズボンのポケットを探ると、それを探し当てた。

黒く、無骨な、腕輪。ダブルエー A Aアームドインプラント。念の為、肌身離さず持っていたのだ。

ベネディクトを殴り飛ばし、白い剣を引き抜く、ブラックコーヒー。鬼のような形相で章を見る。

「兄弟、いや、出来損ない！ テメエ、肩のクセに俺にたてつくか！」

腕輪が、右腕の手首に嵌められる。がしゃ、と固定され、フレームが見えなくなった。学院長の言葉を思い出す。特別、強い力が湧いてくるような感覚は、ない。そんな都合良くはいかない、とみて、しかし、学院長が 父親が、何故か傍にいる気がして、どうしてか、負ける気がしなかった。

「僕は、屑じゃない！」

右手に握る自動拳銃が、手ごと光を帯びる。白く、力強い。やがてそれは腕輪を通して腕の中に潜り込み、幾何学紋様となって、血管のように、どく、どく、と脈打った。

章は、片膝立ちになり、銃口を向けた。口が、無意識に動く。

「エーテル・クラッチ接続。Eラインサーキット全段直結。^{エーテル}

ARMユニットへのインターリンク開始。

リボルバーキャスト・バレットアームの制御をイデアルトリガー^{コントロール}

へ」

いつか人外を葬った、白い球体　巨大な　砲弾　が、幾つも形成されて、眩しく辺りを照らし、浮遊する。章の周りに、護るように。その数は、二〇を超えた。

「オール・ガンズ・ブレイジング
全砲一斉射撃」

がちん、と頭の中で、引き金を引いた。

距離を取っていたベネディクトには、その光景がよく見えた。

連続ではなく、同時発射。容赦無用の一斉射撃である。ブラックコーヒーからすれば戦車部隊を相手にしているのと同義だ。対物障壁を軽々と打ち砕くであろう圧倒的物量、破壊力、しかも今は回避さえままならない程、衰弱している　結果として、ブラックコーヒーは足場を崩され、宙に浮き、爆風と、立ち上る煙に紛れて、アスファルトごと扇橋下に流れる、海へと続く広い河へ落下した。

「し、しまった……かな」

加減を間違えた、というのも、この場合致し方ないだろう。初めて使う術式を正確にコントロール出来るよう、式の構成を造り込む時間はなかった。しかし、章としては、殺すつもりは元からなかった。この場合、心配したのは橋への被害の方だった。見れば、ブラックコーヒーが居た場所は跡形も無く吹き飛んでいる。航空爆撃もかくや、というほどに。

総数二〇を超える、膨大な靈子圧縮量を誇った砲弾は、その一発でコンクリート造りの建物を貫通する威力がある。そしてそれらが纏めて一点に放たれば、地形さえ変える一撃となる、その証左　この力が、自分のものなのか、それとも腕輪の力なのかは、章にはまだ解らなかった。

がちやり、という音が背後でした。

先程まで静観を決め込んでいた、武装集団。その数は増えており、

見れば、周りにずらりと車輛が並んでいる。これが全てそうなのだろう。

「ぐっ、うう」

章は呻く。体から力が抜けていく感覚に、逆らえない。限界だった。ベネディクトが駆け寄ろうとするも、銃を突きつけられて動きを止めた。やはり消耗が激しく、無理が出来ないのだろう。見れば、怪我人となっている、共にトラックを護衛していた者達も銃を突き付けられ、動けないようだった。

どうすれば、というところに、救いの手が伸びた。

兵士の足元に、銃痕が穿たれる。拳銃の口径では有り得ない、深く、大きなものだ。明らかに兵士を狙っており、皆、それに慄いた。

* * *

キサラは顔を上げた。ヘリのキャビンで、揺れる足場ながら狙撃銃を構え、扇橋のアスファルトに撃ち込んだのは彼女だ。ローター音がやかましく響く中、橋までの距離を見ると、おおよそ一キロはあるだろうその長さで、よくやるよ、と呆れ顔のアンドレア。

「外しました」

「そりゃあねえ。こんな状況で当てられる奴いないわよ。幾ら銃が良くて、場所が悪いもの」

「しかしけん制は成功しました。パイロット、橋まで一気に接近して下さい。アンディ、M4を」

途端、嬉しそうに笑ってキサラにアサルトライフルを渡した。銃身下部に、オプションパーツとしてM203グレネードランチャーという、単発の榴弾発射装置がついている。これは小型の爆弾を発射する機構である。こういった上空からの攻撃に、榴弾という攻撃範囲の広いものはとても効果的という訳だ。アンドレアも同じものを持ち、キサラの横で構える。二人とも、軍服の上に防弾ベストという形だった。ヘルメットを被る。先行する仲間のヘリが二台、視

界に入った。

「しかし良かったのかなあ、面倒事、全部武田に押し付けてきたけど」

「指揮官から緊急の呼び出しでしたし、仕方ありません。」

それと、この場合、味方の救助が優先されますか？ それとも、積荷？」

くりっとした瞳で、アンドレアを見上げる。通信で指揮官に尋ねれば済むのに、しかし、アンドレアもそうしない。

「んー、出来れば両方だけど。」

初任務でいきなり新人君を死なせるのは、寝覚めが悪いなあ」

「そうですか」

ふい、と前に向き直った。その顔が、傍目には何の感情が浮かんでないとしても、アンドレアには、同感だ、と言っているように見えた。

第十一章 変化

水滴が落ちる音で眼が覚めた。視界はぼんやりとしていて、枕元に眼鏡を探そうとしたが、体を動かした瞬間、胴に酷い痛みが来たので、少し呻きつつ、それを諦めた。

右手に違和感。手首に腕輪がついていた。頭が、うまく働かない。(いてて……ここ、どこだろう)

ぼやけた視界ながら、全体的に白いのは解る。鼻に届く匂いで、もしかしたら病院か、と考えた。どうやら左腕に点滴がされているようだ。思ったより酷いのか、心配になった。

「ナースコール、つてえっ」

寝たまま、ナースコールを押そうとしても、腕の動きに筋肉が引っ張られて、やはり痛みがあった。うかうか動けないという現状らしい。

「あいつ、たたた……これ、やっぱり」

病院着の胸元を少しめくると、左肩から右脇腹まで包帯が巻かれていた。ブラックコーヒー 彰人に斬られた傷だろう。しかしあらかた塞がっているのか、血が滲むような事はなかった。その後の記憶に関しては曖昧で、どこか不確かだ。

「彰人……新垣彰人。僕と同じ顔……ダブルエーAA」

彰人は、本来なら自分がAAだった、と言っていた。やはりそのところ、本当のところを知らなければならぬと思う。教えてくれそうなのは、一人だけだった。

「学院長か。とすると、学院に連絡を取らなきゃ。指揮官なら知ってるかな。とにかく、ナースコールを」

今度は痛みに耐えつつ、どうにかボタンを押した。応答は早かった。どうしましたか、という女性の声に 聞き覚えがある 名前を言っ、出歩いてもいいかを尋ねた。

「申し訳ありませんが、後日もう一度診察を受けていただいで、医

師の許可を得てからでなければ……」

「解りました。それじゃ、あの、僕のPDAってどこにありますかね？ 動けないので」

すぐ行きます、との事なので待っていると、以前お世話になった若い看護師が部屋に入ってきた。ああどうもと挨拶を交わす。戸棚からPDAと、ついでに眼鏡を取ってもらい、お礼を言った。

「またお世話になっちゃってすみません」

その言葉に看護師はぎよっとした。

「とと、とんでもありません！ 全然、全くお気になさらないで下さい！ そのような大きなお怪我をするという事は、大変なお仕事だったのでしよう！ なのでごゆっくり養生なさって下さい！ あの私これで失礼します！」

ささっと扉の向こうに姿を消した。一気にまくし立てられたので、章としてはぽかんとするしかなかった。

「まあ、いいか」

PDAのアドレスからデュドネの番号を呼び出す。相手はすぐに出了。こういうところは、彼らしいと思えた。

右腕の重さが、気になった。

「あ、どうも、秋田ですけれど。今、僕病院みたいなところにいます。すぐには戻れそうにないんですが」

『ああ、お前か。構わん。しばらく仕事はない』

「ええと、ありがとございます。」

でも、僕どのぐらいここにいなきゃいけないんでしょうか？ あれからどれだけ経ったのかも解ってなくて」

『看護師に聞けよ……あれから約一日だ。もうじき二四時間経つ。』

ああ、丸一日だな

「それで、積荷は」

『ああ……その話か。酷いオチだが、本当に聞きたいのか？』

唾を飲み込む。もしかしたら、まさか、という悪い予感。

「ベネデイ、じゃなかった、それよりも先輩は！？ 無事なんです

か!？」

『あ、ああ。キリサキは、傷も全部術式で治って、跡も残らなかったぞうだ。その点、お前はまだまだだな。自分の被害を最小限に抑えるのも術士の役目だぞ』

「そうですか、良かったです。先輩に、何もなくて」

デュドネが黙った。呆れたように小さい溜息を漏らしている。

『……全く、こいつらは。まあいい、それで、積荷の話に戻るが。あれは結局、ダミーだったんだよ』

疑問符が浮かぶ。続きを聞くと、つまり、章達が必死に守っていたトラックの中身は、実は空っぽで、中には何も入っておらず、ただ、本命を別なルートで輸送するのに使われた、罠だったというのだ。

驚きの事実に起き上がろうとするが、痛みがあって断念した。

「な、何ですかそれ」

『おっと、俺に当たるなよ。俺も騙された側だからな。だからまあ気持ちは解る。お前とキリサキを回収したキサラとアンドレアも、珍しく怒っていたからな。キサラに至っては、あまり顔には出さないから解りにくいが』

「ダミー……それで、まあ、今は僕の気持ちも置いておくとして、です。本命はどうなっただんですか？ 無事に送り届けられたんですか」

『第二実動部隊の話をしたよな。あいつらが本命の護衛だったらしい。忠実に任務を遂行してくれたよ。おかげでこっちは貧乏クジだ、全く、腹立たしい』

依頼主はどうしてそんな事を、と呟く。デュドネは当然のように言った。

『コード・SとAAを、まさか罠に使うとは敵も思わなかっただろうな。言ってみれば極上、特大の釣り餌だ、釣れない方がおかしいほどのな。おかげで、その目論見は成功した。積荷の中身は第二部隊の方でも聞かされていなかったらしく、まだ情報はない。ああ、

それと」

デュドネが続けた。

「キリサキが、何故か学院と連絡を取ろうとした。それが無理だと解ると、今度は学院に向かおうとしてな。暴れて大変だった。理由は、お前なら解るか？」

「……指揮官は、知ってるんですか？ 先輩がどうしてそんな事をしたのか」

恐らくは、と思う。ベネディクトも、彰人の言った事が本当かどうか確かめたかったのだらう。章にはそれ以外に理由が思いつかなかった。

「いいや知らん。というか、知りたくもない。あいつがあそこまで取り乱すような事だ、どうせお前絡みだろ」

「そ、それはそうかも、ですけど。え、先輩、取り乱したんですか。それは意外な」

「キサラが取り押さえて、今は謹慎中だ。苦労した」
苦笑する。少しだけ嬉しくて、申し訳ないという思いが強く、湧いた。

「どうして先輩は、そんな事を」

「俺が知るか。直接本人に聞け」

「でも、どうして取り押さえたんですか？ 行かせてあげれば……」
デュドネは、はあと溜息を吐いた。どうやら幸せとは縁が薄そう
だ、と思った。

「お前は、もう一度戒律教本を一から読み直せ。学院を卒業した術士は特別な事情以外で学院には戻れない。あそこは地図に載ってないからな、そうポンポン行き来されて堪るものか。学院は隠者である立場を何よりも優先する。そのところ、よく覚えておけ」

成る程、と頷いた。あまり戒律については詳しくなかった事もあり、デュドネの言葉は心に残った。

「もう用はないか？ ないなら切るぞ」

そう言うと、容赦なく切られた。少し呆気に取られて、若干躊躇

い、またPDAのアドレス帳を開く。

「出てくれるといいけど」

かけた相手はベネディクトだ。多少の間があつてから、戸惑いがちな声が応えた。

『はい』

「あ、どうも、秋田ですけれども。えーと、こんにちは」

聞こえてくる声は硬く、よそよそしかった。

『こんにちは。傷は、大丈夫？』

「はい。おかげさまで。いやあ、流石にすぐには動けないみたいで
す。あはは」

『……ごめんなさい』

「何で先輩が謝るんですか？」

『偉そうな事言つて、泣かせて。それで、そのくせ護れなくて。護つてあげられなくて、情けないでしょう、こんなの。もう少いで、君、死ぬところだったのよ』

声が震えていた。とても心配してくれていたのだと、それで解つた。胸がきゅうと締め付けられる思いだった。だからどうか、彼女にそんな事は思つてほしくないと。

そんな事を、言わせてはならない、と思うのだ。

「こちらこそごめんなさい。足手まといで、弱くて、役に立たなくて。先輩は何も悪くないです、僕が至らないところばかりで」

『そんなことない。君は助けてくれた。あそこで君が頑張ってくれなかつたら、私、死んでいたかも』

「……え？ 僕が、何ですつて？」

『覚えてないの？ ほら、凄い術式を使ったでしょう。とんでもない量の^{エーテル}霊子反射光を、君は制御してたでしょう。本当、驚いたんだから。外事四課でも大した騒ぎだったらしいわ』

「……僕、そんな事してないですよ」

ベネディクトは沈黙した。何を言っているのか解らない、という章に、どう返したらいいのか解らない、という様子だ。

話を続けると、どうやら章に その時 の記憶が残っていないらしい、という結論に、ベネディクトは至った。考えてみると、とてもなく高い負荷で意識容量に過負荷がかかったのかも という、つまり、高位の術式を使った事で、自身が扱える演算量の限界許容値を超えてしまう現象に陥ったのでは、という推測が立てられた。ベネディクトとしても、それは納得の行く結論である。むしろ、あれだけの威力を持った術式を使ってピンピンしている方がおかしいのだ、と。

負荷が過ぎる場合、オーバーフローという症状が術士を襲う。それは精神が傷み、術式回路が破損した状態を指す。場合によっては数日、目覚めない事もある術士特有の霊疾病というものだ。

高威力の術式は、それだけ、当たり前のように、術士本人にかかる負荷が高い。だからこそベネディクトのように優秀な術士でも、頻繁に術式は使えない。使いどころを誤れば、使い方を間違えれば、己自身がリスクを負う。術式とは、事象を推移させる魔法のような面がある反面、そういった危険も内包しているのだ。

諸刃の剣 術士は常に、オーバーフローという、致命的な弱点を抱えている。

『そう考えれば納得が行くわ。君がどれだけ常識外れでも、やっぱり術士だったんだと、安心も出来たし』

章はそこで、自分の右腕に違和感としてあつた黒い腕輪に眼を落とした。

「……………」

『でも何だか、不思議な事を呟いていた気もするのよね。インターリンクがどうとか、こうとか』

「……………え？」

『正直、どこまで覚えてるの？』

こめかみを押さえて、必死に思い出す。少し、頭痛がした。

「ええと、彰人を撃つて、弾丸が六発全部、防がれて、そこで…腕輪をつけたところまでは、どうにか覚えています」

それにしたって、とベネディクトが返す。

『よくあの土壇場でそんな事、出来たわね。普通の新人なら固まって、何も出来ないところよ。怖くて、人を殺すのが怖くて、死にたくなって。』

逆に怖いわ。君、どうして動けたの？』

解りません、と呟いた。章からすれば必死にやった結果で、土壇場や本番に強いというジंकウスもない。ただ、そうしなければならなかったから、そうした、というのが本音である。

そんな事が出来た事自体、特別な事であるのには、まだ気付いていなかった。

『それに、腕輪って？』

「あ、学院長が渡してくれたもの、特注らしいです。AAアームドインプラントって言うらしいんですけど、一度付けたらもう外せないらしくて」

着替えるのに困りそうです、と。

そんな事をこぼした。

思わず、思考もそれに引き摺られて呟いてしまう。思っていた事。考えていた事。心の隅に引っかかっていた、そんな言葉。

「僕は、もしかしたら偽者なんでしょうか」

はっと我に返り、撤回しようとするが、ベネディクトがはっきりした声でそれを否定する。

『ストップ。何の確証もなくそういう事を言うのは止めましょう。』

勝手に推測して勝手に落ち込むなんて馬鹿みたいだわ。それに例え偽者であろうとなかろうと、君は一人しかいないの。私にとっての相棒は、君しかいないの。それを、忘れないように覚えていて』

「……はい、ありがとうございます」

『解つたら、悲劇のヒーロー気取りは止めるのね。鬱陶しいから。』

それに、そんなの君には似合わないわ』

「すみません」

『どうしても考えてしまうようなら、明日の事を考えるようになさ』

い。

君が誰で、どんな人間だろうと、時間は流れて必ず明日がやってくるわ。人殺しの罪人にも聖人君子にも、それは変わらない。だから今日よりも明日、どう生きていくかを考えなさい。それで……少しは、救われるでしょう』

泣きそうになりながら、どうにかもう一度、ありがとうと言えた。不安が消える。少しだけ厳しいけれど、自分を認めて、必要としてくれる人がいる。それだけの事が、今まで居場所を探して迷っていた自分を、これ以上なく満たしてくれている。

どうにか堪えようとして、涙が一粒零れた。彼女がここにいないで良かった、と思う。

こんな顔を見せては、また言われてしまう。

『出来れば顔が見たかったけど。お互い、出られないしね』
ぐつと耐えて。

「あはは。少ししたら会えますよ」

『そうね、まあ、日頃こき使われて疲れも溜まっていたし、ゆっくり休ませてもらうわ』

「はい、お疲れ様です。僕もキサラさんにしごかれて、正直くたぐただったんですよ」

その後、お互いに下らない話を少しだけ続けてから、PDAを切った。章からすれば名残惜しかったが、先輩はどうなのかな、と聞きたい気持ちになった。

その日の夜、事態は変わった。急変した、と言っている。それは章やベネディクトに直接関係するような事柄ではなかったが、外事四課としては見逃す事が出来ない変化。異変である。二人がいない事で、自然と事に当たる人材は絞られてくる。この日選ばれたのは、キサラ・タチカワと武田義孝だった。

二人はデュドネのテントで、裸電球の頼りない灯りに照らされた書類の字を必死に追っていた。耳にはデュドネの硬い声が届く。

「先程、警察から連絡があった。以前から街中で散発していた、術式の残留反応が検知されていた事件についてだが、つい先程、その反応と共に、遺体が発見された。犯人はまだあがっていない、目撃者もいない。ただ、反応があった場所で人が殺されていたというだけで、ひとまずの現場検証が進められている」

体格の良い武田が、筋肉の鎧を小さく縮こまらせつつ、右手を上げた。

「聖堂教会ですかね。遺体はどのようにして殺害されてたんです？」
デュドネは立ち上がり、自身の右手側にあったホワイトボードの前に立ち、キサラ達にも見えるよう角度を変えた。

「複数の裂傷と、無理やり引き千切られたような痕跡から、恐らく人外だと思われる。人体を引き千切るような離れ業が出来るのは他に考えられないからな。ともかく二人には巡回してもらい、警察との連携のもと、これを発見し、叩く。大通りや街灯の多い通りは警察が重点的に回る為、うちは裏通り、もしくは暗がりが多い場所を搜索する」

デュドネがボードに基幹道路を描き、警察の巡回ルートと、外事四課のルートとを色分けして記した。

「警察に同行出来る奴はウチ以外からも、第二実動部隊から出すらしい。現場にて連携が取れるよう報告は済ませておけよ」

多少はやりやすくなるだろう、との言葉に、キサラは嫌そうに無表情な彼女にしては相当珍しく 表情を歪めた。

武田が、どうした、と声を掛けると、顔を上げてデュドネに問うた。

「指揮官。彼女 ラヴ・レターは今回の搜索に参加するのですか？ 正直、彼女がいては連携に支障をきたす上、場を乱す恐れがあります」

デュドネは、諦める、と首を振った。キサラは、それで事情を察し、肩をすくめた。

ベージュ色のフード付きコートを着た人物が、廃ビルの壁越しに様子を伺っている。

視線の先は廃ビル同士の間にある、細い通路。その奥まった場所に一人の浮浪者が壁を背に座り込み、力尽きたように頂垂れていた。

「……………」
コートの人物は懐に手を差し込む。すぐさま抜き放ち、浮浪者へ向けて引き金を引いた。

そこに 浮浪者は座り込んだ態勢からどうやってか飛び上がり、銃弾を回避した。

フードから覗く端正な口元が歪む。縦横無尽に壁を蹴って飛び回り、コートの人物へと襲い掛かる 浮浪者もとい、人外。

その様相は赤い眼を持つ、黒い獣である。正体を露わにした事で特性を生かせるようになるのか、コートの人物の反応を超えて、五指の爪が振り下ろされる。腕や足で防ぐ事が適わぬ速度に、人物は息を呑んだ。

しかし、目前でそれは停止した。対物障壁に物的抵抗が加えられた際に生じる、波紋が広がっていく。

人物は再び、拳銃の引き金を引いた。人外はまたもそれを、難なく避けて距離を取った。

(エスカッション対物障壁の反応が良い。この街は霊子が豊富なのかな)

減音器付き自動拳銃は抑えられた銃声を吐き出しつつ、銃弾を放つ。

人物は、このままでは仕留められないと判断して左耳に手を当てる。

「こちら アイン e i n、術式使用の許可を」

コートの人物 アインはそのまま左手を懐に差し込み、二挺目となる自動拳銃を取り出した。右手に握るものと全く同じである。

減音器付き自動拳銃 コルトガバメントM1911A1カスタ

ムという。大型の四五口径ピストルで装弾数は七発。合わせて一四発である。

すぐに応答があった。

『クラスC以下までの使用が限定的に解除されました』

「C以下、了解しました」

人物　アインは二挺拳銃を人外に向けた。

トリガーが引かれ、二つの弾丸が吐き出される。人外はそれを上への跳躍で回避し、アインへと向けて下降を始める。

アインは無防備にも、無警戒である。無意味とでも言うように、視線を向ける事さえしない。途端、人外の体へ穿たれる銃創二つ。全くの死角、背後からの　銃撃。

そして、人外の体内へと侵入した二つの弾丸は　暴れ狂った。寄生虫か病原菌のように体内を這い回り、人間ならば心臓から肺へ、胃を通って肝臓、小腸へというように　文字通り、中身を食い荒らしたのである。

無論、人外に体内器官というものはない。ただ、時折体外へと顔を出す弾丸は黒い霧のようなものを撒き散らすので、それが血のようにも見えた。

死んだ獣が対物障壁へと衝突し、くずれ落ちる。やがてそれは黒い霧となって霧散した。本来、人外は『有り得ないモノ』である為、こうして痕跡さえ遺さずに消えるのである。アインは溜息を一つ、吐いた。

「一応、人外にも銃弾はまっすぐ飛ぶって観念はあるみたいだねえ」

コートの懐へ一挺ずつ納めると、再び左耳へと手をやった。

「ラヴ、そっちはどうだい」

すると、元気が有り余っているような　活発な少女の声が返ってくる。高圧的で、自分に自信を持っている人間のものだ。

『ふふん、レギオンの一体二体、ワタクシにはどうという事もありませんわ！　この程度の事で、全くアインは心配性ですわね、そちらはいかがなさいまして？』

そう歳も離れていない為、幾らかの気安さが込められているのだが、持ち前の気の強さの為、あまり感じられない。アインはそれも解っている為　ラブ・レターという少女が誤解を受け易い性格も把握している　苦笑を一つ漏らした。

「こちらもレギオンを一体、破壊したわ。やはり浮浪者に擬態していたんだけど、微かにも解らなかつたね。初弾は当たらないように撃ったけど、込めた術式に反応して、飛び掛ってきた。キッドの観測能力サマサマと言うべきかしら……」

違つてたら後が面倒だったけど」

アインの声は女特有の、細いものだった。見れば体格も頼りない。しかも先程の出来事や言動から、術士であるのは確実であり、また、外事四課所属である事も疑いようがない事が解る。

骨伝導マイクロフォンから、今度は少年の声が聞こえた。低く、嫌味の込められた口調である。

『オイ、この糞アマ。このキッド様の感知が信用できねえのか？　そう言うって事は信用してねえ証拠だろう。そうだろ？　ああ、言わなくても解る。お前は俺が嫌いなんだ。そうだろ？』

アインは相手に聞こえないよう、溜息を吐いた。相手にするのが疲れる程、このキッドという少年は思考がネガティブで、また口が悪くという事を知っているのである。

「キッド。穿ちすぎだよ。私がどうしてそこまで君を嫌わなきゃならないのかな」

『その余裕のある態度がイラつくぜ。ああ、恨めしい……』

どんどん沈んでいく思考と声音に、しかし少女の甲高い声が割り込んだ。

『キイイッド！　突っかかるのは止めてくださいまし！　アインやワタクシどころか全世界の女性に嫌われているアナタに、誰が信頼などして下さるのかしら！　アイン、こんな人相手にしてはいけません事よー！』

アインは、フードの下で微笑み、帰還の途についた。

耳元では少年と少女が喧嘩していて、それをBGMに 歩く。

『て、てめえこの糞ガキ！ 年下のクセして先輩の俺に口答えすんじゃないねえ！ しかもへこむ事言いやがって、マジゆるせねえ！ ガチ犯すぞ！』

『誰も許しなど乞うていませんわ！ ほら、さっさといつものように一人緊縛放置でもしてらっしゃい！ どうせアナタみたいな術士のゴミ、毎夜そうして喜んでるんでしょう！』

『ものすげえ偏見だ！？ お前一体俺をどういう眼で見ただよ！俺そんなに倒錯してねえよ！』

『嘘おつしゃい！ この間なんてベネディクトお姉様の胸ばかり見て、視姦してたクセに！ 言っておきますけれど弁明は聞きませんからね、既に第二実動部隊の女性には羞恥の、もとい周知の事実であります事よ！』

ほほほ、と勝ち誇った笑みが聞こえる。

『何でバレてんだよ！ 言いふらした上に、しかも視姦してたって、仮にもお嬢様が使う言葉じゃねえだろ！ ちつとは淑やかにしやがれ、この糞アマ！』

『何でも糞とつけて、女性をアマと蔑む、なんて貧しい心根と語彙である事でしょう。人の口汚さを言う前に、まず自分のそれを治した方がよろしいのでなくて？ どうせ無理でしょうけれど』

やれやれ、と呆れる呟きが、聞こえよがしに聞こえてくる。

どうやら軍配はラヴ・レターに上がったようだった。キッドの悔しげな呻きと、恨めしい、という呟きを最後に、通信は切られた。

(……今日も賑やかだなあ)

アインはフードに隠した顔を上げて、夜空を見上げた。幾つかの星が瞬いている。街の明かりで少し見難かった。

そうして少ししていると、ふいにまた、マイクロフォンから通信が入った。

声の主はキッドである。

『おい、アイン。お前の近くにレギオンが擬態した人間がいるぞ。』

それも一体や二体じゃねえ、十は超えるな、こりゃ」

弾かれたように周囲を見回す。人の気配どころか、人通りの無い、暗い裏通りである。廃ビルが多い為、住まいを無くした浮浪者や動かなくなつた自転車の残骸が打ち捨てられている有様である。

「近くに姿はない」

「いや、これは……目的を持つてる？ 集団で移動するレギオンドと……まずいな、前例がねえ、類似データもねえから予測がたてられねえぞ」

キッドの声に焦りが含まれる。アインの心がざわついた。

「狙いがあるか、解る？ 大体でいい」

「……待つてる、おい、地図出せ……ポイントW061からN005あたりへ向かつてるな」

そつちには何がある、と強い口調で尋ねた。

「病院と、消防署。多少距離を置いて、外事四課の医療施設と……かなり遠いが、自衛隊の駐屯地」

「やはり、レギオンが集団で、同一目標を攻撃するというの？」

今までにない事例に、焦りが生まれた。それはキッドの方も同じであるらしい。

「どうなるかなんて解るか！ 俺に出来るのは敵の探知だけだ！

おいラブ、てめえ急いで帰って来い！ タキジ、ヘリの用意させとけ！」

マイクロフォンの向こうが、途端に慌しくなった。

「ラヴ レターですわ！」

という抗議の後、タキジと呼ばれた男性の応答が入った。アインも即座に走り出し、交通の足を確保しようと頭を働かせる。

黒い獣 レギオンと呼ばれるそれは今まで、単体で行動するだけの存在であり、複数が集まって行動を起こすという事はなかった。協力する事を覚えた 悪い予感が、アインの胸に走った。

人外は、ただでさえ人間のスペックを大きく上回る性能である。

今までは多対一という図式で対処に当たっていた為、術士の間には

余裕すら生まれていた。

しかし、今回の出来事で、情勢は大きく変わる可能性が生じた。

（医療施設……まさか、狙いは……いや、そんなはずはない。彼が人外の存在にまで影響を及ぼすなんて、そんな馬鹿げた事が……）

アインに思い当たるのは、最近になって四課に配属されたダブルナンバーの事である。先日眼を通したデータには、およそ術士とは思えない。人間として理解出来ない測定データが載っていたのである。身体面での数値でなく、精神面ゴーストで、だ。

許容しがたい事実。例外的な存在。例外的な、人外の行動。これらを結びつける事に無理があるとは。アインは思わない。

（人外が行動理念に社会的集合を形成する理由……そうしなければ、勝てない相手が現れた。自分達を絶滅させる存在。その可能性を持った。天敵。だから、か）

合理的である。全く無理がない。そう考えるのが、自然でさえあった。

人外の例外的行動は、全くの合理的理論に基づいた、自然に生まれた行動であると、アインは考えた。

（危険だ。彼は危険だ）

進化を促すのは、常に敵の存在である。危険を乗り越えて命を繋げていこうと考えて、その為にどうするかを考えるのが生命的もしくは本能的な行動である。現に人間も、敵国を滅ぼそうと躍起になつて平和を掲げ戦争を起こし、戦う技術を生み出してきた。今やそれも身近なものに転用されて影を薄めているが、技術の進化を大きく促してきたのは大体の部分が戦争、ひいては敵国の存在である。

故に人外がそれを成す事は、今までになく、また、人外がその必要を感じなかったからである。障害を排除する為に進化の必要を感じて、意識に改革を起こした

それは、つまり。

（彼の存在が人外を強くする！ このまま行けば、術士が、人類が、人外に抵抗さえ出来なくなってしまうのでは……）
ないのか、と。

レギオン 軍勢。軍団。もしくは悪霊を意味する言葉である。
人間と人外の戦争を予想して アインは強く、首を振った。

第十二章 接敵

痛みが酷く。左肩から右脇腹への刀傷が　　ずき、と疼いた。

「……………いたい」

何度もそうして、寝ては起きてを繰り返している。外はすっかり暗くなっていた。

傷が疼く。痛みが思考を侵す。だから　　考えてしまう。

「彰人……………僕の、兄弟」

彼は、章を　偽者　と言った。それだけがどうしても頭の隅に引っ掛かっている。では　本物　は誰なのか。彰人なのか。九番目という事はあと八人……………彰人を抜いて七人、自分と同じ顔の　兄弟　がいるという事ではないのか。

そのうちの誰かが　　本物　にならなければ、ならないのか。どうして兄弟同士戦わなければならないのか　　章は、それが解らない。

解りたくも、ないのである。

「先生……………あなたは、本当に」

兵器　として僕達を造ったのですか、と。

嘘か真かも解らないまま、秋田章は、道具のようで、道化のような自分が切なくなつて、少しだけ泣いた。

* * *

異変は波紋のように拡がり。音も無く這い寄ってくる。人外の中でもレギオンと呼ばれる夜《NYX》の化物　人間の敵である。闇に混じり、人の姿を模つて、街の中を行進するその様は生気が殆ど感じられない……………死人の群れだった。

彼らに意思のようなものはなく、ただ夜を徘徊し、靈的濃度の高い精神を持つ人間を襲い、捕食する　　という習性を持つ生き物だ。

その頻度は二週間に一度くらいのもので、そもそも人間の食事のよ
うに、絶対に必要な、生きる為の行為というわけでは、ない。

しかし、彼らはそれをしなければならぬ。道具のように 道
化のように。

存在概念に内包される、決められたルールとして まるで、人
間の敵で在る事を維持するように、である。

古くは室町時代からその存在を確認され、その時より世間から隠
匿されている 人外。これに関して知っておくべき事を挙げるな
らば 彼らは人類そのものの敵では無い という事である。

彼らは人間を捕食する。しかし決して 老若男女無差別に では
無いのである。そこにはれっきとした法則性があり 彼らのル
ールをルールたらしめている。

秩序 である。彼らの中に存在する、明確なルール。 ^{Ex}emet
hに因つて定められた情報拘束。そういう、彼らを生み、縛り付け
る柵がある。そして彼らも、彼らでさえ、だからこそ、哀れな被害
者 なのである。

つまり彼らは人間の敵ではなく。彼らの敵は人間でなく。人間の
中に混じる 異分子 のみを排除する為に、生まれ、動き、そして
死んで往くための存在。

術式を用いて事象変移を行い、 世界の設計図 ^{レコード} を歪める 霊
的因子に因る術式適性《G - p o s i t i v e》を持った術士。

彼らは術式に対して造詣が深いが、術式を使う事によつて秩序
因果律を歪める事を、まだ知らない。しかしそれは当然である。

まだそれを観測した人間が在らないのだから。

ならば観測者は必要であり それが 人外 であるという帰結
が、必要である。

彼らは術士を敵とする。観測者はそうして、室町の時代より陰陽
術を始めとした 術士 を排除しようと、レギオンを生み続けてい
る。

プログラム・ニヴル Heim とは、つまりそういうモノである。

ちょうど、ジエイクがパソコンの前でうたた寝をしていた時。ふいに呼び出し音が鳴った。パソコンに付けられているスピーカーから、人の声がした。

『こちら第二管制部！ おいジエイク、起きてるか！？』
ん、と眼を開け、伸びをしてから応答する。

「はいはい、ジエイクさんです。ご用の方はピーツという発信音の後に、」

『ふざけてんじゃねえ！ コンディションEだ、さつさとしろ！』
寝ぼけた頭がそれでようやく目覚めたようで、がばつと身を起しました。

「クラスE！？ 一体何があつた！ まさか核攻撃か！？」

何も知らない人からすれば、それはあまりに飛躍し過ぎた発想であると思うだろう。しかし人間が術士の打倒を目的とした場合、核弾頭は大いに懸念されるべき攻撃手段である。何故なら、その気になれば小規模な核爆発を、任意に、場所を選んで引き起こせるのが、術士という存在であるからだ。

それは相当力のある術士でなければ不可能な芸当 少なくともコードA以上 なのだが、原子核のみならず中性子、陽子や電子への認識、理解に基づき分裂、融合、他原子との反応などとして、爆発までに必要な過程も全て頭に入れ、効果範囲や耐熱防御など、それを術式に組み込まなければならぬ為に行うべき工程があまりに多く、事実上、単独での運用には問題があるとされる。

放射能や膨大な熱量、電磁波、被爆の問題から情報の隠蔽など 挙げるべき問題点も山ほどある。現に、術士を縛る為の戒律でも 禁止対象に指定されている。

しかし小規模であるとは言え、核攻撃が個人の手によって理論上 可能 とされる事の問題点が、ジエイクの想起した、他国からの

核攻撃の可能性である。

術士という生き物は根絶されるべきである　そう考える人間が、いないはずがないのだから。

コンディションEとは、その対応も検討する可能性があるエマ―ジェンシーコールだった。

ジェイクの応答に、モニター向かいの人物は話した。声の限りではキッドである。

『いや、そこまではいかないが。かなりヤバめの状況だな。そつちに人外が行った。それだけならまだ、そう問題でもないんだがな。徒党を組んでつてのが、まずい』

「徒党？　何だ、集団行動してるのか？　単に進行方向が同じとかじゃなく？」

『ああ、同時三方向からそつちに向かつてる。恐らく、ここからは解らないが……山の裏手からも来てる可能性がある』

ジェイクは、袋のネズミという諺を思い出した。

「しかし何故急に？　人外の習性には集団行動なんて、」

『そんなの今考える事か！　いいから全員叩き起こして逃げろ！

もしくは、戦える場所に誘い込め！　こつちからもラブとアインを行かせる、一応ヘリの用意もしくからな！　精々恩に着ておけ！』

そうして通信は切れた。ジェイクは、薄暗がりの中、警告を発信するボタンを押した。

* * *

弾倉の残弾を確認し、銃器本体に格納する。スライドを引き、弾丸を装填。再び弾倉を引き出して一発補充し、また格納すると、最後に安全装置をかけた。

一二発、プラス一発が装填された四五口径USPカスタムを右太腿のホルスターに納めると、最後に逆の太腿のホルスターへコンバット・ナイフを差し込んだ。

キサラ・タチカワの戦闘準備は、しかしこれだけでは終わらない。今度は逆である。左の腰部ベルト部分にホルスターを着けると自動拳銃を納めて、右大腿にはコンバット・ナイフ。二挺拳銃のナイフ二刀流。厳密には二本持ちと言うのが正しい。である。

これはスピアとしての意味合いが強い。戦闘中に、味方への援護が必要となると一挺では弾幕が心元ない。弾詰まりの可能性もある。そしてナイフは、キサラが自分本来の戦い方を行う為に必要とされる。

彼女としては、思い出したくない過去である為、気は晴れない。

「本当に、第一部隊が総出で当たらなければならぬ事例なんですか」

それに返したのは、同じようにして横で耐刃ジャケットを着込んでいた武田である。

「一応、そうらしいが。何だ、珍しく不安か？」

「そうじゃありません、と呟き、トレーラー三号車の内部を見渡す。……今まで、こんな事はなかったものですから」

不安なんじゃねえか、という武田の返しは、至極当然であったろう。死ぬかもしれないという不安より、誰かが死ぬかもしれない、という事を怖がっている。キサラがそういう少女である、という事を、武田は知っていた。

新人潰し 死なずに済むなら、それがいいという事である。

「そう怖がるな、大丈夫だ。いつも通り、何とかなる。そういえば、キリサキの謹慎も解かれたみたいだしな。すぐに来るだろうし、何、心配することあねえ」

いつも通り、人外を倒して終わり。その未来図を想像して、キサラは少しだけ安心した。

トレーラーは自衛隊駐屯地が保有する広大なグラウンドに、五台並んで駐車した。周囲には針葉樹が並んでおり、ところどころ地肌が見える。空は晴れていて、かろうじて樹の陰が地面に確認出来る。

程度の、明るさだった。

耐刃ベストを着込み、その上から制服であるコート^{コート}を羽織ったキサラは、下にスラックスと軍靴という編み上げブーツに似たものを履いていた。ごつく、無骨で、重い。およそ彼女の体格には似合わないものの、今はハーフパンツやスニーカーなど穿いている場合でもないので、普段は緩いお役所仕事の外事四課とは言え、状況が許さなかった。

トレーラー脇に佇むアンドレアも、胸元をびっちり締めたコート姿である。装備の内容はおおよそがキサラと同じでありながら、両手に突撃銃^{アサルト・ライフル}を掲げていた。M4A1フルカスタムという、彼女オリジナルの改造を加えた愛銃である。

アンドレア・シルベストリは術士ではないものの、弾幕によってその援護をする役割を、部隊の中で与えられている。本来は銃器管理職なのだが、つまり人手不足なのである。

アンドレアは左の耳に指を当てる。

「ジェイク。あとのぐらいで来そう？」

トレーラーがUターンし、元来た道へと頭を向けた。ヘッドライトが彼女をちらと照らした。赤い警告灯がカーゴ上で旋回している。『進行速度から予測して、西側から来るのが一番速い。助手に自衛隊の方に援護を頼ませておいた、戦車は無理だが、装甲車ぐらいは出してくれるだろうよ』

頼もしいわ、と返し、通信を切った。先ほどから自分を見上げている、小さな少女の頭に手を置く。風が彼女と、少女の髪を巻き上げた。

「大丈夫よ。誰も死なないわ」

「武さんにも、同じような事言われました。そんなに私、解りやすいですか」

くすりと笑い、屈んで目線を合わせる。

「長く一緒にいるからねえ。皆は貴女の事を無表情だ、とか、無愛想とか言うけどさ。私からすれば貴女って結構、感情豊かよ」

キサラは目線を逸らして、トレーラーの向いた先を見る。

「だって……こんな大勢で戦うなんて、初めてで。どうしても、誰か死んじゃうんじゃないかって、不安で」

「そうねえ。貴女は単独捜査や二人一組ツーマンセルの立ち回りが得意なものね。まあこれも経験よ……とは言っても。実は私も初めてだったりしてえへへ、と笑うアンドレアにつられて、キサラも　彼女にしては本当に珍しく。

柔らかく微笑んだ。

「アンディも怖いのね。ごめんね、こんな話して」

少女とは思えない、大人びた口調と、優しい声音である。彼女の本当の心を、アンドレアは数年ぶりに、垣間見た。

「うっん、いいのよ」

骨伝導マイクロフォンが受信を告げた。

『接触まで残り一分』

キサラは周囲に眼をやった。グラウンドに、十字を描くようにトレーラーは並べられている。これは障害物、もしくは遮蔽物としての利用を目的とした配置でありながら、全方向に対して効果が見込め、同士討ちの危険も低い。車体同士の間には兵を配置し、いざという場面ですぐに動ける形である。

外事四課は特務という性質上、日本国内において射撃戦闘を容認された例外的な組織である為、その扱いや戦闘行動には細心の注意を払わなくてはならない。

武器には全て減音器が付けられ。爆発物の使用は厳禁。また規定デシベル以上の発砲音が出る銃器の使用は禁止、薬莖の後始末

その他諸々という、制約がかけられた状態で戦わなくてはならない。人間同士のルールを守るのは警察に任せておけばいいのである。

軍隊ではないが、彼らは戦う牙を持っている。それは、人間とは異なるモノと戦う為の牙だ。

『指揮官より伝達事項。怪我や故障を抱えた者はただちにトレーラー内部へ避難するように。応急処置が出来るのは、そこしかない。』

離脱についてだが、ここ以外に戦闘可能な区域が近隣に存在しない為、不可能だ。いたずらに逃げて被害を広げる訳にもいかん。つまり、ここでしか戦えない。敵の数は不明だが、苦しい戦いになるだろう。

しかし必ず勝利すると私は信じている。戦う為の実動部隊、勝つ為の外事四課だ。

各員の奮闘を期待する」

デュドネの言葉の後、ジエイクが、接触まで残り二〇と告げた。

少し離れた位置にいる武田が、両手に突撃銃を提げている。キサラを見て、不安が拭えたかどうかが気になったのだろう、様子を伺った。

キサラは、右手の親指を立てて、武田にサインを送った。苦笑いされる。

『接触まで残り一〇』

右手に拳銃を。左手にナイフを。目線は針葉樹の間に蟠る闇を睨む。

(お父様。お母様。どうか更紗ハルカをお守り下さい)

ざわざわと森が騒ぐ。夜が啼き、風が喚く。

キサラは息を呑んだ。針葉樹の間、間に凝る闇に、紅く輝く眼がざつと百以上、こちらを見ていたからだ。

接敵エンゲージと叫んだのは、もう誰かも解らない。連続した銃声が轟き、鉛弾の雨が森へと降り注ぐ。それを受けて倒れるレギオン。しかし群れの全てを抑える事は出来ず、接近を許してしまう。

「往きます」

火線から逸れた場所にいるレギオンへと駆け寄る。左手に、逆手に握るナイフが刀身に光を纏って。片刃剣の形を成した。刃渡りは八〇センチ程で、キリサキのものより短い。

レギオンは右腕を振り被り、キサラへと振り下ろす。剛腕である。地面を抉り、土塊が跳ねた。キサラはしかし、既にレギオンの右側面へと回り込んでおり、完全な死角から、狼のような頭を、首か

ら斬り飛ばした。

すぐさま殺到する敵の群れ。影が這い酔ってくるような様は不気味で、異界に迷い込んだ錯覚さえ抱いてしまう。

山吹色に輝く銃弾が、長く尾を引き、影の群れから幾つも飛び出した。分解され、ナイフに刻まれるレギオンの塊から隙間を縫って抜け出すと、更に集まってくる人外

キサラの右手に自動拳銃は無い。代わりにナイフが握られている。群れから飛び出す際に持ち替えたのだ。

順手と逆手、ナイフの二本持ち。

「負けないです」

正面、一体目の右肩付け根を裂き、その直ぐ右にいた二体目の右大腿を断つ。背後に振り返ると右の順手で頭を割る。屈んで爪を避ける。牙の追撃を転がる事で回避、立て直して、左の逆手を一振りすると眼の前に迫っていた脚が斬られる。

頭上からの爪を交差させて受け止め、そのまま距離を詰める。腕の皮を剥ぐように、である。そのまま振り抜き、胴体に刃を届かせた。

左をホルスターに仕舞うと、銃を握り、少し離れた場所にいた一体を撃ち殺した。

正面を一二時として右前方一時方向、三時、五時と六時の間、七時、十時と、次々に命中させては霧散させていく。

大きく跳ねて、飛び込んでくる一体については。

「^{エスカッション}対物障壁」

がつん、と術式によって受け止め、波紋が消えないうちにナイフを一闪、股下から脳天まで通らせた。両側面からの同時攻撃が来ると感じて、咄嗟に前へ転がる。この時にナイフを仕舞って拳銃を取り出し、起き上がり様、二挺撃ちを披露した。

暁色の剣と、銃弾が思う様、敵を蹂躪していく。

この時。キサラのPDAは着信を告げていたが、彼女は気付かなかった。

幾度目かのまどろみから引き戻されたのは、微かな違和感だった。もついい加減寝たいよ　と章は思ったが、虫の知らせとでも言うのか、胸騒ぎがしている事に気付き、戸惑いつつ半身を起こした。「何だろう、眠い筈なのに、嫌に、頭が冴えてるなあ」

枕元の眼鏡をかける。傷の痛みは、昼間よりは良くなっていた。「うーん……？　何だか気持ち悪いな」

無論、胸騒ぎの事を言っている。落ちつかないに周囲を見回した後、部屋のライトを点けて、どうにか起き上がり　病室の扉を開けた。

騒がしい……という事もなく。至って平穏だった。もう就寝時間なので、明かりが心許ない。点いてはいるが、薄暗い、といった様子だった。

夜の病院ほど気味が悪いものはないな、と考えて、扉を閉める。

「やっぱり気のせいかな。トイレって訳じゃないし……まあ、暫くすれば治まるか。寝よう寝よう」

そうしてベッドに戻ると、そのタイミングでPDAが鳴った。一度驚いて、それを手に取った。相手はベネディクトである。

「はい、もしも」

『そっちは大丈夫なの！？』

いきなりの剣幕である。少しびくついて返した。思わず正座である。

「な、何がでしょうか？」

『連絡いってないの？　今、指揮本部が　駐屯地が大変な事になつてるでしょう！　アンディやキサラにも繋がらないし、ああもつえ、と漏らして、急ぎカーテンを開けた。』

駐屯地のある場所で、何かがちらちらと瞬いている。それが銃火だと理解するのに、少し時間がかかった。

「あ、あれは？」

「人外が、集まってきてるのよ！　今までこんな事なかったから、ひとまず逃げようって話になったけど、いたずらに被害を拡げられないって、デユドネが　」

彼女はそこで、一度言葉を切った。

「今、第二部隊からの援護も向かってるから、ヘリがそこを通るわ。驚かないようにね」

「わ、解りました。ところで、僕はどうすれば？」

「そうね……貴方はそこから出ちゃダメ。身動きの取れない怪我人に助けを求める程、外事四課は落ちぶれちゃいないんだから。安心して寝てなさい。ともかく、そっちに何も無いみたいで良かったわ。それじゃ」

駐屯地に一際、大きな光が灯る。グラウンドをライトで照らしたようだ。

その光を周りから塗り潰していく、黒い絵の具。それが人外の群れなのだと、章は理解した。

「でも、あの勢い　普通じゃ、ない」

一〇や二〇の数ではない。全方向から満遍なく、グラウンドの光が塗り潰されていくのだ。

音が聞こえる。それは近付いてくるにつれて爆音となり、そこでようやくヘリのローター音だと解った。頭上を過ぎていく。

章は、胸騒ぎの正体をようやく、理解した。

「見ているだけ……何も出来ないって、何の意味もないだろ」

俄かに部屋の外が慌しくなる。今の音に興味を持った患者が騒いでいるようだった。屋上へ、との言葉に、章も急かされた。

* * *

駐屯地のグラウンドは、既にその大部分　割合にして八割が、黒い獣によって埋め尽くされていた。獣の海、と言っている。そん

な中で戦い続け、隊員達は確実に疲弊し、傷つき、または倒れていた。

傷ついた味方を退かせようと前に出て、陣形を崩した武田は、すぐさま凶爪に倒れた。右腕が肘から飛び、かしづくように膝をつく。その頭目掛けて牙を剥いたレギオンは、しかし口腔内に射撃を受けて仰け反った。

「武田、生きてるなら返事しなさい！」

アンドレアは続けて撃ち、弾幕を維持した。命からがらといった様子で、武田が隊列より下がる。

「す、済まん」

しかしそれも虚しく。

鋭い踏み込みを見せたレギオンの爪に、脇腹を裂かれてアンドレアが倒れた。

それを見て、正義感の強い武田は 仲間想いの彼は、体当たりを敢行した。

怪我をした身をおして、である。強面こわもてと大きな体で仲間仲間に怖がられる武田は、その実、誰よりも勇敢であり、だからこそこの時に体を張れたのである。

それも 虚しく。

牙が襲う。首を噛まれる。喉仏のある位置。急所。

「武さん！」

キサラの悲鳴。アンドレアが銃を拾い上げる。

キサラが狙いを付ける。それは横合いからの挟撃に阻まれ、深手を負った。

アンドレアが、撃とうとして、武田義孝の、その首を食い千切られる場面を、何も出来ないままに、直視した。

「武さあん！」

左手の手首を押さえ、懸命に攻撃を掻い潜ってくるキサラに、アンドレアは首を振った。

「来ちゃ、ダメ」

「アンディ！」

「キサラは、見ちゃ、ダメ」

仲間が死ぬのを何より恐れるキサラに、それを見せてはいけな
いと、アンドレアは思ったのだろう、しかしその背後には、武田の血
を浴びたレギオンが、いるのである。

「アンディ、逃げて！」

彼女らしからぬ叫びに アンドレアは背後を振り返った。

無情と言えばあまりに無情であろう。

アンドレアが、かろうじて銃を撃つ。それを受けつつ、強引に爪
を伸ばしてくる。

キサラの見ている前で、今度はアンドレアの体に、凶爪が突き立
って

流星が奔る。それはレギオンの合間を縫って、アンドレアを襲う
その心臓部分を正確に穿った。

「え？」

それは外側からの銃撃だった。グラウンド内部からでなく、人外
の現れる方向から。

「キサラ、急ぎなさい。まだアンディは助かるわ」

その言葉は、遠い場所からでも耳に届いた。

すぐさま走り寄って その人物の援護があった アンドレア
を抱えあげると、近くの隊員に手伝ってもらい、トレーラー内部へ
と搬送した。

キサラはそこで、武田の遺体を眼にする。

「……っ！」

眼を覆わなかったのは、彼女の強さ故であろう。強く唇を噛み締
めた。

彼女が前に出ると、途端に囲まれた。腰を落とし、両手にナイフ
を握る。片刃剣を造ろうとして 限界を、悟った。

オーバーフローである。これ以上は無理だ、と体が訴えている。
精神の傷みが進行していて、下手をすれば術式回路が焼き切れてし

まう

手が震える。脚が竦む。立っている事さえ辛いのに、気付く。消耗は自覚した時にやってくる。集中が、切れたのだ。

武田が死んだ。のみならず、仲間が、こうしている今も、死んで逝く。

誰も死なずに済むと、どうして思えただろう。嫌な予感があったのだ。もしかしたら、と。それでもそれを現実にしたくなくて、眼を逸らした結果が　これだ。

キサラ　館河更紗は歯を食い縛る。

呪うべきは、己の無力である故に。

「　！」

キサラは異音に気付いた。

近付いてくる。爆音である。巻き上げられた風が髪をさらっていく。何かと見上げると。

甲高い、少女の声が戦場に響き渡った。

「ほーっほっほ！　皆さん御機嫌よう！　お待たせして申し訳ありませんわ！」

場違いだわ、という呟きが聞こえた。そちらを見ると、ベネディクトが　先程アンドレアを助けたのは彼女だ　少し距離を置いたところに居た。

ヘリのキャビンから姿を現したのは、キサラとそう外見年齢の変わらない少女である。自分をラヴ・レターと名乗る、ウエンスデイ機関の術士だ。

金髪の髪は背中の中ほどまであり、碧眼は日焼けを知らない雪の肌には輝いている。赤いコートに黒のプリーツスカートという容姿は、どうにもベネディクトとよく似ていた。

「ら、ラヴ・レター？」

キサラの呟きに、彼女はヘリのロープを降りながら応える。

「このワタクシが来たからには千人パワーですわ！　いいですこと、キサラ、アナタのような　あうっ！」

着地に失敗して転んだ。失笑さえ漏れない。

「くつくう……痛いですわ、でも平気、ワタクシは誇り高い術士ですもの」

レギオンは、律儀というか誠実というのか、その行動理念に従って、赤くなつた鼻を押さえ、半泣きのラヴ・レターに襲い掛かった。それも、対物障壁に阻まれる結果となるが

「この程度で泣いてなんかいられないですわ　って、あら。まだワタクシのブリリアントな登場シーンは終わっていませんわよ！」
右の掌から飛び出した、長く、細いもの　それは鞭のようにしなり、レギオンの体を容易く斬り裂いた。蒼い鞭である。

「ワタクシの登場シーンが、まさかレギオンに邪魔されるなんて……キッドじゃあるまいし」

ベネディクトが、攻撃の合間を縫って彼女に声を掛けた。

「ラヴ・レター、久しぶりね。早速だけど、手伝って」
それを見たラヴ・レターは、これ以上ない晴れやかな笑顔で答えた。

「お、お姉様！　はい、解りました！

このラヴ、誠心誠意尽くさせていただきますわ！」
やっぱり場違いだわ、とベネディクトが呟いた。

彼女のお陰で自分を困むレギオンが次々に減っていくのだが
キサラはどうにも、複雑な面持ちだった。

* * *

病院の屋上から眺め見る街は、人工の光に溢れていた。それに比べればグラウンドの瞬きなど小さなものである為　屋上に、人は少なかった。

妙に近い場所を飛んでいった事もあり、好奇心の強い人たちが来たようである。その人達も看護師の数人に促され、渋々と扉に向かつていく。駐屯地で何かをやっているが、あんまり興味ない　夜

だから見えないうつ眩きが、通り過ぎ様に聞こえた。

病院の患者は退屈が何よりの敵である、という事を実感する。

章は、ここから、ここまで来たはいいものの、さてどうするか、と頭を悩ませた。

距離は遠い。今、章が使える術式では援護が出来ないのは明白である。

(……いや。出来る。僕は、術式を届かせる事が出来るという事を、知っている)

右腕の腕輪を撫でる。自分の中に変化が生まれている事を、この時実感した。

(どうして、それが解るんだ？僕は、まだ術式が満足に使えないのに)

秋田章の術式は 撃つ という事に特化されている。他に応用が利かないのだ。その為に、それ以外では良い成績を示せない。

それが 今は、解るのである。

(理屈じゃない。頭では解らないのに、体が解っている感じた。

僕は、撃つという事に目的を絞れば、安定する)

その変化には、キツカケがあった。

(やっぱり、僕は以前の僕から、術式が変質してる。何か致命的に変わった訳じゃないけど、どこか……霊子反射光か?)

考えても解らない。ならば実践あるのみと構える。幸いにも人はいない。おあつらえ向きの状況。

「やってみよう。これが腕輪のせいでも、何でも、やれるんならそれに越した事はないんだから」

大きく息を吸い、吐く。

給水塔のある、屋上の壁に背を預けて、体を固定した。腰を少し落として、右手をまつすぐ、駐屯地のグラウンドへと伸ばす。

(ダメで元々。怖がってちゃダメだ、僕にだって今、出来る事があるなら、するべきなんだ)

口について出るのは、あの橋上での時と同じ、無意識に出る言葉

である。

今度は、それを聞き逃さないよう、強く意識した。

「アセンブル・シークエンス開始」

第十三章 ファイアリングシークエンス

伸ばした右手の掌に、精神^{ゴースト}を集中させる。

秋田章にとつて術式とは頼りないものという印象がある。学院で習った事では強大な攻撃能力を有する事も可能であるというが、それそのものは重要ではない、と思っっている。

では重要なのは何かと聞かれると、彼は事象変移能力と答えるだろう。

現在そこにある事象を、思うがままに変移 改変させる能力である。これこそが、術式が現代の魔法と言われる所以である。

万物を改変する、という事は、万物を疑う姿勢を持たねば、不可能だろう。

現実を自分の都合の良いように周囲に錯覚させる。術士が現実そのものに対して懐疑的になってしまふのは当然と言えた。その要因となる術式も、然りである。

空想を現実化出来る、という意味では、魔法の世界の夢物語でありながら、そもそも現実を否定する、酷く自分勝手なものなのだ。

術式を扱う術士については、^{グノーシス・ファクター}霊的因子を持った人間の中でも更に^{グノーシス・ホジティヴ}術式適性に優れた人間でなければ、ならない。

社会で活動している術士の数が少ない というのは、簡単に予想出来ると思う。

選ばれた人間の中から、更に選ばれた人間しかなれないのである。そこに学習能力の有無や性格の審査、才能なども含めると 学院から一年に輩出される術士の数は、一〇に届くか届かないかという程度だ。

これを、人為的に底上げ出来ないかという目論見が為された。後天的に術式適性を引き上げる装身具 アームドインプラントである。

これは強制的に、装着者の術式適性を活性化させ、精神との結び

付きを強化する性能を持つ。加えて、意識容量の演算限界を超えるようであればそれを調整する 術式調整体だ。

未だ試作の段階にあるこれを、右手に嵌めていながら、秋田章はその事実を知らない。

章の右肘から、真っ直ぐ伸ばされた手に沿って、白い霊子反射光が伸びて行く。光の柱である。

「リコイルカウンター、設定をAMC準拠で接続、ギアウエイトロツク」

背中をくつつけている壁に、身体を前から貫く形で霊子反射光の杭を打ち込む。腰の右と左、加えて床に、右足の甲を縫い付けられた 痛みは無い。

一見すると、身体を釘に貫かれた、痛々しい姿である。それは身体の奥まで入り込み、彼の身体を完全に固定する。これは発射後のブローバックシークエンス時、反動を抑制するリコイルカウンターである。

「Eライセンサーキット、AMCステートで維持。出力係数を一・〇から一・五へ、変換効率をA0・01からA1・00に移行。視覚^{プロシ}投写^{エックター}」

彼の意識容量では凄まじい量の演算が一斉に行われている。章はそれらを全て把握し、バラバラに保管されていた 自分の演算領域に封印されていたモノを呼び出している。これは以前の橋上戦闘で行っていた事と同じものだが、今回は規模が異なる。

ただ術式を使うのではない。戦闘用の砲撃を行うだけではない。これは自分自身に眠っていたものを目覚めさせ、それを確認する行為である。

そして、理解する。

(これは僕の知らない術式だ。理論体系からして異なる。だけど、これがどういふものかは解る。これは僕に与えられた 銃 だ) 左手を動かして、眼鏡を取った。射撃地点の拡大映像が網膜に直

接、投写されている為、現在の彼には邪魔なだけのもの。山の中腹で銃火が瞬く、その様子が眼前で行われているようにさえ、彼には視えている。

彼我の距離　およそ一七〇〇メートル。

「対象までの距離算出。コリオリ計算、電子干渉による弾道変化予測、風速、湿度、上空の気流変化を測定。網膜への情報直接投射、開始。天候、重力加速度を入力してリアルタイム・シミュレーション実行」

文字の描かれた円環が、腰の高さ程で生まれ、緩やかに回り始める。白く半透明で、半径は二メートル程。壁にめり込んでいるが、霊的なものなので物質透過をする。

そして、その環の中に　窓　が現れた。パソコンのモニターのように様々な情報を映しているそれは、数として大小二〇を超えた。

学院の学術本には記載されていない術式として、これは在る。

彼だけが使う事を許された兵器。

超長距離射撃用多段加速式重火力型術式兵装　ヘヴィ・アーム

(グラウンドには莫迦みたいな数の人外がいる。あそこに夜が凝っているようなものだ。だから僕は、あの影を吹き飛ばす。人外だけを　倒す)

アンドレアの言葉が甦る。銃は使われるだけのもの。人を殺すのも、活かすのも、全ては使う側である人が決める　彼の価値観を変えた言葉。

特定目標にだけ作用する効果を組み込んだ、白く輝く砲弾を形成し、右手の砲身機関部へ装填。

想定された反動に耐える為、仮組みにされていた砲身の密度を上げる。射程が足りないかと長さを更に増す。白い霊子反射光が余分なものこそぎ落とし、そこには砲身として機能する　対物障壁で造られた、半透明の膜が長い筒を形作っていた。よく見ると六角形が連なっている造りだ。砲身中部には上向き斜めに片側三本づつの多薬室があり、機関部の主薬室の他、巨大な砲身のトンネル内に尾栓・

閉鎖機として機能する閉鎖装置を備え、弾体の通過にあわせて閉鎖・装薬の点火を行う　　言わば連続爆発による多段加速を行うシステムを有している。

これにより、理論上、弾体は時速七二〇〇キロに達する。

戦車砲をも上回る、秒速二〇〇メートル　である。目標までの距離が一七〇〇メートル、つまり一・七キロメートルだが、それだけの距離を一秒かからずに射撃可能な初速と射程を持つ　軍隊の支援も補給も不要で、個人運用が可能な重火線砲。

加えて言ってしまう。有効射程距離は五〇〇〇キロメートルである。直射弾道弾ではあるが、これに前述の核攻撃が可能な術士としての側面を加えると　これがどれだけの脅威を持った兵装であるのかが理解出来るだろう。

（シビア過ぎる、成功するのか、こんなもの!?　ただ撃つってだけじゃ、ないのか!）

多薬室の制御が複雑過ぎる事に、章は戸惑いを覚えた。ゼロコンマの下、ゼロが幾つも並ぶような点火タイミングである。人間では不可能とみて、専用のプログラムを組み上げる。

「アセンブル・シークエンス終了。ARMユニットへのインターリンク開始、エーテル・クラッチ接続。ファイアリングシークエンス実行」

それでも、口について出る言葉を止める事は出来ず。既に中断は不可能な段階に移っている。

術式兵装　アストラル・マルチアクセラレート・キャノンは発射態勢に入りつつあった。

* * *

ラヴ・レターとベネディクトの加勢により、密度のあるレギオンの攻撃を、ある程度までは捌けるようになっていた。しかし戦況は予断を許さない。十字型に並んだトレーラーの中央、指揮本部を搭

載した一号車の中で、デユドネはモニターを見ながら、親指の爪を噛んだ。

「数が多過ぎる！ この街に、まだこんなに潜んでいたのか!？」
「街だけじゃない、かも知れないな。だが、確実に数は減りつつある。このままいけば、ひとまずは互角、ないし優勢に持ち込める」と、ジエイク。

「こちらの兵力も減っているのは同じだ。自衛隊の装甲部隊も加わって、第二実働部隊のヘリは三機も駆けつけている。しかし、それだけの戦力を以ってしても 術士の戦果には及ばない」

事実、ラヴ・レターとベネディクトが入ってから、敵はそちらを集中的に攻撃し始め、返り討ちにされている。蒼い鞭は時に剣となり槍となり、果てには弓と矢にさえ変貌し、多彩に多勢を圧倒する。ベネディクトに至ってはキサラと同じ戦法ながら、彼女よりも安定した戦いを見せている。これは根底にある術式の才能が違う為だ。

「お姉様はやはり、このラヴ程度では到底届かない高みにいらっしやいますわね。惚れ惚れ致します」

鞭を一振りし、レギオンの群れと一定の距離を開けて、ラヴ・レターがそう口を開いた。ベネディクトは表情を動かさない。

「そういうの、要らないわ。止めて」

「あら、何故ですか？ 称賛させていただいておりますのに」

ベネディクトは、レギオンの首元に術式で造った片刃剣を突き立て、股下までを裂いた。忌々しげに呟く。

「 こんなのが出来たって……!」

ラヴ・レターは眼を丸くした。彼女の知っているベネディクトは、間違っても戦いを卑下するような事はなく、市民を守る事に誇りを持っていた人物なのだ。強者として弱者を守る事に、自信を持っている 持っていた、キリサキ。

「お、お姉様。どうしてそのような事を」

これにはベネディクトも黙らざるを得ない。彼女自身、自分の気持ちの変化に戸惑っているのだ。どうしてそんな事を言ったのか、

自分でも理解出来ていない。

「知らないわよ。いいから、職務を全うなさい」

声を荒げるような、そんなみっともない真似をする彼女ではない。生まれが相応の上流階級だった事も、関係しているだろう。土壇場で冷静なままいられるのも、その為だ。

だからこそ、ラヴ・レターは彼女を慕っている。だからこそ、キリサキのわずかな心境の変化にも気付けた。

「もしかして、お姉様。戦う事がお嫌になったのですか？」

「違うわ。ただ、虚しいだけよ」

彼女の変化　戦う事で自分を保ってきた彼女は、他人を寄せ付けない壁を作っていた。それを乗り越えてきた　超えてきてしまった章に、温もりを与えてもらったのだ。

笑う事や喜ぶ事。泣く事もあって、優しくもあった。

それに満たされる事の何と幸福な事が、と。
「今は、そんな事言ってる場合じゃないわよね。ごめんなさいラヴ。忘れて」

「いいえ、ラヴは忘れません。お姉様に付いていきます」

物好きね、と返して。二人は再び敵陣へと飛び込もうとし。

ハーマニカの音に、足を止めた。風が吹いている。先ほどまでは、無かった。

「楽器の音？　どこから」

「お姉様、あそこです！　レギオンの群れの中に、人が！」

そちらを見やる。暗緑色の燕尾服を着た、白髪の混じる壮年男性。顔の彫りが深く、貫禄を感じさせる威風を持っていて。細めの体格ながら、堂々としていて、立ち居振る舞いに品があった。服と同色のモーニングコートを羽織っている。

「何、あれ。場違いだわ」

壮年男性は、口元にハーマニカを押し当て　白い手袋をしている　一つ、吹いた。

それと同時に、風が吹き、周囲のレギオンが一斉に動き出す。彼

女達へと向かって。囲まれる　ものの、膠着状態である。

「なっ、レギオンを操っている!?　人間が!?　どうして!」

「こ、こちらキリサキ、デュドネ、聞こえる?　どうやら、親玉は人間のようよ!」

壮年男性は、口を離し、穏やかに微笑んだ。

「御機嫌よう、二人のマドモアゼル。今夜はとても美しい月ですが、しかしお二人の前では、それも少々霞んでしまいそうですね」

ラヴ・レターが褒められるのに弱いという事を知っているベネデイクトは、少し呆気にとられたものの、何とか言葉を返した。まさかこんな状況で慌てふためくラヴ・レターでもないので、杞憂ではあるのだが。

「貴方、まさか人外を操っているの?　そのハーモニカは、まさか魔導器かしら」

恭しく礼をする、壮年男性。

「その通りです、マドモアゼル・アルカデルト。これは模造品なので、効果も弱いものですが、私のような非力で臆病な人間には、頼りになるものですね」

声は低く、口調も落ち着いている。激怒した人間も思わず、怒りを収めて話を聞いてしまうような。

「自己紹介が遅れました。第四機関が所属、傭兵、ミハエル・グツドマンと申します。以後お見知りおきを」

にこり、と笑って。彼は右の掌を上に向ける。

そこに、炎が生じた。しかし手袋が焼ける様子は無い。炎はどんどんと上に伸びていき　やがて一本の剣を、そこに形作る。

霊子反射光、霊子化合音、紋章。そのどれもが存在しない、不可思議な　事象変移。

その剣、両刃の刃渡り七〇センチはあり、一般的な西洋剣の形をしていて、肉厚、幅広だ。グラディウスというものである。古代ローマ時代に使われた、先端の鋭利な剣。

「このモーニングはそちらの制服と同じ、シールド・コートであり

まして。銃弾程度では貫けません。加えて術式も通しにくい。良いコートです」

そんなふうには余裕のある口上を述べると、一步、踏み出した。

「本日は、とある方より外事四課の術士全てを 試しに 処理するよう仰せ付かっております。魔導器のテストには大げさですが量産を目的とした実地演習ですので、ご容赦の程を」

目元は柔和で。口調は静か。威圧感がまるでないが………言っている事は凶悪そのものである。

ラヴ・レターは声を荒げた。

「試しに、ですって！？ 舐められたものですわね、市民を守る誇り高い術士を、まるで塵扱い 相応の覚悟があつての挑発と受け取りましたわ！」

ベネディクトの方も気持ちは同じようであるが、頭は冷静だった。

「剣を取り出したのは、まさかDMコードかしら？ だとしたら貴

方 箱庭 の

シッ、と口に指を当てる、ミハエル。

「お喋りは私も応じたいところなのですが、少々時間がおしておりまして。用意はよろしいですか？ 参りますよ」

ミハエルの高い身長を誇るが身体がぐっと沈みこむと、バネの撓みが弾かれるように、踏み込んできた。ベネディクトが応戦する。

ナイフでグラディウスを受け止めるも、剣圧があつて、重い。そも、男と女とでは基本的な膂力が違い過ぎた。

「くう、」

「受け止めますか。いや、それにしても これは。写真より断然美しい」

ぎりぎり、と刃が擦れ合う中、ミハエルはベネディクトの美貌に見蕩れた。

「お母上によく似ていますね。いや、あの方よりも一段と綺麗だ。

白磁器のような肌に、その艶やかなブロンドも、さぞかし丁寧にお手入れされているのでしょう いや、場所が違えば是非ともお茶

に誘いたいところだ。本当に、惜しい」

横合いからの鞭に、ミハエルは一度下がった。ラヴ・レターが怒鳴る。

「へ、変態！ これ以上お姉様に近付かないで下さいまし！ この変態紳士！」

「変態紳士……私は美しさを称えただけなのですが」

少しシヨックなようで、小さく呟くミハエル。

「母を知っているのかしら。変態紳士。」

まあどうであれ、家を捨てた私には関係ないけれどね」

ナイフが片刃剣となる。ベネディクトはゆっくり歩いて距離を詰めた。

「ふむ。不名誉ですが、致し方ありません。その声ももう聞けなくなるのは非常に、残念です」

「フフ。もう勝ったつもり。気が早い上に底が浅いわね、変態紳士」
ラヴ、と声を掛けると、少女は鞭を弓矢に変えた。ベネディクトも銃を構える。

十字砲火である。にも関わらず、ミハエルはコートを翻し、ラヴ・レターの放った矢を弾いて接近し、少女に対して剣を振り被った。ベネディクトの銃弾が背に命中するも、構わず振り下ろす。対物障壁が歪む、波紋が拡がる。すぐさま駆け寄り、ナイフが一閃するとミハエルは屈んで回避し、足払い。ベネディクトは転んだがそのままの勢いで前転し、立ち上がった。ミハエルの側頭部目掛けて槍のようなものが突き出されたが、ラヴ・レターの弓矢が変じたものだ。それを仰け反って避けた。

「これは」

「如何かしら、変態紳士？ 二対一では流石に分が悪くなくて？」

追い込んでいる実感に、少女が勝ち誇った笑みを湛えている。ベネディクトは油断なく構えた。

「これでは」

ミハエルはこめかみを押さえる。

「即殺するのが可哀そうな程です。残念極まる。非常に　弱い」
何ですって、と憤るラヴ・レターの額に、ミハエルの右拳が叩き込まれた。反応するような余裕が、出来るような速度ではなかった。「術士だから、という慢心ですか。細かな配慮が足りません。それで淑女として社交場に出るのは、少々先送りにした方がよろしいでしょう」

ベネディクトに向き直る。グラディウスを逆手に持ち、撃つて来いとばかりの構え。

銃口を向けて、引き金を引く。普通の人間なら避けられるものではない。

しかし、ミハエルは避けた。引き金を引くタイミング　呼吸が読まれたのだ。武道の達人が見せる、見切りに近い。

そして、ワンステップからのボディブロー。

「がはっ！」

軽い身体が浮き上がる。ミハエルは逆の手で、彼女の頭を打ち下ろした。地面に叩き付けられる。

「利き腕は、右ですか」

右肩を踏みつけて、力を込めてくる。みし、と厭な音がした。鎖骨が折られる、という予感に身体が震える。

鎖骨は肩を支える重要な骨だ。ここが折られると、腕が一切あがらなくなる。

「あつ、あ……!!」

恐怖が顔に滲む。圧倒的な力で蹂躪されて、戦う術すら奪われてしまう。それへの恐怖だ。

「うああっ……!!」

「お転婆ごっこはオシマイですよ、マドモアゼル」

そこへ、銃声が轟いた。ミハエルはバランスを崩す。この隙にベネディクトは地面を転がって、距離を取った。立ち上がる。ナイフを取り落とし、手元には銃しかない。

誰が、と見ると、トレーラーから飛び出してきた、満身創痍のキ

サラ・タチカワだ。

「キサラ！」

「先輩、ラヴを回収します！」

それだけで意図するところを読んだのか、気絶しているラヴ・レターへと爪を伸ばすレギオンを射殺し、キサラが保護、トレーラーへ運び込もうと走る。途中でレギオンがそれを阻んだが、味方の援護射撃もあり、掻い潜る事に成功した。

トレーラー内部に逃げ込み、扉を閉める。

「これで、時間は稼げるけれど……」

それがほんの僅かではない事を、カーゴ内の仲間達は実感として理解していた。

* * *

半径二メートルの円環の中に、大小様々な窓が浮いているのは、そこが演算を行うエミュレータゾーンであるからだ。弾道変化予測や着弾時の効果、周囲への被害に残留する影響などである。

全ての演算内容をリアルタイムで頭に入れつつ、右腕の砲身今は腕から切り離され、章の身体より少し右側に浮いているに最終的な微調整を行う。

術式兵装《Artificial・Arm》。彼がAAである理由は、これにあった。

「魔弾タスラム装填。霊子反射光の圧縮工程を開始、バインドネス・カタバルト発射機構準備完了。排熱機構動作確認、発射方向、放射状に強化型対物障壁展開バインダー・シールド。コントロールをイデアルトリガーへ」

砲弾、砲弾を発射する為の炸薬、砲身、そして。
ファイナルセーフティ「最終安全装置、解除」

右手の人指し指を、引き金を引く形に曲げる。
状況は整った。

章は祈る。御手もて引かせ給え、と。

歯を食い縛る。外す事は許されない。
デイスチャージ
「発射」

がちん、と。意識の引き金が引かれた。限界まで圧縮された炸薬
霊子反射光が 元に戻るうとする作用 によって魔弾タスラム
が主薬室から押し出される。次に第一薬室とその対になる位置にあ
る第二薬室が砲身内へと沈み、炸薬を作用させる。その次に第三と
第四が、そして第五と第六が そうして驚異的な速度で砲身内部
から押し出された魔弾は、真実、一秒の時間さえかけず、自衛隊駐
屯地のグラウンドを精確に狙撃した。

着弾。爆発。稲妻が落ちたような轟音と白い光が当たりを埋め尽
くし、蹂躪し、夜空に向かって煙を吐く。これも白く、強い光が街
を明るく染めた。夜が昼になる。夜空の晴れた空が、束の間蒼く染
まった。

爆発は人外にしか作用しない。トレーラー内部で、避けた扉から
外を覗いていたベネディクトは、仲間達にはそれがよく見えた。
レギオンが消えていく。ミハエルは呆気に取られている。これは
何だ、と叫んでいる。何もかもが想定外、状況の全てを引っくり返
す、反則的な一撃。

眼が焼かれる。酷い光量だ、と誰かが言った。それでも彼女は、
何もかもを白く染め上げる 完全色へと還すこの光を、暖かいと
感じた。

光が収まった頃、既にミハエルの姿はそこになかった。

* * *

「砲身排熱 ブローバック・シークエンス正常に動作。ギアウエ
イトロツク解除、分裂思考……解除」

実行していた全ての術式を解き、壁に身体を預けて、ずるずると
崩れ落ちた。

「つか、れた」

あまりの高負荷に、オーバーフローを起こしたのでは、と不安になるが、そのような兆候はない。

「……ダブルキーン AA、アーティフィシャル Artificial・アーム Arm……無関係って考えるのは、無理だよなあ」

身体を床に投げ出す。しばらく動けそうになかった。

果たして何人助けられたのか。何人死んだのか。それも気掛かりだったが、何よりもベネディクトが無事であるのかが、知りたかった。

「街への被害は抑えたから、音速衝撃波とかの心配はないだろうけど。ああ、これってやっぱり衆目の中で術式使った事になるのかな。だとしたら戒律違反になっちゃうじゃん」

そんな事が口について出る。意識が徐々にぼんやりとしてきた。

だが、突然に扉が勢いよく開いて、フードの人物が姿を現した。

「……やっぱり！」

「え？」

人物は、アインと名乗った。先の術式で人外が群がってきているらしいという。ここが高い建物である事が運良く働いて、進行の速度は遅い。ヘリがすぐに来るので、それに乗るように。そんな事を、夢見心地の中で聞いた。

それから時間も掛けずにヘリが一台、到着した。上空からハシゴを降ろして来る。それに掴まると、すぐに飛び立った。眼下を見下ろすと、グラウンドの時よりは少なくなつたレギオンが、虫がたかるようにビルへ集まって、とり付いていた。

先にハシゴへ掴まっていたアインが、言う。

「頑張る理由、出来たみたいね」

章は、意識が曖昧で、それがどういいう意味を持っているのか、解らなかつた。

第十四章 秋雨

強い眠気が、瞼を重くさせていた。

次に倦怠感、疲労感、そして 焦燥感がある。

考えるのは、本当にこれで良かったのか。何かを間違えたのではないか、という事。彼をそうして消耗させている。力を抜いて休ませる事を、させない。

原因というのも明らかである。あの場合で最も正しい判断とは何だったのか。章には、それがまだ解らないのだ。

荒らされた自衛隊駐屯地の白い建物、グラウンド、駐車場。火災でも起きたのか、焼け落ちているものまである。立ち入り禁止の立て看板と、黄色と黒の縞テープがそこかしこに 張られていた。今や敷地内一帯が危険地帯として不可侵領域となっている。

知っている人間が、何人も死亡した事を、基地にて教えられた。まさか、と思ったが、誰も否定してくれない。訓練中によく話した、売店の主人や食堂の担当者、そして、同じ課に所属する武田義孝。

章はそれで、ようやく事実を把握し、死というものを実感し、理解する。今まで無菌室のような学院という場所で、純粹培養されてきた彼には無縁のものだったので、とてつもなく重い現実として 押し掛かる。

ヘリのローターが巻き起こす風を浴びる。グラウンドのそこかしこに小さなクレーターや爪痕のような、巨大な裂痕があった。血痕も、弾痕も、あらゆる痕が夥しい程に残る 戦場痕。

それ以外は何も残っていない。以前に見た綺麗な緑の芝生はその殆どが失われ、荒れた地肌を見せていて、外周に壁のように立ち並んでいた針葉樹も相当数薙ぎ倒されている。赤と白の鉄塔は、中ほどからひしゃげ、折れていた。

襲撃後の事だが、ひとまずの避難地として別の基地に入つてすぐの頃、指揮官はまず最初に、彼を称賛した。よくやってくれた、お

前は英雄だ、と。キサラもジェイクも、無事で良かったと言ってくれた。アンドレアは重傷で面会謝絶だった為、今に至るまで声も聞いていないが、命に別状は無いとの事だ。面会謝絶が解けた頃に後で様子を見にいুকつもりである。

ベネデイクトは　ぎこちない微笑みを向けてくれたのだが、慣れていないのが丸解りで、彼は苦笑を零したものだが、それを指摘されて少し、慌てた。

本来なら　そこに武田義孝も居た筈なのだ。その風景に彼も混ざっているのが、混ざっていたのが、章の知る外事四課の姿。しかし、それは失われた。永久に。もう戻って来ない、過去のものとなった。

そして、だから、そこでようやく実感するのである。
「それが、死ぬという事」

今、外事四課はここから少し離れた場所にある、航空自衛隊の基地の一角を間借りさせてもらっている。戦闘後、生き残った隊員たちとそこで合流したのだが、当初は皆憔悴ききっており、怪我人も多く、怒鳴り声やすり泣く声をよく耳にした。それは、怒りに我を忘れなければ、仲間を失った悲しみに沈まなければ、自分を守れないからだ　章は理解した。それに限らず、仲間を失って平常でいられる人間など、相当に心の冷たい奴に違いなかった。

かく言う自分も、強い人間ではないから、それが解るのである。武田という仲間がいた。それが理不尽に奪われ、痕には大きな喪失感が遺った。彼の心が泣き叫ぶには、その事実だけで十分であり　これをただの実地研修と割り切れなくなるには、十分な現実だった。

だからこそ。心に深く、刻まれる。

「これが、死ぬという事」

戦死者一人一人を弔う訳にもいかず、軍葬儀部門の手を借りて、棺桶に入った故人と別れをした後、土葬された。しかし、彼らは自衛隊の隊員達は、外事四課に対して良い顔をしなかった。確執、

と断ずるには程度が軽すぎるもので、どこか軽い侮蔑のようなものを、章は感じただけであつたが。

術士である、という事が彼らとの間に溝を作り、協力関係にあつても信頼しきつてももらえない　　というのは、致命的なものに思へた。

しかし、完全に一枚岩の組織などないように、人と術士という、人からすれば劣等感を感じざるを得ない優占種との協力には、やはり温度差のようなものがあつた。

章は、頭を横に振つてその考えを追いやった。今考えなければならぬ事は他にあると思ひ至つた為だ。一つ、深呼吸。

彼は、死は遍く一切からの解放であり、即ちそれは救いであるとは、どうしても思えないので、仇を討ちたいと思ひ、原因の究明を求めた。デュドネの話では、これはミハエルという中年男性が仕組んだ襲撃であるというのだが、何故それをしたか、そうするに足る理由と必然性がそこに在つたのかが、まだ解つていない。

魔導器のテストだという発言情報がある。しかし、それだけでこんな危険を冒すようでは　　あまりに後先を考えなさすぎるというものだ。

戒律　とは即ち、神秘に属するもの全てを縛る戒めの法である。それは術式のみならず魔導器にも適用され、ひいては超能力《ESP》にまで干渉する。

それも全ては現代社会の調和を影ながら保つ為であり、それを人々が知る事は決してない。だからこそこれに属する情報の類は漏洩を免れてきた。

だが、この襲撃は明らかに人目につき、テレビに報道される一歩手前で、どうにかウエンスデイ機関が報道機関に圧力をかけて揉み消した、という。

否　判明してないだけで、もしかすると、映像データは既に流出しているのかも知れなかった。恐らくは今も、事態の揉み消しは行われている事だろう　　章の知らないところで。

ともあれ、ミハエル・グッドマンは関係機関その他諸々に指名手配される事になった。そして同時に、秋田章はA Aダブルキとしての権限を大幅に制限された。行動には全て決まり事がつき、一人で勝手な事をしないよう、常に監視下に置かれるようになった。

本来、A Aは第一実動部隊どころか外事四課そのものを指揮する課長と同じか、それ以上の立場にあるのだが、それは予め学院側の裁量によって、まだ章が若輩である事と現場経験が少ない事から、優秀な上司の下に置かれる事となった、というのが今回の経緯である。

そしてその結果 この襲撃が起きた。

「やっぱり……僕のせいなのかな」

思い至る原因 A Aの抹消。先日行った夜間砲撃、あれだけの事象変移を行える術士は、味方であるとはいえ、国にとってもはや脅威を感じる存在である事は間違いない。ミハエルが政府からA Aの消去という密命を受けて行動している、と考えるのは、とても無理が無いだろう。強過ぎる力は、敵だけでなく、味方も、ひいては自分自身でさえも滅ぼしてしまう為に。

それでも彼は、ただ、がむしゃらに仲間を助けようとして。その為に戒律違反という禁忌を犯して。そうして味方に疎まれて、敵に狙われた。そして、章の行動は、全てが無我夢中に行動した結果であると言える。そこに論理的な裏づけや打算の類は一切、存在しない。それは彼の若さ故であり、一七歳という年齢相応の、澄んだ心が為せるものである。

それだけに この事実が、重く押し掛かってくるのである。

多くの人が傷つき、倒れ、心に深い傷痕を残した。過去四〇〇年近くに渡り、人外が群れを為して人を襲う事などなかった事を鑑みても、今回、ちょうど引き金のようになってしまった、術士の中でも異分子であるダブルナンバーだが、自分がいなければ、この事態は起きなかった、と考えるのは とても、道理が通る。

現状を振り返る。今、外事四課は浮き足立っている。再び先と同

じ襲撃があれば確実に全滅するだろう。士気も低い上に指揮系統がガタガタだ。デュドネやベネディクトが立て直しに奔走しているが、第二部隊と合流して戦力の増強を図り、その折に関係各所への伝達や指揮統制、戦力の見直し、備蓄の采配など、やる事は多いらしい。「僕がいなければ……」

章は、それ以上その事を考えるのを、止めた。被害妄想だ、下らない、過去はどうしたってやり直せない、と振り捨てる。事は、しかし簡単には出来そうにない。それでも彼がそうしたのは、そうしようとしたのは、彼女の存在が大きかった。自分に厳しく、他人に厳しい。こんな甘ったれた考えをしていては、また先輩に怒られてしまう、と。

駐屯地跡となつてしまつた建物に入り、倒れた自動販売機や棚を越えていき、目的のものを回収して、へりへと戻つた。

彼の表情は硬い。思いつめているようにさえ、周囲には映つた事だろう。

ベネディクトを仮定した考えは、一種の逃避であり、彼の心は、現実に押し掛かる責任感、罪悪感、無力感から、そうして逃れるようにした。

* * *

部屋を訪ねると、ジエイクは言った。

「あのハーモニカは、模造品だ。^{レプリカ} オリジナルを元に製作された紛い物。しかし性能は見ての通り、ただの人間が一時的に人外の統率を可能とする、トンデモ兵器。あれは軍隊を一人の人間が完全に掌握しているのと同じだ。意味解るか？ 幾ら軍隊が指揮系統の元に組織化された集団であるとは言え、そこは人間の集まりで、命令伝達にタイムラグや武装運搬、装備の補充にさえタイムラグが生じる。インターネットによって通信系統が格段に進化したとは言え、未だにそれは消え去らない空白だ。現場から要請があつて、それが指揮

本部に伝えられて、そこで指揮官が思考し、地理状況や味方の展開の仕方やらから運搬方法まで選択して、そこからようやく補給物資の積み込みが始まって　となる。これは火力支援なんかの援護要請だつて同じだ。集団行動では、どうやっても付き纏う概念だな。

しかし、あのハーモニカはそれらの問題を全て払拭する。文字通り、一個人の意識が隅から隅まで行き渡った、完全なる戦闘集団。そこにはタイムラグなんか存在しない。ただ奴がハーモニカを吹けば、人外が群れを為して敵を襲い、殲滅するシステムだ。人外という無秩序な暴力を強引に統制し、制御されたそれは既に軍隊と同じ、武力だ。

武力統制システム。もしくは、ワンマン・アーミー。そう評すべきだろう。

考えるに、あれは空間中に漂う霊子を風のように動かして　人外は精神的な生き物だからな、剥き出しの精神だからこそ、術式のようにオカルトチックな力に弱いんだが　その意識体に何らかの作用を起こす、つまりは霊子の風で、軍勢を大まかに動かしているんじゃないか、というのが今のところのデータだ」

トレーラーから運び出された設備を、基地内の空き部屋に運び込んだジェイクは、ミハエルの魔導器をそう断じた。

「オリジナルとは？」

ジェイクの隣に座る章が、モニターを覗き込む。何かのテキストファイルが開かれていたが、外国語のようであり、読めなかった。

「少し長くなるぞ。まず最初に言っておく事として、現存する魔導器は全てレプリカだ。オリジナルはとうの昔に失われている。たった一つを除いてな。アーティファクト……この工芸品アーティファクトはな、元々人間が生み出したアイデアの産物じゃない。コードネーム・エウラリアつてえ　人外　が人に齎した、奇蹟の具現化したような産物が元になつている。こいつが大昔、人間に与えた魔導器が、アーティファクト・オリジン……異界の常識を現代に持ち込む、これまたトンデモなシロモノだ。で、これをどうにか真似出来ないかってえ事で

術式と、オリジンの贗物^{フェイク} が生まれた訳だ。しかもな こ
のオリジンでさえ、エウラリアが……人間用に性能を落としてこさ
えた劣化品だったんだから、とんでもない」

そこで、ジエイクは一度言葉を切った。章の方には幾つもの疑問
が生まれていたが、それはこの続きを聞けば氷解すると思い、神妙
に押し黙っている。

部屋を見回す。ジエイクは警戒しているようだった。監視カメラ
やマイクを探しているのか、簡易ベッドやデスクの下を一通り、捜
索して、また椅子に座った。

「人外は、あの黒いレギオンだけじゃない。もっと上位の存在とし
て人型の人外がいるんだが、こいつらが本気でヤバイ。いいか、ど
うしてエウラリアが人間にアーティファクトを与えて、しかもわざ
わざ、そいつを元に術式やらレプリカやらが造れるよう懇切丁寧に、
人間が解析出来るであろうレベルのものに抑えたと思う？」

そいつらと、人間を、戦わせる為だ。

人間は大昔から、戦う事で様々な技術を生み出し、進化させてき
た。大きな例えをあげるならインターネットだ。これさえも元は軍
事に生まれた産物で、今や世界中を繋ぐ巨大なネットワークにま
でなった。指揮伝達の高速化を計ったシロモノが、だぜ。

だから、そういう過去があるから、エウラリアは、人間のそとい
った性質と、未来を見越してオリジンを与えた。

と、というのがウエンズデイ機関が纏めたデータだ。いやあ、あの
データベースに潜り込むのは骨が折れたぜ。おかげでかなりの収穫
だったけどな。

で、まあ人型の人外は、隠語で 古代種 と呼ばれる。一説では
星の潜在事象が風景化したもの、つまり精霊なんていうやつに分類
されるらしくて、相当昔から生き続けているって話だ。絶対に殺せ
ない、とも言われる。人間に天敵がいるとすれば、コイツだな。

その古代種は、人外側からしてみても異物だという。人くくり
に 人外 と言ってはいるが、そこにはどうにも一枚岩ではない、何

か特殊な区切り、カテゴリー分けがあるようだ。

少し話し過ぎたな。コーヒーでも淹れよう。エクレア食うか？」

章は、断る必要性を感じなかったので、頷いた。

* * *

一息ついた後、章は質問をした。

「彰人も、あのブラックコーヒーが持っていた刀も、レプリカですか？」

ジェイクは頷く。

「間違いない。事実、四季刀はレプリカシリーズだ。ただ、桜吹雪春光だけはかなり特殊な刀で、その詳細はまだ解っていないな」

「では、ブラックコーヒーの刀については？ 確か、驟雨しゅううでしたっけ？」

「秋雨あきふゆだ。アキサメ、とも読めるが、違うらしいな。斬れないものを斬る刀だ」

コーヒーに口をつける。熱い。

「術式殺し。そう言っていました」

「コート・オブ・アームズ・キャンセラー。もしくは、コード・ブレイカー。はつきり言って、術士じゃああれに勝てない。ダブルナンバーでも例外じゃないだろう。だからこそそのナイフと拳銃装備だが、それにも対策されたら、もうおしまいだな」

カップを両手に持ち、まだ半分ほどあるコーヒーの水面を眺める。自分の顔が映っていた。

「もし、術士が、それを持ったら？」

ジェイクは、言葉に重みを持たせるよう、少し間を置いてから言った。

「コードのランキングにもよるが。少なくともA以上なら、もう外事四課の手には負えないだろう」

知らず、下唇を噛んだ。

コード・A A。章がそうであるように、また、新垣彰人もそれと同格でなければならぬ理由がある。

その事実、彼を絶望させるに十分な事実だった。

* * *

長い時間、話していた事に気付いたジェイクが、一度話を切った。「悪い、根がお喋りなものでよ、話しだすと夢中になっちまうんだよな」

章のカップにコーヒを注いで、今度はゆったりとチェアに背を預けた。彼の言っている事には非常に納得出来た。駐屯地での毎日が甦った。彼は聞いていない事までも話し出す悪癖がある事を、章はそれで思い返す。

「話を戻すか。ええと、現実問題、アーティファクトの贋作を持った戦闘部隊でも作っちゃうえば、もう国際問題に発展しかねない程の戦闘力になっちゃう。だから、ウェンズデイ機関はこれの製作を妨害し、邪魔して、見つけ次第ぶち壊してきた。研究施設とか試作品とか、諸々な。けれどそれもイタチゴッコだったみてえで、ああして人の手に渡るようになっちゃうた。まあそれも解る話で、人間ってのは力を持ったら、それをも手放せなくなるもんだ。ほら、核廃止とか言って、何らかの政策を行っても、世界から核は無くならないだろ？ 多分、それと同じなんだよ。比べちまったら、比べるのさえ間違ってるかも知れないが、極小規模の、それだと思ってもらえればいい」

本能的に、弱者になる事を嫌うのだ、と。

それは恐らく、そういう事であるのだろう。

「だから、ああいうのが現れる。多分これからも、ずっとだ。どんどん増えていくだろう。それこそ否応無しに見境も無く、な　こ　こから、話を変えよう。具体的な対策についてだ」

章は、その言葉に座り直した。

「聞きながら考えていました。霊子の風を起こすのなら、それを妨害してしまえばどうでしょう」

「良いね、話が早くて助かる。だが、それは果たしてどう実行する？」

「例を挙げるなら、精神と化合して霊子反射光に変換してしまえば、」

「人外の大群を操る規模の霊子風だぜ、現実的じゃない」

「ならば風の方向性に作用する術式を」

「妨害か、しかし相手は何のリスクもなく、魔導器を使用する。消耗戦に持ち込まれて終わり」

「では魔導器を破壊する」

「ビンゴ。それだ、しかしどうやって？ 俺からは狙撃を提案する」

「シールド・コートは対物防御用の障壁が自動展開される仕組みを有しています。恐らく、術士でなくとも、Eクラスまでなら防げる程度の障壁強度ですが、それを利用されてしまったらお終いです」

「対物狙撃銃ならどうだ」

「運搬と狙撃態勢の準備に時間がかかります。予め敵を呼び込める場所なら話は別ですが、接敵した時点で大軍を足止め出来る状況にあります。人間では勝てないし、術士も戒律によって、術式を好き勝手に使える訳でもありませんから。政治的もしくは社会的問題として、マスコミが今度こそ嗅ぎ付けてくるでしょうし、対象が人外の群れの中に紛れ込まれたら、終わりかと。では、罠はどうでしょう。C4爆弾などで、ミハエル・グッドマンを爆発に巻き込む」

「シールド・コートがあるだろ。更には人外という壁がある」

「それなら術式で造った爆弾ならば。精神攻撃用のプログラムを組めば」

「人外が黙っちゃいない。そういうのに敵意を持つから、術士を襲ってくるんだろ。そういうのに関して、奴らのセンサーは敏感だ」

そうすると、次第に手が限られてくる。

「 遠距離砲撃。先日行った、AMCならば」

そこで、ジェイクはパソコンのモニターに向かった。ある映像データを呼び出している。

「AMC？ あの馬鹿でかい大砲の事か、衛星カメラの記録に残ってるな。しかし展開に時間がかかり過ぎる、恐らく敵も着弾まで待つてちやくれまい。まあ、オーバークルになっちまうけど、そいつは人間同士の法律だし、人道だけどさ」

「では、展開に時間がかからなければ？ 着弾まで一秒とたたなければ、どうでしょう」

「どういう事だ？」

章は眼鏡を押し上げる。

「僕の特技です。インストール」

瞼を開ける。畳四畳分程度の広さの部屋に、ベッドと小さな卓台があった。

寝返りを打ち、二〇センチ四方の窓から外を見た。真つ暗な闇の降りしきる雨の中、街灯や街の各所にある電光彩色が主張を始めている。それは遠く、弱く霞み、ぼやけて見えた。

「はあ……」

章は、どうして自分がこんなところにいるのか、一度思い返した。「戒律違反って、ほんとに厳しいんだなあ」

先日の襲撃から、およそ二〇時間後の現在である。

戦場痕から帰り、ジェイクとの話を終えた後に、章はデュドネに呼び出された。

指揮官であるところの彼は、章の活躍を快く思ってくれていたのだが、どうやら本部の方ではそう思わなかったらしく、むしろ事態を大きくしてしまったコード・AAを拘束しろ、という命令があったのである。

ここは独房である。そして章の身体には、脱走防止用の発信機内蔵リストバンドを左手に巻かれ、更には徹底した事に、術式の駆動

源となる術式回路の活動を抑制する、特殊な薬剤を注射によって打たれてしまった。

「こんな事、しなくても脱走しないのに」

そう呟いてみるものの、上層部がそんな事を取り合ってくれる訳もない。

彼は、卓台の傍に置かれた、畳の上に鎮座する草色の座布団に座った。

「こんな事しなくても……僕は」

度重なる、高負荷の術式の使用に加えて、この処置は、彼の術士としての未来を閉じるやり方である。

もはや、今の彼は、術式を機能させる精神力を持たない。

力を使い切った、というような、漠然とした、そんな錯覚さえ、章は覚えた。

「どうなっちゃうんだ、これから……」

状況に翻弄されて、何かを見失いかけている感覚さえ、していた。

第十五章 決戦の夜

秋田章が独房に入って、しばらく。

基地の食堂で、ベネディクトは、その人物と相対していた。とは言っても、白いテーブルに座る彼女の手元にはカルボナーラが置かれていて、食事の最中、その人物が眼の前の席に座った、というだけである。

それだけならば、まだいい。それだけならば、普通だ。けれど、周りを見れば空いている席などどこにでもあり

つまり、彼女はその人物、コードネーム・アインを無視出来なかった。

「貴女、食事の時でもそのフードを取らないつもりなの」

サンドイツチを口に頬張り、咀嚼するアインはしかし、頷くだけである。

「食べますか、とばかりに差し出されるが、左手でそれを制した。

「謎の人物ぶるのは自由だけれど。食べるにたくない？」

飲み込んでから、答える。

「今日は、先輩にお話があつて来ました。伝説のコード・Sに」

伝説、という言葉に、少し呆れた。聞き飽きている、という感じであるが、音を立てないよう、フォークを置いて、話を聞こうという体勢になった。

「あら、何かしら。伝説つて程、大した事をしたつもりもないけれど」

「キリサキ 切り裂きジャックの再来を謳ったあだ名らしいですが、残虐な殺人鬼と同じなんて、随分ですよね。」

しかし、まあ、誰が言い出したか。現代のそれと言われるレディ・ザ・リップパーが、伝説でないというのはおかしい話ですね。尤も、相手は人外限定、ですけれど」

ベネディクトは、元々鋭い眼を、細めて彼女を見る。

「へえ、私をそう呼ぶなんて。言っておくけれど。私、気が短いよ。それとも、回りくどい言い方が好きなのかしら？　なら、気が合いそうにないわね」

口元が、歪んだ三日月を思わせるように弧を描いた。

「お気を悪くしたのなら申し訳ありません。ただ、私は先輩が

彼　こそが事態の中心だとしたら、どうするのかと思ひまして」
フードの下から覗くのは、碧眼である。

それは、底意地が悪そうに　ベネディクトを見た。

「彼、とは誰かしら。私相手にあまり無遠慮だと、どうなるか解っていて？」

手の甲に顎を乗せると、顔を逸らして視線を向ける。

知らない筈がないでしょう、と、アインは続けた。

* * *

ブラックコーヒーは、頂垂れた。それは諦観や悩みからではなく、呆れからだった。

くすんだ白色の部屋にいる。隅におかれた簡易ベッドに腰掛けていたブラックコーヒー、本名を新垣彰人という彼は、トレードマークである黒いレインコートを脱ぎ、横にかけていた。黒いアンダーの上に真っ白なシャツを羽織っている。ジーンズの埃をはたき落とすように、向かいのソファに座る人物に眼をやった。

「それで。ミハエル、あんたの目的は何だ。魔導器のテストってだけで、外事四課を襲った訳じゃねえだろ。何せ背後にはウエンスデイ機関がいる。あそこの抱える　銀髪姫　が出てくれば、俺達みてえなPMCなんて即座に全滅させられちまう。それが解らないアンタじゃねえだろ」

ミハエルと呼ばれた、仕立ての良いモーニングと燕尾服に身を包んだ中年男性は言った。

「勿論です。しかし、これも依頼です。傭兵家業の辛いところで

すね。金を払われたら、裏切れませんし」

よく言っぜ、と彰人が零す。

「国防高等研究事業局《DARPA》から色々な援助を受けてるア
ンタだ、魔導器のテストつてのも半分は本当なんだろう。こいつは
軍事バランスを揺るがす可能性さえ秘めてるからな。だが、本当の
ところはどんなんだ。やつぱり政治絡みか？」

ミハエルは、ふむと頷いた。顎に手をあてると、こう返す。

「そこまでは、流石に子供でも解りますが。ですが、良いでしょう、
何時までも秘密にしておけるとは思っていますんでしたしね。貴方
も無関係ではない」

ゲスト・ソルジャー構想というものについて、ミハエルは語り出
した。所々をぼかしてはいるが、それはアメリカ側が、術士の力を
欲している計画である事に、彰人は気付いた。

「つまり、術士を軍隊に取り込むと……そういう事か」

「ええ。その為に外事四課を崩壊させ、事実上の壊滅に追い込む。
ウエンスデイ機関がそれに対応するより早く、もしくはウエンスデ
イ機関そのものを敵に回してでも、我々が術士を捕縛し 本国へ
移送する。しかしこれには重大な欠点がある。従来ならば、先ほ
ど貴方が言ったように、機関の保有する切り札である 銀髪姫 が、
我々へのけん制としてありました。だから思うように行動出来ず
いたのですが この度、大きなニュースを耳にしまして」

彰人は、先を促した。この時は、彼でさえ厭な予感が振り切れな
かった。

ミハエルが、どういった人間なのかを推し量れなかったのだ。底
が、見えないという事。

「現存するあらゆる軍力または戦力に対して、銀髪姫は問答無用に
それを切つて捨てる、文字通りの切り札となり得ました。歩く核弾
頭のようなものでしょうか、最後のオリジンを持つ彼女が、しかし
……しかしです。その強大な力故に、ボロボロになっているとした
ら どうでしょう？」

「な、何だと!? じゃあ、だとしたら、お前、いや、それは嘘だろう! あの銀髪姫が、そう簡単にくたばるものか! そもそも情報源は、信用出来るところなのか!？」

「世界再生機構の、ナイツです。実際に戦闘を行ったという戦士達が証言しました。貴方はこれを疑いますか? 彼らが生きて帰ってきたというのが、何よりの証拠となる、この事実を」

彰人は戸惑い、目を泳がせるが、少しして冷静になり、首を横に振った。

「マジかよ……だが、それじゃあけん制として、というより抑止力として存在していた銀髪姫が、その脅威レベルを落としたって事だよな」

「ええ。聞く限りでは、思うようにオリジンを発動出来ない程には、という事ですが」

「だから、ゲスト・ソルジャー構想を実行に移した?」

「その通りです。」

そして、その為に私は外事四課を襲い、その組織内に手を伸ばして 彼の戦力まで落として差上げたのです」

「彼? ……つてのは、誰だ。彼女、なら解るが」
ダブルエー

「AAですよ」

「それは、俺だろう」

「公式見解では、彼です。秋田章君が、事実上、世界初のダブルナンバー。」

彼だけが、ロケットを使用せずに核弾頭の大陸間到達を可能とし、噴射炎などを捉える弾道ミサイル警戒システムでも探知出来ない核攻撃が可能であり、また、その性質上、戦略兵器削減条約にも抵触しない、核の運搬が可能なのです」

ミハエルは、にやと嗤う。肘を足の膝に乗せると、両手の指を組んで口元を隠した。

「魔弾の射手 ……それが、彼の正体。君とは違う、彼本来の性質ですよ」

「莫迦な……そんなの、俺は知らない！ あの糞親父はそんな事を一言も言わなかった！」

思い出すのは、筋金入りの秘密主義 という事だったが、しかし、教わる機会がなかったというのが、正直なところであった。

「くそ、テメエどこまで知ってやがる、まさか 世界卵《embryo》の事も」

「ええ、存じ上げております。世界卵内包個体……それを目指して造られたのが、貴方達だと 進化した新人類、ネクストだという事を」

「違う！ 俺達は進化なんてしていない、ただの系繰り人形だ、好き勝手に身体を弄くられて戦う力を持たされた、e を抜かれたら死んじまう、あの男の遊びの産物、ゴーレムなんだよ」

それが、彰人と章に共通する、最大の弱点である。

暴走もしくは反逆を企てた際にのみ、機能する安全装置。学院長が、彼らを管理、制御する為に埋め込んだ それこそが、emethである。

emethとは真理を意味する。しかし、それは頭文字を抜けば死を意味する言葉へと変わる。意思伝達でなく、現実に作用する言葉 これは言霊の概念に近い。

強く念を込めて、ミハエルを睨む。しかし、紳士は取り合わなかった。

「コアレコード・emethへのアクセス権限である、エンブリオ。その 殻《embryo》を割るのが、コード・ブレイカーの役目、という事ですか」

彰人と章、そして残る七人を造った N計画 ネクスト は、emethというキーワードによって、例外なくその生死を縛られている。

それらはそもそも、世界的设计図であるコアレコード・emethを媒介に作用される言霊術式である為に、この世のどこへ逃げようと、発動は必ず死という結果を齎す、呪いじみた脅威性と正確性を孕んでいる。

その発動認証権限は既に学院長が握っており、つまりそれは彼らが命を握られているのと同義であり 即ち、彼らは操り人形ゴレムだった。

彰人は、しかし、それを知っていた為に、その呪いを断とうと戦っていた。自分ら兄弟を操り人形という立場から解き放つ為に、彼は自らをコード・ブレイカーの担い手として鍛え上げ、今もなお、学院長という元凶を、殺害する為に策を練っている。

だからこそそのPMCであり、四季刀であり、術式であった。

「元々は再生機構が行った アドバンスド・ソルジャー A S 計画 への対抗策という事でしたが、いやはや、思わぬところに行き着いたものですね。流石は査問委員会の重鎮、と言ったところでしょうか」

見透かしている と、彰人は内心毒づいた。これ以上は無駄と思ひ、簡易ベッドから離れ、レインコートを羽織ると、廊下へ出る扉へ向かった。

どこへ、というミハエルの言葉に、振り返らず応えた。

「出撃準備だ。もうすぐ時間だしな。今度こそ、あの外事四課を潰すんだろ。テメエは色々気にくわねえし、イラつく相手だが、戦う事に関しちや信用出来る。バックにいる依頼主が誰かしらねえが、仕事は最後まできっちりこなすんだろうしな」

勿論です、という言葉を背に、彰人は扉を後ろ手に閉めた。

* * *

頭に包帯を巻いたまま、彼女はその様子を眺めていた。視界の端に映る、食堂の一角ではベネディクトとアインが何かを話している。その画の中に、唐突に、長い金髪が紛れ込んだ。

ラヴ・レターが隣に来たのである。

「キサラ。覗き見とは趣味がよくなくてよ」

別に覗いてる訳じゃない、と返し、手元のトレイにあるお握りを一つ頬張った。ラヴ・レターはすぐ隣の席に座り、夕食の時間であ

る為に、手に持ったトレイをテーブルに置いた。小さな皿にピラフが乗っている。

「まあ、そんな事よりも。何だかお姉様、少し変わりましたわね」

そう言う彼女も、ベネディクトを眺める姿勢だった。キサラは何か言いかけたが、途中で止めた。

「男が出来たからじゃないの」

口に運んだピラフーすくい分が、思い切り吹き出された。

「汚い！」

せき込む彼女に、ハンカチを渡した。テーブルの隅にあるティッシュで散らばったものを拭くと、ひと段落する。

「はあっ、お、驚かさないで下さいまし！ 思わず出ちゃったじゃありませんの！」

「出ちゃったって言い方はレディとしてどうかと思うけれど、それはともかく、私は事実を言ったまでだよ、ラブ」

「ラブ レター、ですわ！ ええいそんな事よりも、貴女さつき何て言いました？ お、男が出来ちゃったんですの？ お姉様に、あのお姉様に？」

「まあ、そうらしいって話ただけだよ。ほら、噂の新人。彼といると、先輩は女らしい反応してるんだよ。第一部隊じゃもっぱらの噂で目撃情報多数だから、根も葉もない噂って訳じゃない。実際、私も見てる」

ああ、と両手で顔を覆い、嘆くラブ・レター。

「ついにお姉さまも汚れてしまったのですね。」

そんなどこの馬の骨とも知れない馬の骨に、じゅ、純潔を奪われて、

「いや、それは解らないけれど、少なくともその先は仮にもレディが口にしていい内容じゃ、」

「ええ、かくなる上はその馬の骨を殺害して逃げますわ！ もちろんお姉様を連れて！」

ぐつと力拳を作るが、その捻じ曲がった動機にキサラは呆れた。
「歪んでるなあ。というか、先輩だって幾ら冷血とは言え、人を好きになる事もあるんだね。あと、その行動は色々と問題あるから止めといた方がいいよラブ」

「ラブ！ レター、ですわ！ それにその言い方だと貴女の語尾がラブというようにも思えますわね」

「そんなどうでもいい事に気付かなくてもよろしい。早く食べないと冷めちゃうよ」

それもそうですわね、とラブはスプーンをピラフに刺した。

「まあ、今じゃ彼も獄中の人だし、処分次第では、また先輩暴れるかなあ」

ピラフを頬張ったまま、ラブが何かを眼で訴えてきた。

「好きになる相手を選ぶのは、先輩だしね。ラブが何か口出し出来る問題じゃないと思うよ」

ラブが喉に詰まらせたので、キサラは自分の手元にあつたコップを差し出した。水が入っている。ぐいと飲んで、嚥下した。

「お姉様は孤高の存在でしたのよ、それを、それを、恋する乙女に貶めた愚かな男なんて、殺されて然るべきですわ！ 誇り高きアルカデルト家の女性が、男にうつつを抜かすなんて」

半泣きになつたラブを、キサラはよしよしと撫でた。鼻にティッシュを当てて、ちーンとしてやる。どうやら彼女の中で、ベネディクトは気高き存在であつたようだが、それを裏切られて悲しい、という事のものである。しかしキサラはそう思わない。寧ろ、誰かに頼る事を、彼女には知って欲しいと思つていたからだ。

武田が死んでも、ベネディクトだけは平然としていた。それが、彼女の心の在り様を示していたからだ。

* * *

ベネディクトは、顎に手を当てて考えた。アインの話では、AA

の持つ驚異的なポテンシャルが人外の戦闘力を底上げし、戦略性を生む論理的思考を行わせるに至る、動機であるという。

その話では、つまり、AAは人外の天敵となり得る事実を示している。

「逆を言えば、AAでなければ滅ぼせないのが、人外なのではなくて？」

「確かに、人外はレギオンだけではありませんしね。しかし人外のまだ私達が知らない上位クラスのようなものにまで、AAが通用する保証があるのでしょうか？」

それには黙るしかない。まだ試された事のない、それは前例の無い出来事だ。

アインは、俯き、声低く呟いた。

「ダブルナンバーのいる意味……どうして、学院長は彼を学院という檻から出したのでしょうか」

ベネディクトは、常に冷静である事を心にかけている為、答えの解っている問いに、彼女は眉一つ動かさなかった。というのも、彼に経験を積ませる事であるという話だが。

「さあね。案外、兄弟と会わせる為 だったのかもね」

「兄弟。ブラックコーヒーですか。刀で戦うという前時代的で時代錯誤な、PMCの兵士。第一部隊の戦闘データを覗かせてもらったら、確かに、顔や体型がよく似ていました」

「そう、刀。あれには術式を無効化する、術式殺しの特性があるわ。私達とは相性が最悪よ」

「そう、そうですね。しかし、先輩は生き残った」

「ああ、それは彼のおかげで、」

「そう、そこです。私はそこに違和感を感じるのです」

まっすぐに指差してくる。ベネディクトも、そう言われて、何故自分が生き残れたのかを再度、考察した。

「刀に触れさえしなければ、術士に圧倒的なアドバンテージがある戦場で、果たして相手はそれに何の対策もなく現れるでしょうか？」

事実、驚異的な踏み込みのスピードを見せていますが、あれだけでは対策に弱い。足をやられたら終わりですからね。障壁も、絶対的な対策とはなり得ない。ならば、何でしょうか」

ブラックコービーが、自分を何と名乗っていたのかを、ベネディクトはそこで、ようやく思い返せるのである。

「ダブルエー
A.A……」

A.Aの存在意義。それは何だったか。一個師団にも匹敵する事象干渉能力か、それとも、学んだ事を絶対に忘れない学習能力にあるのか。肉体に埋め込まれた戦闘適応因子か。

ベネディクト・アルカデルトには解らない。

AシリーズはAシリーズによってしか殺せない、確固たる理由がある事を。

* * *

夜が更ける。這い寄る襲撃の気配に気付いているものはなく。そこには束の間の平穏を享受する、術士達の姿がある。

章は、それでもこの小部屋で過ごせるだけの余裕を見つけると、これはこれで案外快適なのだ気付いた。特に何もなくても食事にはありつけるし、湯浴みの都合もされる。着替えも例外ではない。「快適だなあ」

とは言ったものの、あまりにも何もする事がないと不安になってくる性分である為、彼は勉強道具一式を用意してもらつと、それに集中した。

丸い卓台に教科書とノートを広げ、胡坐あぐらをかいてシャープペンシルを走らせる姿は、学生のそれである。脇にジュースのペットボトルが置いてあり、時折それを口に運んだ。そうして、数時間。

そんな時、不意に。

「ん？ 地震かな」

部屋が揺れた。小さなクローゼットがぎいぎいと鳴るが、やがて

止まる。

そしてまた、不意に、ぎいぎいと。

「何だろ、地震にしては小さいし、連続的な……」

すぐに止み、また、ぎいぎい。

「これって、何か、違うな。地震じゃない。人為的で、作為的なものを感じるけれど」

章が感じるのは、一瞬だけ強い揺れがあり、その後の余震のようなものは軽いというものである。

遠くで何かの衝突するような感覚。または事故のそれに似ている、
と思い浮かべた。

周辺の地理を頭に広げる。

「ここは航空自衛隊の基地だ。周囲に建物なんかない。戦闘機の離
着陸時の爆音が酷いから　だから、そんな事故なんて起きる訳が
ないんだ」

もしも戦闘機の事故なら、この程度では済まない。消防や警察も
出てくるだろう。それに、それなら警報もならない上にスピーカー
から放送もないのは組織としておかしいのである。こんな、トラッ
クが連続的に社屋の壁にぶつかるような衝撃など。

「嫌な感じだ。こつも立て続けだと、頭もやけに冷静だし。慣れつ
て怖いね」

四角い空を見上げる。相変わらずの雨である。

ざあざあ、ぎいぎいという不協和音が部屋に満ちる。顔を顰めると、
看守へ直通のインターフォンを使う。デュドネが気を利かせて
置いていったものだ。どうやら章は普通の囚人とは扱いが違うよう
であると、その時に教えてもらった。

「　出ないな」

いつもならすぐに出る、中年男性の声がしない。章はそこで、部
屋の扉から外を見る為の小窓を、そつと指で開けた。

冷えた空気が入り込む。暖房の効いている室内から暖かい空気が
逃げていく。

そして、真っ暗な闇が凝っていた。グリーンの廊下のタイルと黒のコントラストは、まるで病院のようで落ち着かない。白い壁もそれに輪をかけている。

そして赤い二つの警告灯も、まるでこちらを見ているようで、不気味だった。

小窓を閉じる。暗くて何も解らないし、誰もいないようなので諦めたのだ。

扉の傍を離れる。

すると、動きがあった。このところよく聞いている看守の声で、扉の外から呼ばれたのだ。

「はい、何ですか？」

寄ってくるように、と言う。章は、それで、少しだけ安心して、言われた通りにした。

「……………」

それが、仇となった。

扉を突き破ってくる、五本の爪は縦に鋼鉄のそれを引き裂き、章の身体に届く寸前で、掠めていった。

黒い爪。引き裂かれた扉の向こう、凝った闇の、その中に。

敵が居るのである。レギオンという人外が。人に擬態出来る怪物が。既に基地内に潜入して、何人かの兵士と入れ替わっていたのだ。という事を、彼は後になって知る。

扉を裂いた右手とは逆の手で、刺すように爪を揃え、伸ばしてくる。以前の章ならば慌てふためき、胸を刺し貫かれていたようなそれを、しかし、彼は、掴んだ。

「っ
っ」

息を止め、歯を食い縛って、引き寄せる。さらに足を掛けて、前のめりに転ばせた。その際、鉄製の扉ががらんがらん、と欠片になって散らばる。

身体の位置を入れ替える。レギオンは室内、章は廊下へ。

逃走する状況が出来た。彼は走って看守部屋へ向かう。何度も後

るを振り返り、追ってきてない事を幾度も確認して、そこへ辿りつ
いた。

「うっ……!!」

夥しい程の血痕が、あちこちにばらまかれて、真っ赤に染めあげ
ている。章は、地面に人の内臓らしきものを見つけて 胃の中の
ものを吐いた。

ひとしきりえざると、口元を拭い、開き直って 焦りもあつた

室内を物色し、使えるものを探した。その際に緊急用のベルを
鳴らす非常用ボタンを押しておいた。

「フォーティ・ファイブか」

コルトガバメントである。木机の引き出しに入っていたそれを取
り、残弾を確認していると。

どど、どど、どど という、肉食獣が地を蹴って駆ける躍動感

ある音が、廊下に響き渡り 人外が追いついてきたのだろう

やがて壁を粉碎し、小さな看守部屋ごと、章を押し潰した。

第十六章 男の戦い

どうやら感覚が麻痺していたようで、指先どころか肩から先、腰から下の感覚がなかったのだが、徐々に戻ってきたようだった。

う、とうめき声を上げる。動けるようだ、と結論付けると、眼を開けた。薄暗い。室内にあった蛍光灯が割れたようだった。遠くのほうから届く光で、かろうじて天井が見える。半分ほど瓦礫に埋もれていた身体を起こす。埃が人工の明かりに照らされて浮かび上がる、粉雪のような光景だった。

（痛い。なんとか生きてる。空気が埃っぽいし、どうなったんだ、僕は……いや、それより怪我の具合を調べないと。まあ、そんな暇があればいいけど）

じわじわと流れていく感覚。手や足からのそれは、見なくても解ったが、血だった。章はどうか動く右手をついて、立ち上がる。処置をしなくては、と思い、廊下の向こうに眼をやると、赤い警告灯が二つ、揺れていた。それはやがて揺れ幅を増やしていき、それが歩みによるもので、つまりは眼である事を主張した。

「戻ってきたんだね。さっきで殺した、と思った訳だ。意外、人外つてのも間が抜けてる」

自分が立ち直るまでの時間がそうして稼げた事は、章にとっては喜ぶべきであつたらう。しかしここから先は誤魔化しが効かないと感じて、壁が壊れて出来た瓦礫の山を踏み越えた。

今の自分に術式は使えないのを、よく理解している。論理的思考ならば逃げるべきであろう。章は、しかし、普段ならばそうしただろつ事が、今は出来なかつた。

「勉強とか、快適な生活とか、今更だよ。僕達には戦う力があつて、だけどそれは人間が本来持つべきものじゃなくて……だから、普通の人達は僕等を敵視する。君達も、そうなんだろ。でも、これでもようやく見つけた僕の居場所なんだ。血なまぐさくて物騒でも、

それを侵そうとするなら戦わなきゃいけない。

戦わなきゃ、守れないから」

導き出された結論に、章は是と頷いた。腹を据えて。腰を落とす。深く息を吐く。

「来いよ。今の僕は、お前なんか怖くないぞ」

レギオンが姿勢を落とす。四足で地面に這い蹲るように、身体のパネを撓めた。章は左手を軽く開いて前に伸ばし、右足を一步引いてそれに身構える。CQCの構えだ。

レギオンが跳んで距離が詰まる。地面から射出されたかのような勢いで、心臓目掛けて爪が伸ばされてくる。一直線。章は鋭く息を吐き、右足を跳ね上げると、人外の胴体へと足裏を当てる感じに蹴り出した。腕よりも足の方が長い。当然のように先に到達し、進行を阻んで、レギオンは一時的に行動を止める。止めざるを得ない。少し仰け反った体勢の章は、眼前にまで迫っていた爪　を持つ真っ黒な腕を掴み、一息で足を戻し、自分のほうへと引き寄せた。人外は転倒を避ける為、踏み止まろうと、片方の足を章のほうへ踏み出すのだが、章がそれを払うと、人外は難なく、うつ伏せに転倒した。

背中を踏みつける。自動拳銃　コルトガバメントを取り出す。

頭部へ二発、足をどけて、心臓へ二発。血は出ないが、再生可能なダメージを受けた人外は息絶えた。

呆気ない、と思う前に、二体目が眼の前にいた。壁が壊れた時の音を聞きつけたらしい。続く増援を考慮し、章は迅速に対応した。

「くっ……」

出血多量で視界が霞み始めると、反応が遅れて受ける傷が増えた。余計に動けなくなると、三体、四体と増える敵の数に絶望を覚えた。何もかもが悪い方向に流れている。どこで間違えたのかを考える。やはり逃げておけばよかったか、と思い返したが、章の教官であったキサラ、アンドレア、武田義孝、そしてベネディクトならば、恐らくは論理的にそうしていただろうし、もしここにいれば彼をそう

促したかも知れないと、重ねて考えた。

考える。だからこそ考える。考えるのを止めるのは死んだ時だけだ、と武田が言ったからだ。

章のいる場所は基地の南部、すぐ背後に山を背負う奥地で、後ろは行き止まりに近い。ここまで侵攻されているという事は、既に基地の大部分が制圧されていると考えていい。つまり、ここから逃げるとしてもそれは外部に向けてであり、それもまた、無尽蔵に湧くであろう人外の手から逃れるとしては、成功率は限りなくゼロに近いと。

だからこそ、逃走でなく進行であるべきだ、と。防御でなく攻撃でなくてはならない、と結論し、幅のある廊下をまず頭に置いて、立ち回った。

息を吸う。吐く。また吸って、止める。

一対多の戦闘状況で、正面からやりあっては結果が見えている。なので章はまず手近な人外の腕を取り、背後に回って関節を固めると、それを盾代わりに肩口から銃口を敵の群れに向ける。発砲と同時に横から飛び掛ってくる敵に、盾にしていた人外をぶつける。背後から来る人外には腹部を蹴りつけ、衝撃で動けないところを引き寄せると、己の左手側に突き出す。ちょうど飛び出してきた人外と衝突する。最初に正面であった方向、今はそちらに背を向けているが、そちらから来る攻撃の手合いには振り向きざまの発砲によって応戦し、敵の体勢を崩す事に成功する。

「ハッ、」

駆け寄り、動けないところに勢いをつけて蹴りを放つと、大きく後ろに吹き飛び、続く人外を巻き込んで倒れた。

敵陣をこうして強引に突破すると、章は強く実感した。

（キサラさんのおかげだ。

CQCの技術と、戦う心構えがあるから、僕はこうして、戦える）
彼女と何度も行ってきた組み手や反復練習が、実を結んだ瞬間だった。

キサラが教えた体術だけでなく、アンドレアの銃の使い方、武田が説いた、どんな状況でも冷静でいられる強い精神。それらが体と心に、確実に吸収されている。術式がなくても戦える事に、僅かながら自信を抱いた。

警戒しながら廊下を走っていく。時折現れる人外は、次第に数を減らしている。この先に味方がいるのか、と考えた。

銃声が聞こえてくる。散発的で、どこかで誰かが抵抗しているのが解り、心強くも不安になった。けたたましくサイレンが鳴る。基地一帯がライトで照らされた。上空をへりが飛んでいる。様々な音が一気に押し寄せ、少し戸惑った。軍内部もようやく対応し始めたという事だろう。どこかのスピーカーからは怒声のような指示が飛んでいる。申し訳程度の雨音がそれらのBGMとして流れる。

放送の中に《ブラックコーヒー》という単語を聞き取った。肌が泡立つ感覚に、ぶるりと身震いすると、考えるよりも先にその場所へ向かった。

日本刀を軽く振ると、刀身に付いた血糊が、びしゃ、と床に飛び散った。肩に担ぐようにして相手を誘う。

「来いよ、キリサキ。それとも、お仲間がいないと弱気になっちゃうか？」

ブラックコーヒーは挑発的な物言いをして、黒いレインコートのフードを取った。

「これならどうだ。ネックハンターのお前にゃ、ちよつど良いだろ。首狩りの赤い魔女。向こうじゃまだギロチンなんて古臭い事やってんのかい？」

彼の足元に転がる、仲間の姿を見て、ベネディクトは顔を歪めると、姿勢を低くして、右手の自動拳銃と左のナイフを構えた。相手までを距離にして六メートル程。CQCの距離ではないが、一足飛びのようにして十数メートルを一気にゼロにするブラックコーヒーの身体能力を警戒している。口を開いた。

「お前達は、どうして私達を狙う？」

「愚問だな。術士は世界の敵だ。本来在ってはならないものを当然のように使い、事象を歪める。だから、お前達がいると不可思議な歪み が生まれる。人外がそれに代表されるものだ。本来ならば、術士さえいなければ、絶対に産まれてこなかったものだからな。人間の理屈では説明し切れない何か、術式が使われる事で世界中に生まれ始めている」

「……へえ。それで？」

「解らないか。術士が術式を使って秩序を乱すから、こついう人外が現れたり、超能力者なんかの、説明し切れない不可思議が生まれたりするんだよ。」

だから、お前達は排除される。お前達に居場所はない。お前達は、消えるべきだ」

ベネディクトは息を呑んだ。強引なこじつけと言えばそれまでだが、ブラックコーヒー側の情報量とその考察に、少し興味が湧いた。「人外が現れるのは、私達のせいだと？ 冗談にしては笑えないわね。どうしてそうなるのかしら。誰かが観測したの？ 聞いただけでは、結論への結びつきが弱いわね」

「観測。観測か。言っちゃまっていいのか？ これ、割と重要な情報だぜ？ ただで教えるのは、流石に割りに合わないな。敵とのお喋りは緊張感があつて面白いから好きなんだが、ううん、ネタばらしがこつちばっかりつてのは面白くない。そつちからも教えてもらおうか。あのAA 俺の弟は、システムを自在に使えるようになったのか？」

「システム？ さあ、知らないわね」

「誤魔化すなよ。システム・DDを使ったろ？ あの馬鹿でかい大砲、あんなものがただの術式なワケがないんだよ。アレが使えたとて事は、もう出来上がってきちまつてる。いや、後発だしな。元から完成してたのか。ただ、OSであるあの人格が邪魔をして、わざわざ小出しにしてるっただけだな」

「何を……言ってるの？ 人格？」

「ハッ。それも知らない。お前ら、なんであんな化け物と一緒にいるんだ？ 下手すればお前ら全員皆殺しにするような危険因子だぜ。あの狸が対ESP用に造り上げた生体兵器。それが俺達だ。Aナンバーズだ。人の皮を被った悪魔なんだよ」

ベネディクトは後ずさりした。無意識の事である。顔には戸惑いが浮かんでいる。

「次世代超兵士構想……調整された人造の兵士によって超能力者であるドミネーターに対抗するプランだ。お前達術士は、そのテストベッドにしか過ぎないんだよ」

「何ですって……！？」

「その超兵士が使う武装が、アームズARMS。既存の火器から外れた、常識外の威力を持った武器。これが個人運用可能な核兵器とされる靈子核を代表とした、術式兵装と呼ばれるものだ。今ならまだ間に合う。付き合い方を考えた方がいいぜ、そんな化け物とはな」

ブラックコーヒーはそう言って、ポケットから一個の腕輪を取り出した。

「喋り過ぎたな。しかも結局、俺からネタばらしばつかじゃん。

お喋りなのも困りもんだわ。まあ、いいけどさ。とにかく、お前達みたいな欠陥品を、合衆国側で欲しがってるんだよ。ゲスト・ソルジャー構想だったか。どこも考える事は一緒だな。ま、せいぜい向こうで働いてきてくれ。多分、人体実験ばっかだろうけど」

そう言っつて、その赤い腕輪を嵌めた。

「さて、再開だ。もうあんまり時間もないだろうしな。

おとなしく寝てもらおうぜ。俺の目的の為に」

新垣彰人は、居合いの構えを取って、ベネディクトへとその剣を抜き放った。

* * *

ミハエル・グッドマンは基地が火に包まれていく様子を、暗い山中から見ていた。眼を細めて戦場を見下ろす。雨が降っているので傘を差していた。傍らに立つ樹の幹が、雨水でしけっていた。

「第一段階は成功。次に、標的を巣穴からいぶり出す。新垣君が変な欲を出さなければ順調に行くのでしようが、あの若さで自制が効くかどうか。」

ひとまず、ノルマとして優秀な術士を四人とは伝えていますが……やはり兄弟の縁、簡単に無視出来るものではないでしょうね」
大きく爆炎をあげた車輛庫へと眼をやる。

ざわざわと木々がざわめく。きいきいと人外が囁く。ざざざざ、と黒い波が基地へと進んでいく様子は、津波のように圧倒的であり、しかし、それを眼にしても彼は勝利を確信できなかった。

「システム・DD あの方のお話が真実ならば、この程度の状況、先日のように一撃で跳ね返せるでしょう。例えるのなら、デウス・マキナのようなものですか。流石は学院長先生の手がけた最新鋭ネクスト。ただの切り札ではなく、彼の投入が勝利を意味する エース・ジョーカーと言ったところですね」

時折ハーモニカに感じる、霊子波の動きを慎重にチェックする。先ほど、大きな揺らぎを観測した事がその原因だ。

ざわざわ、と近木が騒ぐ。風が出てきていた。はためくモーニングコート。

「マナの動きを感知出来れば、戦場を把握する事は容易い。故に、それは局面の操作さえ可能となる。けれど新垣君、幾ら君が怪異殺しの西村に教えを受けたと言っても、それが大局を左右する要因には成り得ませんよ。」

戦場を一撃で覆すAAと、近接戦闘に特化したAA……出会う場所が違えば、良いコンビでしたでしょうにね」

呆れた調子で、溜息交じりにそう言った。

新垣彰人にはルールがある。それは他人に課せられたものでなく、自ら望んで自分を縛ったものだ。他人の命を奪う行為に関係するそれは、自分を新世代の人類　ネクストと定義して、ノーマルとされる通常の人々は殺さない、というものである。

「諦めるキリサキ。お前にこの剣は破れない」

しかし、通常ではない人々　エクストラとされるESP能力者や術士達は、その限りではない。殺してもいい相手　そう定義出来る程度には、新垣彰人の中で彼らは憎い敵だった。

肩口に剣を突き立てられ、通路の壁に縫い止められたベネディクトは、ジャケットの赤にじわじわと血が広がるものの、腰を下ろして、張り付けにされた体勢から苦しげに口を開いた。

蹴られた手から拳銃を落とし、ナイフそのものを切断されて、最後の頼みである術式も、破られた結果だ。

術式殺しに術士が襲われれば、こうなるという図式を、彼女もまた破れなかったのだ。

「ついてないわね」

ブラックコーヒーが見下ろす。刀の柄に手をかけている。

「運も実力のうち……」とは言うが、実際に運を味方につけるのも、ある程度は努力でどうにかなる。この場合、つまりお前が俺に勝てる見込みは万に一つもなかったわけだ」

「随分な自信だわ……過信か。呆れる」

「安心しな、お前も殺さない。俺は、無意味な殺生はしないし、そういう目的があつての襲撃だからな」

その言葉に、倒れている味方に眼をやると、確かに死亡してはいないようだった。微かに息をしているよう体が上下していたり、そうやって見れば気絶しているだけに映る。

「偽善ね。敵は殺すものでしょう。自分が生き延びる為には」

さっさと殺せ、と続けると、ブラックコーヒーはポケットからハンカチを取り出し、それを使ってベネディクトに猿轡をした。舌を

噛み切つて自害する、という事を危惧してだ。

「自殺されても適わん。言っておくが、俺の方には、戦争をしてい
るつもりなんてないんだよ。ただ、俺には目的がある。その為に戦
争を利用してはいるだけでな。だから、戦争に染まるつもりはない。
お前達が俺達をどう見ていようがな」

戦争という言葉に、ベネディクトは眼を鋭くして睨んだ。喋れる
ならばブラックコーヒーを責めるきつい文句を吐いていた事だろう。
近くで起きた爆発によって、地響きが届いた。

「俺は奴を止めなきゃならねえ。プロジェクト・アトラスなんてふ
ざけたものを実行させるワケにはいかねえからな。その為に、奴の
人形であるAシリーズは全て破壊する」

失血と傷みで意識が歪む中、ベネディクトはその言葉を聞いた。

「Aシリーズを中核とした、国境無き軍隊……クルセイダーズの結
成によって他国への牽制とし、その隙に、ある能力を持った人間を
造り出す。それが、コード・SS。^{ダブルエス}お前をベースとした、お前を超
えるコピーという話だ」

眼を見開いて、彼女はブラックコーヒーを見た。

「意味が解るか。俺は術士じゃねえ。生まれながら、僅かなESP
能力を持っていただけの人間だ。その俺の人造コピーが、AA。造
り出された存在のクセに、いまんとこ最高クラスのエーテル能力を
持ってやがる。そして、生粋の術士であるお前のコピーが、次に産
まれてくる。そいつがどれだけのエーテル能力を持っているか、想
像がつくか？」

ブラックコーヒーは続けた。銃火の光が窓から差し込み、せわし
なく照らす。

「仮説では、Giftと術式を組み合わせた力を持ち、それは死者
を甦らせる能力を持っているらしい。術士を縛る制霊条約^{リミット}に違反す
る、蘇生能力だ。治癒とか再生とかって話じゃねえぞ。だから、も
しそんなものが現実になったら、世界中が大混乱だ。死んだはずの
人間が、武器を持って襲ってくる。死者の軍団なんてシャレにもな

りやしねえだろ」

ベネディクトは、彼の目的に合点がいき、ただ敵というだけの存在と見るには、あまりに重い意思を持っていると理解した。

死んだ人間が生き返って、生きた人間を襲う予想を立て、エンターテインメントの世界の作り物が現実となる、気味の悪さに肌が騒いだ。

「理論的には無尽蔵の兵力だ。人道なんて、戦争に持ち込むもんじやねえしな。クソくらえってんだろ。正気のまままで戦争は出来ねえからな。」

ん？」

ブラックコーヒーが、照明が落ちた暗い通路の先を見た。タイル張りの床を走る、硬い靴音が近付いてきた。人影が、立ち止まり、荒い息のまま、言った。

「先輩！」

ブラックコーヒーはベネディクトの体から刀を抜き、血ぶるいをして、構えた。

「偶然の再会……ってワケじゃねえよな。こんだけ広い施設の中で俺を探し当てたって事は、もうだいたい進行してる。お前が強化人間だっていう証拠だよ。秋田章」

砲火が横顔を照らして、章は片目を細めた。

「ブラックコーヒー。理由は問わないし、異論も聞かない。そこをどくんだ」

「俺にはお前の言葉さえ、聞く意味がない。ただ、このキリサキはもらっていく、それが今回の目的だ。それを邪魔するなら、殺すだけだ」

抜き身の刀を鞘に納め、腰に構える。柄に手をかけたまま、身を左に開いて、抜刀術の体勢。

章はナイフを握った左手で眼鏡の位置を直すと、拳銃を持った右手へと交差させるよう構えた。

「やっと見つけた僕の居場所だ。奪われてたまるもんか」

彼にとって、戦う理由はその一つ限りであり、外事四課を護りたい一心だった。ベネディクトが何かを伝えようと目論むが、猿轡を噛まされてそれも出来ない。章はそちらに眼をやったが、眼光は鋭い。

「すぐに終わります。だから、邪魔しないで」

ブラックコーヒーが、それに口を開いた。

「したくても出来ねえよ。腕と足の骨を折ったからな。顔を傷つけなかったのは、せめてもの情けだけだ」

力、と笑い、柄を強く握る。鯉口が切られた。雨の音が強くなる。右足で一つ踏み込むと、途端に、相手までの距離が縮まったかのように錯覚する程のそれは、しかし腰の位置を一センチたりとも上下させずに行う、体捌きの極、縮地と呼ばれるものである。しかし大股で踏み込むようなそれではなく、踏み込み足に軸足を引きつける速度が速い歩法だ。移動途中でもバランスを崩さない為、いつでも敵の動きに対応出来る。

対応出来る、とは即ち反撃が可能という事であり、それがつまりは 後の先を取る という結論に至る。摺り足に近い歩法である為、常に左右への方向転換を可能としている。

ベネディクトが敗れた理由 それは、来るのが解つていても避けられない抜刀術の性質にあった。近間の飛び道具とも比喩される抜刀術は、移動しながら放つようなものではない。座して待ち、相手の攻撃に反撃する、言わば受けの技術である。

しかし、流れる水の動きを見極められないような動作 これを實現した西村は、動きの始めとなる 起点 の隠蔽に重きを置いた。動き始めが解らなければ変化を捉えられず、つまりは対応のしようがない 流水の動きと言われるこれは、縮地の三步から四歩分は、相手の認識を遅らせる事を実現した。

見えているのに、視えない。だから、来るのが解つていても、避けられない。

人間が持つ認識力の弱さ。視覚に頼る弱点をついた、秘技とも言

える歩法、そして動作。それに裏打ちされた、抜き打ち。

秋田章は、少なからず実戦を経験していた為に、遅れながらも第一刃を後ろに下がる事で回避した。大きく仰け反り、体勢を崩す。章にすれば、一瞬で間を詰められたように錯覚している瞬間である。顔には驚きがあるのがその証拠になる。

そして、崩された体勢に襲い掛かるのが、左手の鞘 第二刃となる、刃ではないがそれに代わる、打撃。

回転力によって威力を増し、腰から下をどっしりと地につけているだけあって一切の無駄なく力を伝えられた鞘の一撃は、人間の骨を軽々と砕く威力を誇る。

事実、ベネディクトがやられたのはこれだ。どうにか一刀を避けても、隠された二つめの刃が襲う。彼女の体の右側を痛めつけた技である。

これを、章は右手を折りたたんで防御の形を取る事で、痛みに耐えつつ防ぐ事に成功した。良くて罅、悪くて骨折という痛み顔に顔を歪め、左手のナイフを頼りに体を密着させようとする。

近付けば刀は振れない。そして自分にはCQCがある。それは一見、正しい判断であったが、ブラックコーヒーは、更にその上をいく。

鞘を抜き放ち、ブラックコーヒーがもはや動きを納めるしかない状況において、それは章の理解の外の出来事だった。

隠されていたのは二つめではなく。相手が反撃に転じようとするその瞬間に襲い掛かる、第三刃があった。

切っ先鋭く。白刃が胸を貫いた。抜き身の刀。一回転して戻ってきた。そんな推測が頭を過ぎる。第二刃はこの為の布石。あれが視覚と意識を攫って、さらに与えられた痛みが、とうに過ぎた第一刃をこそ、綺麗さっぱり隠してしまうのだ、と。

攻撃する瞬間こそ、人間は隙を作る。それはどんな武道の達人でも克服出来ない、構造的な間隙。後の先を取る、とはこういう事である。

これを、秘剣・篠という。

第十七章 貫く意志

胸を貫かれ、それが致命傷だという事は、遠目からでもベネディクト・アルカデルトには解った。長く戦いの時間を過ごしてきた彼女にとつて、それはありふれた　　と言つてもいいぐらいには、良く見てきた光景だった。

秋田章が死んだ。心臓を破られ、大量の血を胸から噴き出して、倒れた。

ブラックコーヒーは血に濡れた刀を振るい、鞘に　　まだ、納めない。

しかし、彼女はその違和感に気付けない。敵を倒しても、まだ緊張を解かないブラックコーヒーの所作に意識を回す程、この時ばかりは冷静ではいらなかった。

「！」
猿轡をされ、腕もあがらない程痛めつけられた体を恨めしく思い、声にならない呻きをあげる。章はびっくり、ともしない。ブラックコーヒーが数歩、下がった。

「意外だな。冷血だつて話だつたけど。まあいいや、キリサキ、良く見とけ。これが、俺の話が本当だつていう証拠だ。Aナンバーズは製造に莫大なコストがかかる事もあつて、簡単には死なないうよう、加工と増強を施されている。そして　死んでも敵を倒す自動攻撃機能　を持っているのさ」

それが、システム・DD下ミネター・ドライブだと語った。

床にぶちまけられた大量の血液が、その流出を、止める。ブラックコーヒーは、章の指が、びっくりと動いたのを見逃さなかった。

章が体を起こす。その眼が蒼く光ると、ブラックコーヒーを見て、言った。

「 program・auto start」

咄嗟に後ろへ飛び退くと、直前まで彼がいた場所に、どこからか

現れた、青白い杭が突き立った。長大で、一メートルは優に超える。それが術式で造られたものだという推測は、あるにはあったが、彼に与えられた情報とは違っている事実^にただ戸惑う。

「抑制剤をうたれて術式は使えないんじゃないかよ」

穿たれた胸の傷が白い煙をあげて、塞がっていく様に見開く。章の眼に、意思のようなものはない。無表情、無感情、無機的に、敵を見る。

人形のようにだ、と。二人には、そう映った。

「castline Circuit stand by……A、ア、アクセス」

「チツ、話が違つぜ。再生因子^{リジエネレート・ファクター}じゃなくて回帰因子^{ロールバック・ファクター}だよ。対古代種用の調整か。何にしろ、計算が狂つたな」

ブラックコーヒーの言葉に、ベネディクトはこう思う。

（違う。あれは術式じゃない。あれに術式を使った反応や痕跡が見られない。私の術式^{グノーシス・ボジテイヴ}適性には何の反応もないのに、あれが、術式のようなものだ。という事だけは解る。あれは一体、何なの？）

ベネディクトを庇うようにして、ブラックコーヒーが立ち、対峙する章に言った。

「流石に四季刀でも第二術式^{セカンド}は、完全には潰せない。良くて干渉力を多少誤魔化せるくらいかね。今も、その頭ん中じゃそんな計算されてんだろ。確実に勝利する。その為だけに、そんな体に生まれついた、その人生を呪うんだな」

「D、データロード、カンリヨウ……完了。システム・Ddはメイ^{アイムドインフランク}ンストレンジで解凍。展開。起動」

「腕輪を持ってきて正解だった。術士じゃない俺でも、一時的にナンバーズと拮抗出来るからな」

それが、術式など使えなくとも、強力な術士集団であるAナンバーズに数えられている彼の特殊性を示す言葉である事を、ここでは誰も知らない。

「蒼の世界卵へのアクセス権限を確認……」

術式兵装・A A起動認証。システム媒体のコンディショニング

アドバンスド・アームズ

ク

章の口から、そのような単語が絶え間なく漏れ聞こえてくる。肉声にする事で術式として機能する、言霊と呼ばれるものだ。無論、体の内側でもそれに伴い様々な術的強化が行われている。この言霊は外面を補強し、己の攻撃の反動に耐える事、様々な外的要因から身を護る為の防御方法である。これにより、体の内外の強化とされる。

章の言霊は続く。内と外、二重の強化。表と裏が完全に分かれている思考によつて為される。これは先日A M Cと呼ばれる巨大な大砲を撃つた際、行われていた並列式演算法・分裂思考というものだ。今、章の意識は三つある。

一人の人間が、眼の前で 兵器 として変貌していく様を、ベネデイクトは驚愕と共に見た。一見、それは兵器のようには見えなくとも、術士である彼女の適性が、それがどのようなものであるかを直感的に訴えてくる。精神的に深い結びつきがあるグノーシスがそれを察知する。

章を見る。腰の高さに、左右対称に生える 生えるというよりは、発生した翼のようなものがある。それは接合していない節のようであり、青白く光る、縦型の長方形が一定の感覚を置いて宙に浮かぶ。一つ一つは板のようであり、片側八つ、合計十六、互い違いの高さで並ぶ。それが、章の意思によつて発射されるホーミング・ミサイルであると彼女は理解した。精神感知式誘導機能を持つている為、対象が生物である限り逃れられない性質を持つ。

次に眼を見た。蒼く光る瞳がある。彼女が知る限りでは、術士の中にもそういった現象が確認された事例があった。その原因は、体内の術式回路の暴走である。許容量を超えた霊子摂取量に体が耐えられない。その引き換えに、驚異的な威力の術式を使用可能とする、通称ブースト現象。

頭には、不可思議な環があった。神話に出てくるような、天使の

環そのものとも言える、形と位置には、彼女の理解は及ばなかった。ブラックコーヒーが、声を荒げる。

「本性を現しやがったな、化け物！ 予定変更だ、弱らせて捕まえるなんて真似は、テメエにはしてやらねえ。今すぐその首を掻っ切つてやる」

空気が重くなる感覚に、ブラックコーヒーは舌打ちをした。最も精神との結びつきが強い、受動器官である眼　蒼く光る章の眼が、暗闇にふらと尾を引く。

それを見て、嫌な汗が頬を伝った。鳥肌が立っている。妙に、喉が渴いていた。

オール・ガンズ・ブレイジング
「全砲一斉射撃」

章からの先手に、ブラックコーヒーは見事に反応した。というのも、発射されたホーミング・ミサイルは術式の力によって飛翔する為、初速からトップスピードなのである。眼にも止まらぬ速さ

音速の域にあるミサイルを、眼で捉えるよりも速く、腕輪をつけた右手を前に出して、対物障壁によって防ぐと、同時発射であった為の後続が着弾し、難なく障壁は破られ、ブラックコーヒーの肉体に命中。すぐさま術式による干渉が始まり、爆発でなく侵食という形で肉体構成を崩していく。じゅくじゅくと肉が溶けていくような感覚に顔を顰める。障壁は紙のように破られ、紙一重のところを身を捻り、避けたものもあつたが、ブラックコーヒーの左腕は、肘から先を紙屑のように引き千切られて消えた。肉と神経が焼かれ、骨は焦げ落ちる。尋常ではない痛み、叫びだしそうになる。脂汗が額に浮く。歯軋りが聞こえた。

後ろで小さな呻き。捕獲対象であるベネディクトに当たったか。もしくは近くに着弾したか。それを確かめている暇は、今はないと断じる。

歯を食い縛って痛みには耐えると　尋常ではない痛み、眼が充血した　彼は次弾を装填しようとしている章へ駆け寄った。幸いにも右手に持っていた刀　術式殺しによって、章を殺す手段を失っ

ていなかった為、彼はそれを横薙ぎに打ち込んだ。

下手な障壁や防御方法では防げない、達人の一太刀を、左手に持っていたコンバットナイフで受け止める。通常ならば賢明な判断ではないが、一瞬でも動きを止められれば、章の右手にある自動拳銃が、鉛弾を三発吐き出し、ブラックコーヒーの腹に撃ち込まれる。

正確に、急所を貫く。致命傷に間違いはない。しかし、彼はまだ死なず、鬼に似た形相でもって、章に詰め寄ると、言った。

「プログラム・DD！」ダスト・トゥ・ダスト

灰は灰に、塵は塵に、土人形は土に還れ！」ゴレム

肉声による言霊。それはAナンバースの声帯が発した音でこそ、意味がある。兵器には必ず安全装置があるように。これが停止命令となつて、章は動きを止め、ブラックコーヒーはようやく彼に止めを刺せる。

はずだった。

「対象をAナンバースと認識……：戦術レベル再設定。

ドミネーター・テストロイヤ
DDへの接続開始」

人類の中でも優占種とされる超能力者、ドミネーターを倒す為の、模倣優占種という設定目的が、章を行動停止させるには至らない原因だった。

AナンバースはAナンバースによってしか止められない。安全装置をかけられるのは、その原理により同じナンバースしかないからだ。

しかし、ここに至り、その根底は覆される。秋田章は、Aナンバースを倒す為の兵器である。アンチ・アームズ。頭文字をとって、AAとなるように。

ブラックコーヒーは、ようやく合点がいった。この弟は、ただのランクとしてAAを与えられたワケでなく、ただ最初からあの学院長が企んでいた、自分を殺す為の刺客だったのだと。

そんな簡単な事に、今更ながら、納得した。

「プログラム・DD！」ダスト・トゥ・ダスト

章の言葉に、ブラックコーヒーは苦笑した。

「俺オリジナルに安全装置はねえよ。浅はかだな、偽者の屑野郎」

二度、瞬きをして、躊躇いなく引き金を引いた。

ブラックコーヒーは、すんでのところで章の右手を蹴飛ばし撃たれる事を予測していた為に間に合った。あらぬ方向へ撃たれた銃弾を無視し、ナイフを上弾く。がら空きになる胴体へ体当たりを行うと、途中で対物障壁に阻まれるものの、対象固定型の為、そのまま章ごと押し倒す事が出来た。

馬乗りになり、いざ首元へ刀刃を走らせると、銃声の後、待て、という声がかかった。若い女性の声だ。威嚇射撃だろう。

「そのまま動かないで」

ベネディクトの声が、それに続く。

「終わりよ、ブラックコーヒー。さっきの話はなかなか面白かったけれど、パリジェンヌだからかしらね、いまいち笑いどころが掴めなかったわ。国土の違いはどうしようもないわよね」

ブラックコーヒーが首を逸らしてそちらを見ようとすると、眼前には、文字通り眼を光らせた敵がいる為、そもいかなかった。

「それにしても、日本は面白いわ。刀だけでここまでやるのがあるんだもの。」

そう思わない、アンドレア」

アンドレア・シルベストリは緑と白の縦縞模様が入った入院着で、ブラックコーヒーに自動拳銃を構えていた。膝立ちで、ベネディクトを左手で支え起こす。胸元に覗く、肩までの包帯がある。

「サムライって、もう絶滅した生き物じゃなかったの？」

「絶滅って……ニンジャじゃないんだから」

日本に対してあまり知識のない会話をして、二人が立ち上がる。

「三対一よ、少年君。そっちの倒れる少年君は、大丈夫？」

ブラックコーヒーの顔に嫌悪が浮かんだ。

「コイツを庇う気がよ、売女チル。さっきの話を、」
ベネディクトが身を乗り出した。

「お前には聞きたい事が沢山ある。A ナンバーズ、プロジェクト・アトラス、そしてシステム・D D……一体、学院の裏で何が起きているのか。アキラが、どうなっているのかも」

ブラックコーヒーは、鼻で嗤った。

「だったらコイツを先にどうにかしてくれ。俺がちよつとでも気を抜いたら殺す気だぜ。おかげで身動きがとれねえ。こんな状態で話もクソもない」

それにベネディクトは頷き。

「アキラ。私の言っている事が解るなら、戦うのを止めなさい」

視線さえ動かさない。硬直してはいるが、臨戦態勢。彼の意識容量にはいつでも発射できるよう、攻性術式がセットされているのは明白だった。

「停止命令も聞かない。恐らく、俺が死ぬまで止まら」

最後まで言い終わらないうちに、ガラスが割れる音がした。酷く尖った音が耳をつんざく。一瞬、その驚きによってブラックコーヒーの注意が逸れる。

しかし、兵器となっていたはずの章は動けなかった。

視線は窓の向こう、暗い空に赤く光り、回転している衝突防止灯がある。基地の中で最も高くそびえる、航空管制塔だ。

常人ならば、夜の中、管制塔がそこにあるという事が見えても、誰が撃ってきたかまでは見えない。真夜中に一キロ以上の暗闇を見通す事など出来ないが、今の章にそれは容易い。

「あ」

管制塔の上。衝突防止灯のすぐ脇に、フードを取ったアインがいる。それが解った。けれど彼女をアインと認識出来たのは、外事四課のシールド・コートを纏っていたからで、その顔がアズマリア・エインズワースと瓜二つだという事が、章を動けなくさせている原因。

彼女の口が動いた。何を言っているのかは解らない。

けれど、頭痛がして、意識がぼんやりした。

次に、ぶつん、と何かが途切れた。スイッチが切り替わったように、秋田章の意識が戻る。

「あ、れ……？」

天井から視点を動かす。ブラックコーヒーはもういなくなった。ベネディクトとアンドレアが警戒を滲ませて、少し離れたところにいる。

「先輩、僕は……」

信じられない出来事。信じたくないものに、眼を逸らす事は容易だったが、眼の前にいる人はそれを許さない。険しい表情に、まっすぐな金色の眼を見て、章はのろのろと立ち上がる。眼を逸らす事は、教わっていない。

現実を、直視する。

「大体、解りました。意識はありましたから。僕が、第二術式セカンドを使う為に造られた兵器だという事も。繋がっている間、色んな知識が頭に流れてきていましたし。ああいう状態になった副次効果なんでしょうかね」

「知識とは？」

細かく尋ねている時間は、今はない。今の章がどういう状態か、最低限把握しようと耳を傾けた。

「歴史には様々な兵器が存在しますが、稀に常軌を逸したものが存在します。二メートルを越す神剣だとか、二五〇ミリメートルを超える口径の大砲などです。それらは人間が人間に使えるものではありません。明らかに常識を逸脱しています。ではそれらは何故生まれたか。恐怖に駆られ、誇大妄想の末に発明されたのかというと、中にはそれもあつたようですが、その限りではありません。それらは、それを使うべき敵がいたからこそ生み出された。対人外兵器。その最終到達点が、僕達術式調整体なんです。僕はその九号。体に埋め込まれた異種細胞をこの腕輪によって活性化させ、ノーマルでもエクストラでも、ましてやネクストでもない何か

アナザー

という、人間と人外の間にいる生命」

ベネディクトは一步、後ずさる。章には、それが寂しかった。

「中途半端でどっちつかず。戦う力だけを持たされた人形。人でも人外でもない。蝙蝠みたいで、本物じゃない。本物にはなれない。

元から僕には」

居場所なんて、どこにもなかったんだ、と。

PDAが振動で着信を告げる。ベネディクトはポケットから取り出し、通話を始めた。

「はい……え？ ど、どうして貴方が！」

彼女はそれを口にする。

「シルマール、学院長」

予想外の相手に、ベネディクトは章を見る。章も、驚きに身を硬くしていた。そも、電波干渉や混線によって通話などそうそう繋がる状況ではない。違和感が強い。

「本来、学院から外部への通話は……いえ、滅相ありません。しかし、秋田君を？ 解りました。では失礼ですが彼に代わる前に聞かせていただきたい事があります。貴方は何の目的でAナンバーズを造ったのですか。そのような悪魔の所業、人に許されるものではありません。そしてプロジェクト・アトラス、システムDD。それらは制霊条約を著しく逸脱した行為です。場合によっては相応の処罰を受けなくてはならないかと」

彼は答えた。学院長の言葉がよく聞こえるよう、スピーカーから音声が出来るようにする。おかげで章のところまで届いた。穏やかな声。

『そこまで知っていましたか。やれやれ、耳が早いですね。まあしかし、それは何も難しい事はありません、人類の未来の為です』

耳ざわりの良い言葉。綺麗事で切り抜けようとしている。ベネディクトの口元に思わず嘲笑さえ漏れる。気に障ったようだった。

「ふざけないでください。人類の未来の為に、人の命を弄んでいい話がありません。それは偽善というものです。いや、偽善よりもっと酷い。傲慢とっていい」

『おや手厳しい。ですが方法を選んで戦争など出来ないでしょう。そうしなければ生き残れない。そういう世界に私達はいます。下手をすれば術式や人外が表沙汰に取り上げられる。そういったものがあるのだと世間が知れば、知ろうと知識の手を伸ばす。それによつて犠牲者が増える。その責任はどんな人間であつても取る事は出来ない。』

だから私は犠牲者が最低限に済むよう努力しています』

理想論ではなく現実論を取る、と言つた。誰もが助かるという夢物語でなく、小を切つて大を救う、という方法。確かに世間一般に言う 正義 とは多数決で決められた意見である為、この話が全くの間違いだ、と断じる事は出来なかつた。

「死者を甦らせる能力を持った、コード・SS、でしたか。それについては？」

『そこまで知られているとは。大方お喋りなあの子でしょうね。まだ生きていますか？ まあどうでもよいのですが。SS ブル
ー についてというのは、彼女の能力ですか。死人を甦らせるといふと大仰に聞こえますが、何、実際はただの 門 を開く力ですよ
「門というのは」

『勉強不足ですね、キリサキ。私は一から十まで丁寧に教えるつもりはありません。ですがその門を開く事によつて、この小さな島国を核保有国の脅威から守る事は出来ます。海の向こうの、一番近い国などからね。それだけは伝えておきましょう。誤解があるといけませんし』

牽制 もしくは抑止力となる兵力を保有する事で、国を守る。しかしそれは、仮想敵国とされた側からすれば、自分達を攻撃する為の態勢を整えている、というようにも取れる、明らかな敵対行爲だ。

戦争が起きる可能性が、限りなく高くなる。

『システムDDについては貴女に言つても解らない。章君に代わつて下さい。あまり時間もありません』

ベネディクトは、警戒を解いて無造作に近付いた。章へPDAを手渡す。現行の携帯電話より一回りほど大きいそれを、両手で受け取った。

「貴方が聞きたい事を、聞きなさい」

その言葉に頷き、PDAへと語りかけた。

「代わりました。学院長」

『ああ、久しぶりですね。調子はどうですか、章君』

「学院長がそれを聞くのですか？」

『言うようになつたものです』

この体に、強制的に死なない機能を植えつけた張本人が聞く事ではない、と思つた。調子はどう、もないものだ。

「聞きたい事は多くあります。しかし今、それら全てを尋ねている時間はありません。戦場の真つ只中ですからね。だから、細かい事は帰つてからにします。」

今は、最も大切な事を聞きます」

一つ、息を吸つて、吐いた。

自分がAナンバーズであるという事実は、先日の戦いも、先ほどの出来事もあり、既に自覚した。だから、それは本当か、という愚問は捨て置く。

「どうして僕を、外事四課へ送つたのですか」

それは事の一歩最初。始まりの疑問。もう実習では済まされないものだ。この真意を、章はいつも測りかねていた。

しかし、最も悪い形で、その返答は返ってくる。

『人外との接触、魔導器との接触、信頼出来る仲間との接触。そして、戦争との接触。全ては君を計る為のテストです。その為の監視役 もいます。実習というのは本当ですよ。君の兵器としての側面を強くする、というね』

理解するまでに、数秒。真偽を疑うまでもない。この状況で嘘を言う人間ではない事を章は知っている。そうして、裏切られた、という気持ち湧いた。しかしその中でも、特に嫌な言葉を聴いた。

だから嫌な予感がする。けれど、そういったものから眼を背ける事を、章は外事四課の中にいて、誰にも教わってこなかった。

「貴方は今、戦争との接触と言った。それは、つまり、僕のテストの為に、」

『ミハエルを向けたのは私です。ただ、まあ、彰人君がいたのは計算外でしたけれど。この時点での想定になかったAナンバーズ同士の戦闘データ、本当はもっと後のはずでしたから、これは貴重でしたよ。しかもあの魔導器、驟雨は術式を全て断ち斬る。君でさえ、それには適わない』

「……………」

『ミハエルに回収を命じましょう』

「それは彰人を殺すという事ですか」

『察しが良い』

「何故、そんなに軽く、人の命を切り捨てられるのですか」

『言ったでしょう。人類の未来の為に。その為には人一人、安いものです。それとも、君は私に博愛主義で理想ばかり語る愚者になれと言うのですか？ 利用されて捨てられる側になれと』

「違います。もっと別の方法があるでしょう、という話です。貴方は結論を急ぎ過ぎている気がする。言ってしまうえば極端だ。そもそも、その理屈は破綻している。人を守る為に人を殺すというのは、矛盾しています」

『それでもありません。突き詰めて考えれば当然です。彼は絶対に私に報復を企てる。後々、組織を利用して学院を潰しに来るかも知れない。そういった不穏分子は今すぐにも排除しておくべきです。平和を維持するにはこうした防衛策も時として必要となります。君のそうした青臭い論は、聞こえは良い。しかし、その実、何の力も持ちはしないという事を知るべきだ。君は、まだ考えが幼い』

「くっ……………」

事実を指摘され、返す言葉がなくなった。畳み掛けるように語る、学院長。

『でも。君がああ驟雨を回収するというのであれば話は別です。彰人君の身柄もそちらで回収してもらって構いません。あの魔導器を持ち帰ってきてもらおう事と君のテスト以外に、私の目的はありませんのでね』

利用する気だ　と直感した。含みのある笑い。自分はこれに従うしかない。考えれば、彰人　ブラックコーヒーにはまだ聞きたい事がある。この学院長が裏で何をやっているか、彼ならば深く知っているはずだ、と。

更には自分で九体目というナンバーズ。他の兄弟はどこで何をしているのか。そして、あの刀をどこで手に入れたのか　それは決して外事四課にとって不利益にはならない上、自分自身が何者であるかも結果的に知る事が出来る。敵であった人物を助ける、という奇妙な状況に、気持ちはまだ追い付いていないというのはあったが、続く言葉に、それ以外に道はない事を思い知らされる。

『重ねて言うのであれば。君がこのまま動かない場合、ミハエルの軍勢はその基地を壊滅させるでしょうね。しかし私には、それを止める用意がある』

「僕を、脅す気ですか」

章の言葉に、学院長は　面白そうに笑った。

『いいえ。ただ、君は自分の立場をもっと知るべきだと思ってね。』

やっと見つけた　居場所　なのでしょう？　落ちこぼれで何の取り得もなかった、自分を屑とまで吐き捨てた君の』

何故、と口に出そうとして。

『emeth^{エメス}　真理に到達するには、君はまだ幼い。彼に勝つには、君はまだ弱い。しかし、システムD.Dを駆使すれば、君の前に敵はない』

エメスという、その言葉が、耳に届いた。心臓が一つ、強く打って、体が硬直する。

『行きなさい、私の最高傑作。殻を破って外に出なさい。君の目覚めは、やっと今』

通信は、それで切れた。章は俯いて、だらりと手を下げる。

「……………」

ベネディクトが問い掛ける。

「学院長は何て？」

章は彼女にPDAを渡すと、答えた。

「彰人を、ブラックコーヒーの持っている十六夜驟雨を回収しろ、と。それが為されない場合、この基地はミハエル・グッドマンの攻撃によって壊滅するようです」

「どういふ事、と続けるベネディクト。章は顔を上げて、まっすぐ眼を見る。」

「裏で糸を引いていたのは、学院長です。全て、僕の性能をテストする為に、仕組まれていた、と」

拳を作り、歯を食い縛る。ぶたれても文句は言えない、と内心呟いた。アンドレアが言う。

「じゃあ、え、まさか。あの輸送任務も、あの夜の襲撃も、武田が死んだ事も、今回のこれも。全部、君を」

ベネディクトが遮る。

「アンドレア、落ち着きなさい」

「でも、だって！ それじゃあ、全部、君のせいって事じゃない！ 返す言葉がなかった。言葉が胸に刺さる。学院長が自分を実験するという目的が解つても、それを自分が望んだワケじゃない、と言いつつ、口に出す事はなかった。」

（全部、僕のせい……僕がいたから。皆が傷ついた）

自責の念が湧く。また、俯いた。

（僕は、僕が、全て、悪い）

かつん、と硬い靴音。鋭い、ベネディクトの声。

「顔を上げなさい」

びくり、と肩が震えたが、言われた通りにする。きつい眼がある。金色の髪が、さらりと揺れた。

「自分を責めるのは、全部終わってからにしなさい。これが全て、

君の為に起こった事だとするならば、君にはこれを終わらせる義務がある。でもまあ正直、今の通信だって変声機を通した敵の妨害工作かも知れないんだけど。しかし、考えれば考える程、辻褄が合うのも困ったところよね　ともかく、君がそうして俯いている限り、死んだ人間は無駄死にした事になる。私達は、君にそんな事を教えただのかしら」

首を、振る。否という意思表示。

「なら、行動しなさい。結果は後から付いてくる」
是である。

「そして、結果で帳尻を合わせるのが、プロフェッショナルの仕事よ」

ベネディクトは再び、PDAを渡した。章は一度強く頷き、それを受け取ると踵を返して走っていく。ブラックコーヒーの位置は、章と同じ腕輪をしているからか、ぼんやり把握出来た。その応用で、戦場全体の地図を頭に作り　予め独房の中で覚えておいた　誰がどのような術式を、どのように使っているかを、これもぼんやりと察知する。システム・DDとは即ち、術式に関するあらゆる情報を内包した倉庫だ。アーカイブ同種存在を検知するのは容易い。章はPDAを開き、通信をかけた。

「こちらAA。指揮官、応答してください」

混線の為か、雑音混じりの返答が返ってくる。繋がったのは奇蹟に近いが、いつ切れるとも知れない。抑揚の少ない、冷たい男の声
デウドネだ。

『手短にしる』

「キサラさんが孤立しかけています。南側の建物より南西に二五メートルの地点。そちらへ救援を送って下さい」

『何？ お前、どうしてそんな事を』

「僕には貴方に指示を出す権限が　戦闘下において、ダブルナンバーは外事四課を動かすことが出来る規則があるはずです。どこかの誰かが、今は未熟だという理由でその権利を封じていましたが、

しかし、僕はそれを行使するのは、今だと思つのです。

先に、僕には今、この地域で行われている戦闘行為がほぼ把握出来る事をお伝えしておきます」

これに、通信の相手であるデュドネは息を飲んだ。章は走りながらの為、息を切らしながら続けた。

「彼我戦力差は圧倒的であり、このままでは僕達は全滅します。しかし抜け道がある。新垣彰人の持っている魔導器を回収すれば、ある人物の働きにより、この攻撃を中止させる事が出来るようになります」

『それは、本当か。しかし信憑性に欠ける』

藁にも縊る、とはこの事だと思ひ、ベネディクトの言った言葉、変声機を使った敵の妨害である、という事を思い出す。章にはあれが他人であつたとは思えない。当人であると、章は自分の感覚を信じた。

でなければ、章の事を深く知っていなければ、屑という言葉は出てこない。

「滑走路とフェンスを挟んで向かいの、陸軍工廠に生き残つた人たちを集めて、撤退の準備をして下さい。書類上、そこには装甲車が数台あるはずです。ウエンスズデイ機関と協力関係にある自衛隊基地ですから ストライカーが」

『どついう事だ、逃げ道なんてないだろう』

「ここから北側に行く、海のすぐ傍を通る湾岸道路があります、そこを指して基地外周より二キロメートル以上離れて下さい。根拠を話します。計測した結果、あのハーモニカの有効射程圏はおおよそ半径二キロまでであり、それ以上の距離になると人外を操る靈子風の操作がおぼつかない。よつて、圏外に出せばあの脅威はなくなります」

『しかし、こつ困まれているは』

「僕がアームズによつて突破口を開きます。どれだけの軍勢に阻まれていても、必ず開きます」

『それだけで部隊を動かす事は』

「ミハエル・グッドマンはこの特性により、敵性対象のかなり近くまで接近しなくてはなりません。必ず軍勢と一緒に現れている事からもそれは解ります。そして、ハーモニカを演奏する場合、精神と霊子の化合により、相当な集中状態でなければいけない。ある程度までは持っているだけでもいいようですが、詳細なコントロールまでは不可能。」

よって。僕の攻撃による妨害があれば、僅かながら、そう、生き残った皆が車に乗るまでの時間を稼ぐくらいは、出来るはずです」
『おい、A A。お前、自分がどれだけ無茶を言ってるか解っているのか。不確定要素が多過ぎる、いや、まさかお前、敵の位置まで解るっていいのか？』

「何となくですけどね。まだ望みはある。それを行うだけの実績も根拠もある。」

そして力も

口に出すにはまだ躊躇いがあったが、全ては積み重ねた結果だ。章が今まで身につけてきた力は、決して薄っぺらいものではないと信じる。でなければ、嘘になる。

「あの時。貴方は僕を英雄と言った。その貴方が、今、僕を疑うか？」

章にしては、やけに自信に溢れた物言いに、デュドネは戸惑った。しかも返す言葉がもうない。否、今や彼は戦時特例下によりデュドネの上官である。

デュドネは不思議と悔しくは無かった。成長した子供が自分を守ってくれるような、不思議な心持ちに、不快感は抱けなかった。ただ、後で苦言の一つも呈してやろう、と思った。

『了解した。生き残った者を集めて、目的地へ向かう。後で覚えておけよ』

デュドネの返答に戸惑いを隠せないまま、通信は切られた。

PDAを仕舞うと、先に拾いなおしておいたナイフを握り、自動

拳銃の残弾を確認する。腰のポーチには予備弾倉が二個納められている。拳銃内の空に近い弾倉を捨て、予備弾倉を取り出し、差し込む。残り、一。グリップが、汗で少し滑る感じがした。平常心を心がける。

通路の窓を開けて、雨の中、外の駐車場に降り立つ。数匹いたレギオンを正確に射ち、その際、あの橋上戦闘でブラックコーヒーの動きを止めた、精神への直接攻撃を組み込んだ術式により排除すると、停めてあった4ドアのセダンに乗り込む。運転方法は、嫌という程教えられた。

クラッチを踏み、差し込んであったキーを回す。基地なのに無用心だな、という感想は頭の隅に置いた。スターターが回り、エンジンが始動。サイドブレーキを降ろし、ギアを入れて発進すると、白い国産車はタイヤを鳴らして旋回、ワイパーを動かして、ラヴ・レターがいる場所　キサラとは反対方向の場所へ向かった。

ベネディクトよろしく、運転しながらの射撃は精確で、彼の進行を阻むものはいなかった。辿り着くまでに、弾倉がまた一つ、空になった。窓から顔を出すと、雨粒が痛い。

ラヴ・レターは兵舎を背後に、基地の兵士数人と共同戦線を張っている。走ってくる車から放たれる術式に、あれは攻撃しないで、と周囲に言った。

車を止め、現れた章にラヴ・レターと兵士達は驚いた。

「どうしてここに、A A。アナタ、独房に入れられてたんじゃありませんの？」

「初めまして。君とは初対面だけど、落ち着いて聞いて欲しい。ここには怪我人もいるみたいだし、この車に乗せて、西の工場に向かって欲しいんだ。そこでデュドネ指揮官から説明があるだろうからラヴ・レターが尋ねる。」

「撤退命令ですか？　電波障害で無線もPDAも繋がりませんの、助かりましたわ」

彼女の背後では、机や椅子を使った簡易バリケードを盾に、銃火

が瞬いている。

「早く行くんだ。彼が来る」

その向こうを見ながら、ラヴ・レターへ告げる。雨が、強くなる。ざあざあという音に銃声が絶え間なく混じる。

「あ、アナタはどうしますの？」

兵士達が怪我人を運び、トランクを開けてそこへ三人が座る形で、明らかに定員オーバーだったが、走り出そうと声をかけてきた。

早く、というそれに、ラヴ・レターは何度も振り返りながら、またそれに、僕は大丈夫と返しながら、やがて来る人物を待つ。

否、視界に入る前から章にはもう見えている。兵士達が取り付けたのであろう、急ごしらえのライトが兵舎の窓から、章のいる中庭を照らしている。

視界はとうに暗がりばかりで、何も見えない。けれど、彼には敵が視えている。

先に装填しておいた予備弾層は、残り七発。インストール方式による術式射撃も加えると、一度に撃てる装填数は十三発。

それらを用いて、暗がりの向こうにいる人物へ、照準を合わせる。対象までの距離、およそ二〇〇メートル。拳銃の有効射程は五〇だが、術式使用によりこの数字は覆る。

（公式変換）

一瞬のうちに六度の術式起動、及び現在の状況に合わせた調整をして、真っ直ぐ伸ばした右手の肘下に左手を交差させた、CQCの構えで射撃を行う。人外の奇襲を考慮している。

初めは三射。全て防がれる。

（シールド・コートによる術式の干渉妨害効果確認。霊子風操作の効果は今だ検知出来ず　様子見か。なら、でかいのを）

すぐさま左膝を地面につけ、左手にナイフを持ったまま、グリッ
プと挟む形で拳銃を両手で握る。
ヘネットレター

（貫徹弾、用意）

これは以前、アンドレアの銃器知識によって得たアイデアを独

房にいる間、昇華させたものだ。術式による射撃の貫通力を向上させたもので、根元は七・六二ミリメートルタンクステンカーバイト芯徹甲弾にヒントを得たもの。スナイパーライフルの精度、対戦車ライフルの破壊力、そしてアサルトライフルの連射力を兼ね備えた、ペネトレート・ライフルをその大元とする。

初めての实战投入に、やはり不安要素は多い。

(リコイルカウンター、設置完了。バインダー・シールド対物障壁による弾道隔離開始、目標、照準固定)

現実に作用する干渉力は想定内か、弾道は何メートルまで安定するか、自然消滅プログラムは正常に作動するか、集弾率、雨による弾頭への影響、霊子風が弾道へ干渉するか否か、ハーモニカへの接近が予測不能の事態を引き起こさないか、そして、命中時は人体を必要以上に傷つけないか 様々な、不確定要素。

しかし、それでも、対術士用攻性術式として、これを用いる事に躊躇いは無い。

銃は扱う者によって善にも悪にもなる 傷つけずに戦うなど、元から不可能なのだ。だから、敵への被害も最小限で済むよう、弾が体に残らないよう、不必要な術式干渉が起きないように、体を通り抜ける、貫通弾を撃つ。

狙うのは四肢だが、特に足が望ましい。機動力を失えば逃げられず、戦意に影響する。戦意を失えば武装解除を促し、投降する。これにより、辛うじて人命を奪わずに戦闘を収束させる方法となる。

術式を溜めている間、その人物は右に動き、物陰に隠れた。しかし、それは想定内。

「地形情報の取得と、周辺マップに攻性術式を接続して、物理法則に縛られない拳動を」

左手を離し、地面につける。隠れた人物が、コンクリートの壁を背に、こちらを伺っている様子が、頭に伝わってくる。

「負荷が大きい、一度限りか、でも、十分」

対物障壁形成によって弾道のルートを強制的に捻じ曲げる

アキ 鋭

角軌道射撃。術式の銃弾は推進力が火薬の爆発ではない故に理論上可能とされるが、これを実行するには高性能コンピュータ並の思考速度を必要とする。

脳内地図と同期した変則軌道射撃は、先の貫徹弾によって行われる。ベネデイクトラが得意とする術式射撃　流星のように尾を引くものの、およそ三倍の威力を誇る。

これを更に、対象の足のみを狙い、正確に狙撃する　無論、対象はリアルタイムで動く。足など、それこそ幾らでも動かすだろう。それを、予め想定したもの　予測ではなく実測によって対応。射撃後も銃弾を制御下に置き続け、繊細なコントロールを行わなければならぬ。

でなければ、必中というものは有り得ない。アンドレアの教えにはこうある。

『狙撃は一撃必中。ワンショット・ワンキルが鉄則。撃つならば、確実に、狙った場所へ当てなさい』

息を吸って、吐く。最後まで吐き出して、止める。

暗夜に霜の降る如く。章は引き金を静かに引いた。

第十八章 雨があがった後に

昨今では術式の使用について、一定階級以上の人物が許可を下さなければならぬ制度に疑問の声もあり、資格さえあればいつでも術式を行使出来るライセンス制度の導入が検討されている。

というのも、何も必ずナイフや銃を使うワケでないのが術式である。

攻撃に使用される事もあれば、人助けを主とする為に治療用として発展した術式もある。その形態は様々だ。どのような術式を使うかは人によって千差万別で、術式適性がなければ使う事が出来ないのは先の通りだ。それを第三者がいちいち管理するのは難しく、ミスも多い。それへの打開策である。

術式の背景には、心の在り様によって決まるという一つの学説精神の主題構造^{モチーフ}、言い換えるなら深層心理^{イテ}が強く影響するというのが最も有力視されている。

術式運用に必要とされる心象風景により、その者の得手不得手が判明する。

つまるところ、シルマール学院長は、遺伝子工学に携わり、受精卵の状態において、望まれた外見的特徴や知力、体力を有して産まれてくる デザインベビーを造り、人為的に術士としての機能、将来性に優れた情操教育、外科手術による肉体強化、そして睡眠学習を実行し、経過を学院という檻の中で観察する事で術式調整体を育て上げたのである。そうして管理教育や目的に沿う思考誘導を行っていたのだ。

それがAナンバーズであり、また、秋田章に秘められた力の根拠である。

* * *

雨の夜を駆け抜ける弾丸は、白い光を纏って飛ぶ。直進するだけと思いきや、途中、垂直に近い角度で曲がる。何度も。そしてまた目標へ向かい直る。やがて対象の隠れる建物まで来ると、水平に折れ、その人物の指定部位を精確に貫いて、霧のように消えた。

ビリヤードの球が盤上を跳ね回るより複雑な軌道に、その人物は度肝を抜かれた。

「グツ……隠れても意味ないのかよ、曲がる弾丸なんて、聞いた事がねえ」

痛みを堪えて、ぎり、と歯軋りすると、足を引き摺るようにして距離を取ろうとしたが、今の銃撃はそれさえも意味を失う。逃げる事の出来ない状況だと理解し、観念したように座り込んだ。何かを考え込む。

やがて章が、濡れた芝生を踏み締めて、姿を見せた。照明に照らし出され、少し眼を細める。

肌に靈子風を感じた。ミハエル・グッドマンが近いのだ。

「ブラックコーヒー……彰人。その刀を渡すんだ」

「ハッ。左腕を奪っておいて、今度は右腕も差し出せってか？ 冗談じゃないね」

「腕とは言ってない。刀を渡せば済むんだ。君だって、もう戦いたくないだろ。その体ではもう戦えない。そして、その魔導器を渡してもらえば、少なくとも君と争う理由はなくなる」

ブラックコーヒーの顔に嘲笑が浮かんだ。斜に構え、章を嘲る。

「剣士に剣を渡せつてのは、腕を、命を渡せつてのと同義だ。それも解らず言ってるんなら御目出度い。やっぱ心臓じゃなく頭を狙うべきだったな。そのスカスカの頭をよ」

「僕を憎むのは構わない。けれど、その刀は渡してもらおうよ。もうこんな事は、これで終わりだ」

途端、抜き身の刀が章の顔へと突き出された。それを右へ動いて避けると、数歩下がって距離を置く。立ち上がるブラックコーヒーは、しかし、満身創痍だ。

「欲しいんなら実力で奪えよ、この世は弱肉強食だ、ねだれば手に入るなんて、そんな甘い事考えてねえよな。勝利は、力で勝ち取るものだ」

説得は難しいと感じて、戦いの気配に身構える。

「君がそれを望むのなら」

「驟雨が欲しいと、望んだのはお前だろ。誤魔化すなよ」

眼鏡の位置を直して、章は覚悟を決めた。ブラックコーヒーが戦うつもりであることを察したのだ。

「僕はあくまで平和的解決を望んでいる」

「刀を奪ったら用済みだから殺すんだろ」

「違う、殺さない。君には聞きたい事がある」

「俺を利用するんだな」

「それは……否定はし切れないけれど、でも、身の安全は保証する」

「敵を信用する程、落ちぶれちゃいけない」

「僕らは兄弟じゃないか。僕を信じてくれ」

「黙れよ、屑。兄弟だと。そのせいであの狸に利用されてるって、まだ解らねえのか」

「解ってる。けれど、それでも、僕らの意思まであの人に操られるワケじゃない。僕らは解り合えるはずだ。まだ、諦めるには早すぎる」

「人形が」

ブラックコーヒーの顔に怒りが滲む。

「解った、しかし条件がある。お前の首を、俺に差し出せ」

その言葉に身を強張らせる。明らかに対等の条件ではない。お前を殺す代わりに刀をやる。彼はそう言っている。

「お前は危険だ。この先、必ず世界に波紋を落とす」

「いいや、首はやれない。僕の役割が全う出来なくなる。この事態を終わらせて、僕は責任を取らなくちゃいけない。これは僕のせいで起きた事件だ、だから、どんな罰も受けるつもりだ。僕は、それを償うまでは死ねない」

「ハッ、それなら取引は決裂だ、所詮お前の意思なんてその程度。何やかや言っても、義の為に死ねない。幼い理屈をこねるただの子供。残念だよ、兄弟」

「そうか……解ってもらえなくて本当に、残念だよ。彰人」

構えるブラックコーヒーに、章は銃口を向けた。

「例え手負いでも、手加減はしない。仲間を助ける為なんだ、悪く思わないでくれよ」

「青臭い口上はいらん。そんなみつともない言いワケなぞききたくねえ。殺すつもりで来いよ、どうせどれだけ飾ったところで、本質はそれなんだからよ」

雨が弱まる。雨雲が少しだけ晴れて、月光が辺りを照らししていく。湿気を含んだ空気は冷たく、周囲に満ちていた。肺に吸い込むと、それがよく解った。

章はCCCの構えを取りつつ、しかし、術式は練らずに臨戦態勢を維持する。ブラックコーヒーがそれをいぶかしんだ。

先程のように術式を使われれば分が悪い事を知っているからだろう、その疑問は当然だった。

「何故、術式を使わない？」

彼は律儀に答えた。それは彼の律儀な性格故か、それとも満身創痍である相手への配慮か。

「使わないワケじゃないよ。使う時を選んでるだけ。その理由は二つだ。一つめは、さっきの射撃でオーバーフロウが近い事。そして二つめが、術式とは乱発するのが優秀さでなく、然るべき時、然るべき方法で行使されるのが最も効率的だからだ。その為に、出来る限り意識容量を空けている」

「舐められたもんだな。温存して勝とうとは」

「そうじゃない。術式に頼ると過信を生む。過信は油断を生み、油断と慢心は敗北に繋がる。君相手に誤魔化しは通じない。だから、確実に、ほぼ零秒で術式を実行出来る方法を取る。それが尤も確実であると、僕は考える」

「何……おいおい、無茶苦茶言ってるぜ」

「僕はこれを、インストールと名付けた」

じりと距離を詰める。銃口は外さず、視線も逸らさない。刀の間に合いに入っても、ブラックコーヒーは仕掛けてこない。片腕というそのハンデを考慮しているのだろう、ワンミスで懐に潜り込まれる危険性が高い。そして彼の術式は物質加速だ。しかしその加速も、体を掴まれてしまったら意味がなくなる。彼が警戒しているのは章の構えから察する事の出来るCQCだ。それは近接格闘術であり、掴む事でその真髄を発揮する性質を持つ。片腕でそれに対抗するのは難しいと踏んだのだ。刀は常に警戒されている為、迂闊に振れない。しかし、近付かれるのは何もデメリットばかりではない。

ブラックコーヒーには左腕を肘から失った痛みもある。彼の体は、あの後も幾度か戦闘を経たのだろう、出血や細かな傷が相当数見受けられる。やりあつたのは、章が逃がした兵士達であるのは想像に難くない。

章は左腕に添えていた右手を一息に伸ばして、拳銃を握ったまま、ブラックコーヒーの顔面を銃床で殴りつけようと、左側から薙ぎつけたが、ブラックコーヒーも反応して右手でそれを防ぐ。

ブラックコーヒー側からは死角になつた事を利用し、章は一步距離を詰めると左拳で彼の脇腹を殴りつけた。

彼の肺から空気が吐き出される。膝蹴りを腹部目掛けて放つと、同じ事を考えていたのか、脚同士がぶつかり合い、結果として防がれた。章は逆手に持つ左のナイフの背にある鋸刃を^{セレーション}ブラックコーヒーの右腕に添えると、一気に引いた。

ともすれば衣類ごと皮膚を剥ぎつつ、相手を地面に引き倒す手法である。これに自ら倒れる流れで、地面に倒れながらもブラックコーヒーは被害を最小限に抑えた。横倒しになつた形のまま脚を跳ね上げ、章の頭を蹴りつけると、眼鏡を弾き飛ばされる。その割れた破片で左眼の上を傷付けられ、流れ込んだ血が眼に入る事で、瞼を閉じる事になつた。

「グツ……くそ」

血を止めなければ眼を閉じたまま戦わなければならない。しかし生憎の雨に止血栓を形成する血液はどんどん流されていき、止まる気配はない。

「運が悪いな、兄弟。まあ、こつちとしては狙った甲斐がある」
「続けよう」

右手を真っ直ぐ伸ばし、手首の下に左手首を添える形で固定して発砲する。ブラックコーヒーは常に銃口の向きを注意している為、発射される直前に射線から外れ 片目だった為に遠近感が狂っていたのもある 章が反動を抑えて再び照準を合わせるまでに接近する事が出来た。

章は齒軋りした。両手で撃つのと片手とでは反動の大きさがかなり違う。元々・45ACP弾という大口径の弾丸は、大の大人でも手の中で何かが爆発した感覚を覚える程、反動が強いのだ。すぐにまた静かな鉄塊に戻るとはいえ、その爆発した瞬間は到底彼に抑えきれぬものではない。スライドが後退し排莖すると、銃身は刀によって真つ二つに断たれてしまった。距離が詰まる。銃を捨てる。ブラックコーヒーは刀を翻し、章の首を水平に狙う。ナイフでそれを防ぐと、顔のすぐ横で火花が散った。

「っ！」

刀身を滑らせ、更に距離を潰すと、ブラックコーヒーは再び膝蹴りを放ち、それは章の腹部にめり込んだ。唾液と共に呻きを吐き出す。くの字に折れた体を見て、ブラックコーヒーは膝と肘の間に章の頭部を挟みこむ形で、叩き込む。

章は脳を揺さぶられながらも、右手を伸ばして彼を掴むと、そのまま押し倒した。ナイフを首元に伸ばそうとするも、拳打を脇下に二度ほど打ち込まれて悶絶し、体勢を崩した隙に状況は覆された。抜け出たブラックコーヒーは刀を振り上げるが、章のナイフがそれを受け止め、またも火花を散らし、焼けた鉄の臭いを辺りに放った。二度、三度と繰り返される。一度、距離を取った。

互いに息が荒い。ブラックコーヒーの失われた左腕からは出血がとめどなく流れて地面を濡らしている。ベルトを止血用具代わりに使っているが、長くは持たないだろう。

片腕がない状態で五分か、と章は戦力差を見積もった。もし相手が万全であつたなら、彼はとうに負けていただろう。

額から鼻筋を、雨粒か汗かが、垂れていく。体温の低下はない、と自己分析した。

焦りからか、ブラックコーヒーが仕掛けた。刀の軌道を見切るのは難しいが、相手が狙ってくるのは急所ばかりなので、腰を落とし、姿勢を低く保てばある程度絞る事が出来る。

予め、その程度の対策は立てておいたのはこうなる事をどこかで予感していたからかも知れない。

(勝負を焦っている。僕を殺す事にしか意識がいつていない。勝機を見いだすのなら、そこにしかない)

自分を信じ、軌跡を読む。斜め上からの袈裟切りと見た章は、一歩、踏み込んだ。

刃物同士がぶつかりあう。何故こうも防がれる、とブラックコーヒーは歯を食いしばった。失血による焦りからか、彼は冷静さを失っていた。それを表情から読み取った章は、右手の手刀で刀を、上から叩き落そうとするものの、見事に反応したブラックコーヒーによって巻き上げるようにナイフを飛ばされた。手刀は空振りしつつも、返す手で相手の腕を掴み、間接を捻りあげる形で取り落とさせる事に成功した。

章は、流石の技量、と内心感服してしまった。ただでは転ばない男である。ブラックコーヒーは後ろ手に固められた右腕の痛みを無視し、脚を後ろに曲げ、章のそれへと絡ませると、横倒しになるよう体勢を崩した。

「ぐああっ！」

「ごきん、という音がしたのは彼の右肩からだ。間接が外れたのだろう。予想外の動きに章はまんまとしてやられ、ブラックコーヒー

は立ち直った。

「はあ、はあ……流石だね、彰人」

彼はそれを無視し、だらりとぶら下がった右腕の位置を、地面を使って調整し、思い切りぶつける事で、治療した。

「まだ、やれる」

「そうか。君は戦士なんだね。僕のような偽者でなく、本物の」

敬意を込めて、そう言った。

「違う。俺だって、偽者だ」

返す言葉は苦しみと共に吐き出された。そして、章へと走り出す。言葉の意味するところは解らなかったが、これが最後だという予感があった。

ブラックコーヒーの拳を左手で受け止め、右を返すと相手は屈んで避け、左足のミドルキックを脇腹に受けてたたらを踏む。章が左拳を打ち込むと膝で防がれ、顔面に拳が打ち込まれた。すぐさま反撃の右をブラックコーヒーの鳩尾に放つと、相手はくずおれそうになるものの、踏みとどまり、右フック、返しの裏拳、ヘッドバッドと連携してくる。

打ち上げる拳、アッパーを防ぐと、章の肘打ちから裏拳で顎を弾き、打ち下ろすパンチによって、ブラックコーヒーはついに膝をついた。

終わった、という確信があった。彼はそのまま倒れこみ、雨の中、敗北を認めた。

「クソ、てめえに負けるなんて、最悪だぜ」

「も、もう立つなよ、僕は限界だ、左腕がなくてこれって、どこまで差があるんだよ」

ブラックコーヒーは、おかしそうに笑った。出血が多いからだろう、声に力がない。

「撤回するぜ。運が良かったな、兄弟。俺がこんな状態じゃなければ、お前に負けるなんてのは万が一にも有り得なかった。さあ、さっさと殺せ」

「だから、君はもう少し人の話を聞けよ。殺すつもりなんてないし、君を死なせるつもりもないんだよ」

章はコートのポケットから携帯情報端末を取り出し、助けを呼んだ。

「秋田です、重傷者が一名。至急救助をお願いします。現在地は

」

下手にそれを遮る事もせず、ブラックコーヒーは章を見る。通話が終わった頃に声をかけた。

「兄弟。どうして術式を使わなかった？」

「そんなの、使う暇なかったからに決まってるだろ」

「違う、それは後付けの理由だ。発砲の時とか、狙える部分は幾らかあったはずなのに、お前は積極的に使わなかった。何故だ？俺の左腕に罪悪感でも覚えたのか」

それは侮辱でさえある、と。

「それこそ違う。君はオーバーフローを経験した事はあるかい、あれは一度なってしまうたらおおよそ一日は動けない。戦闘中にそうなったらもう取り返しがつかないんだ。限界に近付くだけでも嘔吐感や倦怠感、発熱や呼吸不全なんかも起こす場合がある。人によっては血圧の低下という例さえあるんだ。戦える状態なんじゃ、間違いないくない」

ブラックコーヒーは、静かに聴く。

「僕は今、その限界近くにいる。システム起動と先の鋭角軌道射撃、この二つによつて意識容量はいっぱいいっぱいなんだ、それなのにこれ以上、使える訳ないだろ」

「じゃあ、使わなかったんじゃないかって、使えなかったのか」

「そう。つまりハツタリ。人に教えてもらった、駆け引きの一種だよ」

うまくいったら？ と。

眼鏡の位置を直そうとして、眼鏡がない事に気が付いた。

ブラックコーヒーは、鼻で笑う。

「まんまと騙されたよ」

「君は焦って距離を詰めてくるだろう、と思つてね。どっちにしろ、飛び道具を持った相手に刀使いが出来る事なんて、それぐらいだろうしさ」

「それは、違うな」

「どういう事だい」

ブラックコーヒーは、近付いてくるへりの音に気付いた。

「俺のような偽者ならともかく、本物にはそんなの通じない。一も二もなく、な」

「だから、それはどういう？」

「俺の剣は西村のものだ。だが、俺が真伝を会得する前に、ブラインドネス 奴は姿を消した。驟雨の、いや、四季刀のオリジナルを追つて」

「オリジナル？ 魔導器にオリジナルが？」

「そうだ、桜吹雪春光。あれの所在がようやく判明した。他の三振りは全てアレの劣化コピーだ、十三代目柳生十兵衛が打った、紛い物」

「お、オリジナルは誰がもってるんだ？」

へりの音が激しくなってくる。

「西村だ。西村雅久が持っている。魔導器の本物 オリジン 古代遺産」 アーネンエルベ

「どうして、僕にそれを」

「本物 ブラインドネスを止める。奴はあれを使って 門 を開くつもりだ」

ブラックコーヒーは、へりから降ろされたストレッチャーに乗せられて回収されていった。ヘリコプターのローター音が遠ざかる。暴風が収まっていく。

「古代遺産……そして門か。彼があそこまで言うんだ、恐らくは靈知学関係だろう。外事四課としては無視出来ないだろうし、後で調べないと」

ともかく、と思いなおし。

「高いところにいかなくちや」
刀とナイフを回収して、本舎屋上へと向かう。
その後姿を見つめる人影には、気付かなかった。

* * *

ベネディクトは、無骨な装甲車　ストライカーという　に乗り込む直前、悪寒を感じて振り返った。後部の兵員用乗降ハッチから降りて、思索する。

（観測班の情報が本当なら、人外の数が徐々に減ってきている……向こうには消耗なんてないだろうし、あの変態紳士がやられたという情報も入っていない。少しおかしいわね）

簡易デスクに通信機器を乱雑に置き、コードが渦巻いているそこからへと歩み寄る。

「アキラの現在地は？」

周囲では慌しく人が駆け回り、倉庫へと近づく敵を撃退する銃声も近くから聞こえてくる中、班長はヘッドセットを外して答えた。

「本舎屋上のようなです。あそこからの狙撃で逃走経路を作る、と」

「狙撃？　じゃあ観測手は？」
スポットター

本来ならば狙撃手と観測手は二人一組で行動するのがセオリーだ。狙撃に意識を割く狙撃手を支援、または護衛する役割を持つ。

「はい、それが、要らないと」

「　　ははあ。術式を使った狙撃ね。以前のアレだわ」

合点がいったのか、ベネディクトは腕を組んで頷いた。

「でもそれ、アキラはどうやって逃げるの？」

* * *

左耳の骨伝導マイクロフォンのスイッチを、オンのまま固定する。
「こちら秋田です。用意はいいですか、指揮官」

屋上は風が強い。雨が弱まったのは良いものの、眼を開けているのも辛かった。

声に応答したのはデュドネである。

『お前の方はいいのか。一人残される事になるが』

「大丈夫です、お伝えしたとおり、驟雨は回収しましたから。後は学院長が何とかしてくれるでしょう。ただ、今はここを離れなければ数に負けてしまう。それに、これが僕のテストであるなら、相応の結果を見せなければあの人は納得しないでしょうし」

『テストだと？』

「……詳しくは後で。もう時間がありません。ポイントN03に向かって発車して下さい。」

彼がそう言うと、間もなく眼下にある倉庫から数台の装甲車が現れた。装甲車の後に続く多くの四輪駆動車を見ると、外事四課以外の人物もいるようだった。

（責任重大だ……失敗は許されないよな）

章は、そこでようやく、自身の右腕に付いている腕輪を見た。

学院長は、自分を裏切ったのか。騙していたのか。息子と言った言葉は嘘だったのか。様々な疑問が浮かんでは消える。

（僕はまだ、知らなきゃいけない事がいっぱいある。ここで死ぬ訳にはいかない。使える物は全て使う。彼の言った事を、確かめる為にも）

暗雲に覆われた空は、徐々にだが、遠くから晴れてきていた。

（インストール）

章が念じるだけで術式兵装は起動する。長方形の板が宙に浮かび、左右に翼を模るよう広がる。半透明の白い環が浮かび上がると、頭上に天使のような金色の環が生まれる。

瞳が、蒼く輝いた。

仲間の乗る装甲車が視界に拡大されて浮かび上がる。環の中には、パソコンのモニターに似た窓。

「指揮官、進行方向およそ二百メートル先に敵、扇状に広がってい

ます。備え付けの武器で対応して下さい」

『了解した』

「四号車、左側から来ます。キサラさん、動けますか？」

男の声が返ってくる

『タチカワは行動不能だ』

「了解、こちらから迎撃します」

オール・ガンズ・ブレイジング
(全砲一斉射撃)

章の両脇に広がっていた翼はミサイルと化して飛んでいく。着弾と同時に、白い爆発が起こる。爆炎と轟音が生まれた。

弾頭に対人外用の攻性術式が組み込まれている。衝撃波がびりびりと本舎の窓を揺らした。

「五号車、右前方、二時の方向より小隊規模の敵。先輩？」

『了解』

装甲車の屋根を開いて顔を出したベネディクトは、アサルトライフルであるM4A1を構えて撃った。白い光条を引きながら、着弾地点で放射状に広がる散弾となる。人外の体は穴だらけになって、効果的に殲滅していく。

(さすが先輩。順調だ)

そうしている間にも敵の襲撃は止まない。章は自身の右手側に鎮座する巨大な砲身を見た。対物障壁で作り上げた、術式榴弾砲。

アンドレアからの通信がある。

『このままいくと、敵陣の中に突っ込むんじゃないの！？』

了解、と返す。確かに丘陵地帯を通る為、そこが第一の難関だと予想は立てていた。

「術式兵装を使います。強力な閃光を伴いますので、総員、眼をやられないように」

エンジェル・ハイロウ

頭上の天使環が回転し始める。周囲の霊子を吸収し始めた為、白雪のような粒子が燐光を放つそれへと向かっていく。

デイスチャージ
「発射」

多薬室の機能により時速七二〇〇キロまで加速した弾体は、装甲

車群の進行方向へと着弾、明けてきた薄暗い闇を少しの間照らし続ける、太陽を生んだ。

目標とする敵の集団を殲滅できた事を確認する。ゴーグルによって眼を保護していたデュドネは進行の合図を出す。

木々の間を抜け、泥水流れる地肌を進んでいく。パワフルな車輻はそれで詰まるという事もなく、無事に先へと進んでいく。ひんやりとした空気を、ベネディクトは肌に感じた。

「地表に影響も与えず、風も音も生まない。敵だけを倒す……まるで、魔法ね」

それこそ、秋田章の求めた形である事はまだ知られていない。

そもそも彼は、出来る事なら誰も傷つけないと願っている。威力だけを求めるならもっと発展している可能性があるのに、それを選ばなかった。

それは将来、術式を攻撃でなく、もつと違う形……社会に密着した、人の役に立つもの、平和利用出来るものとしての未来図を描いている証拠だった。

今はそうする事適わなくとも、彼はその為の一步を踏み出そうとしている。

* * *

膝をつく。視界が歪んで、平衡感覚も曖昧だった。倒れ込む。

人間の限界を超えた術式を使った代償は大きい。今までそれは蓄積していて、表面化してはいなかったが、彼にもついに訪れた。

オーバーフローである。

「う……」

悪寒。嘔吐感に、倦怠感。押し寄せるそれらの波に、背を丸めて耐えた。ついに痙攣を始め、口の端からは唾液が垂れている

「かつ……は、」

思考が濁り、まともな判断力がなくなっていく。少し前まで何を

していたか、今の彼には解らない。

どうにか血路を開いた事も、無事に逃げられた仲間達の行方も、見届ける事は適わない。

そんな彼に、歩み寄る人影があった。

「ちよつと頑張りすぎじゃない？ まあ、貴方らしいけどさ」

アズマリア・エインスワースだった。彼女はフードを脱ぎ、素顔を露にする。勿論、章にとって彼女はここにいない事になっている。管制塔の上にあった事も記憶にないだろう。つまり、章にとって彼女はまだ学院にいるという認識なのである。

「システムの停止命令……は、意味ないか。とは言え、腕輪をつけたまま、よくここまで使いこなしたものだわ。お疲れ様、秋田君」
そう言つて、アイン アズマリアは懐から拳銃を取り出した。

「ゆっくりおやすみ」

引き金を引く。その銃弾は章を貫く という事もなく、その腕輪を破壊した。

リミッター
抑制器である。彼のそれは他のものと違い、彼の力を抑え込む役割を持っていた。今それが外され、肉体の調子は復調し、青白かった顔色も少しずつ戻り始める。

「システム・AA……君が今回知った事は、まだ真実の半分くらい、みたいよ？」

DDという隠れ蓑に潜んだ、本来の術式兵装の名を呼び。

意地の悪い笑みをして、彼女は章を見下ろした。

* * *

後日、体の調子が戻った章は、学院へと戻った。帰還と結果の報告である。この実習という名を借りたテスト期間にあった事を思い返しながら、眼の前にある大きな扉を押し開ける。

そこに彼がいた。シルマール・オルブライト学院長。白いシャツに赤いベスト、白髪交じりの髪を後ろに撫で付け、ゆったりと椅子

に座る、初老の男性。

「こんにちは、学院長」

「こんにちは。直接会うのはあれ以来ですね、章君」

章は挨拶もそこそこに、懐から拳銃を取り出した。相手には驚いた様子もない。

狙いを付ける。無論、学院長の額だ。

「私を殺しますか。それもいいでしょう」

「案外あっさり諦めるんですね。僕が撃てないでもお思いでしょうか。人の命を弄び、拳銃に人殺しまで人に命じるような、人でのなしを撃つのは、正直躊躇いがないんですが」

安全装置は、とうに外れている。銃のものも、彼のものも。

USPフルカスタムは、シャンデリアの光の下で鈍い艶を放つ。

「あそこへ送って正解だったようですね。間違いなく君は人として、戦士として成長している」

「おためごかしは要りません。貴方が僕の成長を望んでいるのなら、どうして最初にそう言ってくれなかったのですか」

そうすれば、こんな思いをする事もなかった、と。

「人に言われてした成長は、成長とは言いません。努力も同じ事です」

そこに自分の意思はない、と。

学院長は言って、章の右腕を見た。

「首輪は外れた。もう君を縛るものは何もない。私は君を観測者^{プレイヤー}として育て上げた」

「また意味の解らない事を。僕のせいで沢山の人が死んだんです。

そして僕を造ったのは貴方だ。僕に役割を与えたのも、貴方だ」

「しかし動いたのは君自身だ。君の求める未来の為にね。違いますか？」

問いかけには答えず、銃を握る手に力を込める。それは決意の表れでもあった。

「まだ貴方に、驟雨は渡さない」

「ほう？」

片眉をあげて、おどけた調子の学院長である。

「僕にはまだ知りたい事がある。知らなきゃいけない事がある。それを確かめてから、貴方にアレを渡すべきかどうかを決める」

「私に歯向かう、と？」

「僕の命を握ってしようが、絶対服従の命令をもっていようが、関係ない。僕は僕の意味で生きている。貴方の道具では、決して無い」
大仰に、学院長は何度も頷いた。

「よろしい。大変よろしい。あの頃の大人しかった君の面影は微塵も無い。素晴らしい、ここまで化けるとは」

「なっ……」

「いいですよ、君の好きにきなさい。あの驟雨としても、私は君が持っているべきだと思ったのですからね。あれは対術士用にうってつけです。第二術式とあわせれば、更に」

「貴方という人は！ どこまでも人を道具扱いか！」

引き金を引かない章に、畳み掛けた。

「君は術式をなんだと知っているのです？ アレは本来人間が扱うべきものではない、それを君は最も高次元で活用している、その君にこそ聞きたい」

喜々として、学院長はそう問うた。

「術式とは、心の力です。貴方は知っていますか、術式の可能性と人の心の強さを。心が強ければ人は曲がらない。絆があればより強固だ。そして、勇気があれば、前に進む力になる。術式はそれに多少の力を貸してくれるだけの、協力者だ」

「詭弁ですね。青臭くて幼い。その言葉にどれだけの力があるでしょう、いいや、ない。机上の空論でしょう。そもその問題として、君が人を語る事が間違いだ。人間ではないクセにね」

核心を付いた満足心からか、学院長の口元が嘲笑に歪んだのを、見逃さなかった。

「貴方が言うか。けれど、そうだ、僕は人間じゃない。人間にはな

れない。けれど、人間に近づく事は出来る。受け入れてもらえるか解らないけれど、だからこそ、人間を守る事に躊躇いはない」

銃を仕舞う。去り際に、こう言い残した。

「さようなら、お父さん。もう会いたくありません」

ばたん、と扉は閉じられた。彼が最後に示したのは拒絶。しかし学院長は満足げに椅子に体を預ける。

「小鳥が巣立つ、か。まだ子供だと思っていたのに、一端の口を利くようになった」

学院長の場所から左手側にある部屋への扉が、開く。

姿を見せたのは紳士服のミハエル・グッドマンだ。

「よろしかったのですか。行かせて」

「ええ。子が親の庇護を拒み、家を出るのは当然の事です。これから彼は更に成長するかと思うと、期待に胸が膨らみますね」

「いえ……しかし、十六夜驟雨は。あれがなければ魔導器の原理解明には」

「良いのです、所詮あれも偽物。人の作った紛い物に過ぎません。

やはり求むるべきは、その元祖と言ったところでしょうか」

「と、言いますと」

「貴方にもうひとつ、仕事を頼みたいのです」

そこで学院長は、一度言葉を切った。

「オリジナルの回収を」

* * *

久しぶりに顔を見たクラスメイトに、章は微笑んだ。

「た、ただいま、アズマリアさん」

眼の前には金髪碧眼の女子生徒がいる。制服を生真面目に着こなした、一条縛りの美しい優等生である。

「久しぶりね、秋田君。無事に帰ってこれたようで何よりだね。実

習は為になつたかしら？」

「あ、うん。それなり、かな」

「何よ、煮え切らないわね。はっきりしたらどうなの。男の子ですよ」

「相変わらず手厳しいね。でも、そういうところも君らしさなのかな。帰ってきた実感があるよ」

アズマリアは数歩後ずさった。

「なっ……あの秋田君が気の利いたセリフを!？」

「し、失礼な！ 僕そこまで気の利かない人じゃないよ！」

「いいえどうかしら。以前私が眼の前でわざとらしくハンカチーフを落としても拾ってくれなかったじゃない」

「何でわざとそんな事したの？」

「フン、貴方を試したのよ」

「何で僕試されてるの……まあいいか、とにかく、これ。返すよ」
そう言つて、章は胸ポケットからエーデルワイスの髪留めを取り出した。

「少し汚れちゃったけど。これのおかげで、僕は沢山勇気を貰った。助けられた。一人じゃないって思えたんだ。ありがとう、アズマリアさん」

彼女はそれを受け取ると、さつと髪に挿した。

「どういたしました。力になったようで何よりだわ」

章は頷き。

「それじゃ、僕はもう行くよ」

「え、え？ どこに行くの、君はもう帰ってきたんじゃないの？」

彼ははにかんでそれに答える。それは彼女の好きな顔だった。

「僕、居場所が出来たんだ」

アズマリアと別れ、迎えが待っている裏口へと辿り着く。

すると、そこにはベネディクトが待っていた。護衛兼運転手である。まだ章が免許を取っていない為だ。

乗用車に寄りかかって腕を組んでいるのだが、章が来てそのま
ま口を開いた。

「もういいの？」

「はい、やるべき事は済みました。次に来た時は、色々と決着がつ
いているでしょう」

「何に？」

「僕の状況とか、気持ちとか……あの人との関係とか、です」

あの人というのは学院長だろう、と彼女には解った。

「そ。じゃあ、行きましようか」

ああ、と呼び止める。振り返る彼女に、章は言った。

「先輩。僕、これからも先輩に色々教えてもらいたいです。僕は先
輩から色んな事を学びたいし、教えてもらいたいです。……駄目
でしょうか？」

それに彼女は淡々と返した。

「こんな仕事だし、私は多分長生きしないわよ。それでもいいなら
ついてらっしゃい」

良かった、と胸を撫で下ろす。変な子ね、と彼女は言った。

山道を下れば街がある。そこにはあの仲間達がいる。デユドネ、
アンドレア、キサラ、ジェイク、ラヴ・レターにキッド……彼の脳
裏に一人ずつその面影が浮かぶ。

そうしてようやく、実感する。

「僕は、もう独りじゃない」

冷たい雨はあがって。秋晴れの下、彼は一步を踏み出した。

第十八章 雨があがった後に（後書き）

これを書き直す事にしました。同タイトルで改訂版としますので、こちらにも消さずに残しておく事にします。改訂版もよろしく願います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1096k/>

驟雨

2011年10月9日22時16分発行